

國立政治大學日本語文學系

碩士論文

『今とりかへばや物語』における葛藤
—親の決定するジェンダーという視点から—



指導教授：中村 祥子 博士

鄭 家瑜 博士

研究生：麥 壹 撰

中華民國 103 年 07 月

要旨

『今とりかへばや物語』の成立年代や作者は不明であるが、成立は凡そ十二世紀後半、院政期も後白河院以降から『無名草子』に至る二、三十年のことと推定できる。

物語主な内容は、顔が瓜二つ活発な姫君と内気な若君という二人のきょうだいの性格や才能などが人々の社会既成の認識とぶつかることで、親も世間の視線を気にし、二人の子どもを男女入れ替わったままの状態で殿上・出仕させることを決定する。異装するきょうだいは宮中生活の中において、社会の既成概念と衝突することを通して、自分の身が「異常」だと気づき、嘆きつつ日々を送っていくという設定から物語は男女の境界の問題に展開してゆく。このようなジェンダートラブルによって、作中の親子関係に一連の葛藤が引き起こされていることが『今とりかへばや』物語世界に散見される。まさに誰が男らしさ／女らしさを決めるかという疑問を鋭く問い直しているのだと言えよう。

本論文は四章からなるが、まずは第一章では、研究動機と目的および先行研究、研究方法について述べる。また、第二章では、物語に現れた家々の親たちの「視線」や「行為」を分析し、親たちの愛情と葛藤に注目した。親たちの愛情と私欲の葛藤の共通点とそれぞれ異なる特徴を確認した。続いて第三章では、子どもたちが恋、演技、世に対する「葛藤」を中心に検討することで、子どもたちの心理的と身体的な糾結を分析してみた。最後に、本論文の検討対象とする親子の愛情と負わされた社会的役割によって夫々人物の外部と内部の衝突状況を纏め、さまざまな葛藤が組み合わせられた『今とりかへばや物語』は、何を訴えようかを究明してみたい。

キーワード：今とりかへばや物語、親子関係、葛藤、ジェンダートラブル、性役割、アンドロジナス、世、異装、視線、見る／見られる

摘要

『換身物語』其成立年代與作者皆不明，推測約於十二世紀後半成立，也就是日本院政後白河院在位期間至文學評論集『無名草子』出現這二、三十年間。

物語的內容主要描述平安末期的高位大臣家膝下有兩個長得毫無二致的一雙兒女。活潑外向的千金與內向敏感的公子其性格與才能皆與當時貴族社會認定的規範與普遍認知相互衝突。雙親因為在意社會眼光因此應循著社會的誤解將千金與公子的社會性別互換，使他們分別男扮女裝、女扮男裝先後參加成人式、參政、甚至是入宮為妃。變裝後入宮生活的千金與公子，透過與同性／異性的相處漸漸認識到自己與世間認定的性別概念相違，物語就在他們陸續發現自身在社會規範下性別之「異常性」哀嘆著人生的日子展開一連串對於「男」／「女」境界線之詰問。『換身物語』中隨處可見由上述之「性別惑亂」(Gender Trouble)在作中的親子關係中引發作中人物身心內外部的糾葛情感。通過此設定，尖銳地提出「一個人的性別究竟可以由誰來決定」的大哉問。

本論共有四章。第一章悉述本論文之研究動機目的、文獻探討與研究方法。第二章針對文本中各家庭的雙親，分析其「視線」與「行為」，探究作中雙親們在親情與私欲的糾葛下的共通點與相異點。第三章則針對文本中各家庭的孩子，分析其「戀愛」、「演技意識」及對「世間的執著」等要素，確認孩子在親情與性別惑亂交錯作用下心理與身體上的糾結。最終章則總結本論文目標—即探究作中人物在親子情感與主動／被動背負的社會角色中，相互矛盾產生身心內外部的衝突與糾結情況。更進一步探討『換身物語』透過各色各樣糾葛情感的描寫，背後含藏的社會諷刺與控訴究竟為何？

關鍵字：換身物語、親子關係、糾葛、性別惑亂、性別角色、兩性俱有、世間、異裝、視線、觀看／被觀看

致謝

能夠完成這本論文，首先要感謝我的指導教授中村祥子老師，回想起每個星期到老師研究室報到協助我釐清、歸納思路邏輯的過程，一次次都是完成這本論文重要的軌跡，若不是您不厭其煩地耐心指導、甚至犧牲睡眠陪我熬夜，課堂外給予關愛支持與鼓勵，一定無法完成論文。更重要的是老師教會了我如何用嚴謹的態度和戲劇化的想像快樂地去享受文學，是一輩子受用的方法論，能夠作為您的學生，我很榮幸。校內指導老師--從一年級帶我們上研究方法、上代古典文學的鄭家瑜老師，您讓我了解到面對文本扎實的基本功乃是批判的立基點，也從萬葉、記紀課程裡體會到「溯源」的重要性與樂趣，課堂外在您研究室工讀的日子更是看見您值得仿效做學問認真的態度，也謝謝您一路的關愛陪伴我們走過四年來的日子。感謝黃錦容老師，您對近現代文學的通透了解與社會批判性，為我打開更寬廣的文學視野與思考。感謝徐翔生老師，除了教會我們如何透過作品去整理歸納出日本思想，謝謝您對我論文不吝提供寶貴的意見。另外特別要謝謝吉田妙子老師，雖然沒有機會上您的課，但仍記得碩一時您找我們聊天時問我們感興趣的研究題目後，隔幾天送了我『椎名林三、安部公房集』及坂口安吾『桜の森の満開の下』兩本書，謝謝您。

還要謝謝這段重回校園日子裡遇到的人們。感謝賴庭筠助教，我的良師益友，謝謝妳讓系辦變成一個可愛的工讀場所，也謝謝妳很照顧我們這些學弟妹為我們安排各種工讀讓我們能更無虞的念書。感謝陳美惠，我最好的戰友，那些一起熬夜讀書聊天說笑的日子、一起住在莊九的日子謝謝妳的照顧。感謝吳安奇、李育晝，三個獅子座女人湊在一塊就是一個光榮偉大的吵雜氣場，無論是跟妳們聊目標理想還是有趣好玩的事都好快樂抒壓。感謝陳奕錚學姊、洪靖雯、林子婷、賴宥羽學妹、鍾佩雯學妹，組裡的寂寞組裡懂，謝謝你們同組惺惺相惜的每一場的苦水聊天與去日本找資料時分享的資訊。感謝幽默一哥陳冠甫、可愛的明雅、風

一樣的冠廷、欣瑜、大寶、卓恩、政燁、Ale……，還有好多人，你們都是我在學校裡美好的回憶。

另外也要謝謝一路上幫忙過我的同事、親友。Teddy，謝謝您鼓勵我不要放棄學業重回學校；何大何處長、Jerry、Nick、Peggy、Jacky&Annie 夫婦、Sammy、T. I、Jessica，謝謝你們在休學那段工作期間的照顧與幫忙與回學校後各種的加油打氣，真的感激在心。感謝大姑姑在家裡遇到災變的時候及時的幫忙。感謝老馬、鐵爸在休學期間熱心地介紹口譯案子給我和鼓勵。感謝從木新路一路一起住到永和近三年的室友朱詩迪，不管是開心還是難過謝謝妳總是情義相挺。感謝陳科源先生，謝謝你在 2012 年間前往日本前的陪伴和幫忙。感謝時永新所長，謝謝您或嚴格或幽默地督促我的散漫，這篇論文才得以加工完成成功上傳。

最後要感謝我的家人們，感謝你們漫長的等待，包容我花了這麼多時間完成學業。感謝蔡賜恩、吳聲點、張立慈三顆人生中的胖星球，謝謝無論身在何地都陪伴著我成長、在遇到挫折時總是第一時間伸出援手。感謝林宗衡先生，謝謝這幾年無論美醜善惡陪伴在我身邊的美好日子。

目次

第一章	序論.....	1
第一節	研究動機及び目的.....	1
第二節	先行研究.....	5
一.二.一.	親子関係に関する先行研究.....	11
一.二.二.	ジェンダーに関する先行研究.....	15
一.二.三.	異装に関する先行研究.....	25
第三節	研究方法.....	29
第二章	親たちの葛藤.....	33
第一節	左大臣家―女君・男君への愛情.....	33
二.一.一.	女君への愛情.....	33
二.一.二.	男君への愛情.....	37
二.一.三.	まとめ.....	53
第二節	右大臣家―娘たちへの愛情.....	54
二.二.一.	四の君への愛情.....	54
二.二.二.	姉たちへの愛情.....	60
二.二.三.	まとめ.....	61
第三節	吉野の宮家―吉野の姉妹への愛情.....	63
二.三.一.	吉野の姉妹への愛情.....	63
二.三.二.	まとめ.....	68

第三章	子どもの葛藤.....	70
第一節	恋に対する葛藤.....	70
三.一.一.	女君の恋.....	71
三.一.二.	男君の恋.....	73
三.一.三.	まとめ.....	78
第二節	子への愛情.....	78
三.二.一.	女君の嘆き.....	79
三.二.二.	男君の嘆き.....	80
三.二.三.	宰相の中將.....	81
三.二.四.	まとめ.....	83
第三節	世に対する葛藤.....	83
三.三.一.	「世の常」に拘る人々.....	86
三.三.二.	「世づかぬ」に苦しむ女君.....	94
三.三.三.	俗世と聖地.....	102
三.三.四.	まとめ.....	105
第四章	結論および今後の課題.....	106
附表.....		110
参考文献.....		123

第一章 序論

第一節 研究動機及び目的

『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』¹の解説によれば、『無名草子』の評言と『風葉和歌集』の採歌状況を総じて見ると、十三世紀後半までに『とりかへばや物語』は古本・今本という両作品が存在していたことが確認される。その後、古本が散逸してしまい、これを改作したものは現在私たちが手にする『今とりかへばや物語』²（以下、『今とりかへばや』と略称する）である。作者や成立時期に関しては、古本、今本とも確かなことは分からない。古本については、『無名草子』の記述から、天喜三年（1055）以降の成立と目される『玉藻』より後の成立と考えられるのみで、不明と言うほかない。今本の成立はおおよそ十二世紀後半、院政期も後白河院以降から『無名草子』に至る二、三十年のことと推定できる。古本の具体的な内容は明らかではないが、『無名草子』によれば、古本も今本も男女が入れ替わって男装・女装のまま生きていくという設定は同じであったらしい。

アンドロジナス（androgynous）、または男装・女装に関するモチーフは、早くも『古事記』に見られる速須佐之男命が天に参上するとき、天照大御神は「即解御髮、纏御美豆羅而、乃於左右御美豆羅、亦於御鬢、亦於左右御手、各纏持八尺勾璫之五百津之美須麻流之珠而」³と、男装して速須佐之男命を迎える場面が描かれる。また、小碓命が熊曾建を征伐するとき、「爾、臨其楽日、如童女之髮、梳垂其結御髮、服其姨之御衣・御裳、既成童女之姿、交立女人之中、入坐其室内。」⁴と、女装して熊曾建を油断させて殺した記事がある。ほかに『日本書紀』には神功皇后が三韓征伐に際し男装する記事がある。平安時

¹石埜敬子校注、訳『新編古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』小学館、2002. 04

²同前掲注 1

³山口佳紀・神野志隆光校注、訳『新編古典文学全集 1 古事記』1997. 06 小学館、P. 56

⁴同前掲注 3 p. 218

代になると、美しい男性は女性として幻想され、また、才能のある女性が男の身として生まれなかったことを残念がられる描写を文学作品に窺うことができる。例えば、『源氏物語』に頭中将が男性の光源氏を「女にて見たてまつらまほし」（帚木巻）⁵たことや『紫式部日記』に紫式部が兄より先に史記を覚えたので父為時が「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」⁶と嘆いたなどの記事がある。ほかに『土佐日記』の冒頭文「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」⁷男性である作者紀貫之は女性に仮託して日記を展開している。この日記文学や物語文学が作家になった時期は、成熟した平安貴族文化のなかで「男」と「女」の境界線はどこにあるかというジェンダーに関わる問題が意識され、男女の境界への問いが文学作品に表現されているとも言えよう。

平安末期に現れた『今とりかへばや』は、ジェンダーにまつわる問題を中心に描かれたものだと言えよう。活発な姫君と内気な若君という二人のきょうだいが人々の社会既成の認識とぶつかることで、姫君を男に、若君を女と思い込まれていく。親も世間の視線を気にし、二人の子どもを男女入れ替わったままの状態に殿上・出仕させることを決定する。異装するきょうだいは宮中生活の中において、社会の既成概念と衝突することを通して、自分の身が「異常」だと気づき、嘆きつつ日々を送っていくという設定から、物語は男女の境界の問題に展開してゆく。物語後半においては、姫君の妊娠によって、二人は再び互いに身を取り替えて宮中に戻る。そして、今度は世間の規制と軌を一にし、一家は大団円を迎える。一見すると荒誕な筋立てと思われる物語であるが、この男女の入れ替わりというモチーフこそが、まさに誰が男らしさ／女らしさを決めるかという疑問を鋭く問い直しているのだと言えよう。

⁵阿部秋生ほか校注、訳『新編古典文学全集 20 源氏物語①』1994.03 小学館、p. 61

⁶藤岡忠美ほか校注、訳『新編古典文学全集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』、小学館、1994.09 p. 209

⁷菊地靖彦ほか校注、訳『新編古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』、小学館 1995.10 p. 15

ところで、この作品は石埜敬子氏の指摘するように「『今とりかへばや』は、『夜の寝覚』や『狭衣物語』などと異なり、文学研究以外の世界から注目を浴びることによって、再評価がなされるようになった作品である。」⁸。文学研究以外の世界から注目が先行されており、文学研究の世界では数十年注目されてはいなかった。例えば、1983年に氷室冴子は『ざ・ちえんじ!』⁹という副題に「新釈とりかへばや物語」と題している小説を発表し、1988年に山内直実がこれを漫画化¹⁰したことで、男女が入れ替わる異装物語の内容は若者や一般民衆に紹介されることとなった。さらに1991年に河合隼雄が『とりかへばや 男と女』という本を発表し、次のように指摘する「男一女の軸の解体と再構成という点から言えば、『とりかへばや』はまことにぴったりの話である。男女の役割が現在よりはるかに固定的に考えられていた時代を舞台として、男女の取りかえを主題とした物語が語られるのだから、この細部についてよく検討してみることは、現代人のわれわれにとっても大いに意味のあるところではなからうか。つまり、これを日本中世における奇異な話として、単なる好奇心をもって読むのではなく、現代に生きるという点において、示唆を与えてくれるものとして読むわけである。」¹¹、このように河合は、『今とりかへばや』の現代における価値を示した。これとほぼ時期を同じくする90年代には、『今とりかへばや』についてのジェンダー研究を代表する菊地仁氏、神田龍身氏、安田真一氏の論文が次々と発表され、物語の再評価に多大な影響を与えた。

現代は、ファッションのユニセックス化や美容工業の発展につれ、男女の性的徴表の差異は埋められつつある。加えて、医療技術の発達のもとで、自分の性別を変えること(トランスジェンダー)はもはや不可能なことではない。ま

⁸石埜敬子『今とりかへばや』—偽装の検討と物語史への定位の試み—、『国語と国文学』82(5) 所収、2005、05、東京大学国語国文学会 p.177

⁹氷室冴子『ざ・ちえんじ!』集英社文庫—コバルトシリーズ、1983、02

¹⁰山内直実『ざ・ちえんじ!』白泉社、1988、12

¹¹河合隼雄『とりかへばや 男と女』、新潮社、1991.01 p.16

た、1970年代以後に盛り上がりをもせた同性愛運動によって性差の境界が問い直され、男女の性的徴表の差異が曖昧になった状況のもとで、トランスジェンダーや異装が徐々に社会に受け入れられるようになった風潮のもとで、その研究のはじめにおいて「奇変を好むや、殆ど乱に近づき」¹²と男女の入れ替わりが批判される対象であった『今とりかへばや』に対する、読みの姿勢が変ってきたのは当然のことであろう。

『今とりかへばや』を考える上で、ジェンダーの問題はおろそかにできない。例えば、ジェンダートラブルに関わる問題が肉親において発生した場合、それを単に奇異な事件として取り扱うことはしないだろう。ただ、肉親に発生したジェンダートラブルに対しどのような態度で付き合うかということを決める過程において、互いに葛藤や心理的糾結を起こすことは不可避の問題だと言えよう。この点に関心を持ちながら物語を顧みると、性役割が社会の既成概念と衝突することによって、作中の親子関係に一連の葛藤が引き起こされていることが『今とりかへばや』物語世界に散見されるのは看過しがたい。例えば、題名の「とりかへばや」というキーワードをテキストに探してみると、物語の主人公二人のきょうだいを「取り替えたい」のは他でもない、父親権大納言（後の左大臣）である。にもかかわらず、父は嘆きながらもきょうだいを誤認させたまま公的な場で紹介するのである。父の行為は、子どもの性別の交換の決定的なシーンでもある。この親による決定は、後にきょうだいの嘆きに転換される。男女を誤認させたまま公の場に引き出すという親の行為は、愛情によるものなのか、それとも自分の利益のためなのか、あるいは「世」に流されて已む無くなのか。愛情、自分の利益、「世」へ流されることによって、親が子供を縛るという問題が、作中に現れたほかの親子関係も同じ表現があるかどうか、考えてみたい。

¹²藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇』、東京開成館、1905.10。後に秋山虔ほか校・注『国文学全史2 平安朝篇』所収、平凡社、1974.02 p.634

以上のような問題点を持ちながら、『今とりかへばや』の親子関係を注目しつつ、ジェンダーの権力作用と作中人物の私欲と意志は、きょうだいたちのジェンダーを含む自己認識に如何に作用しているのかを究明してみたい。

第二節 先行研究

只今聞えつる『今とりかへばや』などの、本にまさり侍るさまよ。何事も物真似びは、必ず本には劣るわざなるを、これは、いと憎からずをかしくこそあめれ。言葉遣い・歌なども、悪しくもなし。おびたたく恐ろしき所などもなかりめり。¹³

『今とりかへばや』研究のはじめは、上に引用した①鎌倉初期『無名草子』の評言に遡ることができる。当書は物語の趣旨のみならず、人物、歌それぞれの批評もみられる、物語を総体的に評価したものであるが、その「をかしくこそ」ある部分については、詳しく指摘されることはなかった。

その後、『今とりかへばや』に関する研究は長い間ほとんど絶えてしまっていた。江戸時代には②伴資芳と③安藤為章などの随筆集¹⁴、または物語写本に筆写者が添筆した意見¹⁵など、『今とりかへばや』に関する記事は再び出現したけれども、いずれも感想的な片段であった。明治時代になると、④岡本保孝氏が「取替ばや物語考」¹⁶において注釈・本文批判・出典・年立・解説・系譜などのパートに分けて詳細な分析を行った。これは初めて研究書として纏められたもので、『今とりかへばや』研究史において無視のできない業績であった。ほかに同時期にある研究成果として、⑤黒川春村氏の歌を中心とする内容のも

¹³ 桑原博史校注『新潮日本古典集成 無名草子』、新潮社、1976. 12 p. 83-84

¹⁴ 伴資芳『閑田耕筆』享和元年（1801）刊。安藤為章『年山紀聞』文化元年（1804）刊。ともに後『日本随筆全集第六巻』所収、国民図書株式会社、1927. 07

¹⁵ 例えば、『取替波也物語類標』と小山田（高田）与清の『取替早詞寄』など索引としてのもつと俊明本系統に多く付されている序文は有名である。

¹⁶ 岡本保孝著「取替ばや物語考」室松岩雄編『国文註釈全書十五』所収、1910、国学院大学出版部。後に折口信夫『国文学註釈叢書 12』所収、1929. 08、名著刊行会

の¹⁷と⑥長谷川福平氏の作品解説的なもの¹⁸がある。1905年に⑦藤岡作太郎氏が『国文学全史平安朝篇』において「されど筆法の源氏と巧拙相異なるは、免るゝこと能はず。人情の微を穿てるところなく、同情の禁じ難きところなく、彼此人物の性格十分に發揮せず、ただ叙事を怪奇にして、前後応接に暇あらしめず、つとめて読者の心を欺騙し、眩惑して、小説の功成れりとす。その奇変を好むや、殆ど乱に近づき、醜穢読むに堪へざるところ少からず。敢て道義を以て小説をせんとするにあらず、その毫も美趣の存せざるを難ざるなり。殊に甚しきは、中納言が右大将の妻の四の君と通じ、また右大将と契るところなど、ただ嘔吐を催ほすのみ。」¹⁹と評されて以来、昭和前期まで²⁰に頗る大きな影響を与えた。これは『今とりかへばや』の代表的なマイナス物語観と見做すことができよう。⑦の藤岡評と異を唱えたのは⑧田辺つかさ氏である。田辺氏は⑦藤岡氏の厳しい批判に反し、『今とりかへばや』の人情主義に着眼した上で、物語を次のように評価した。

今取りかへばやの特色は、勿論その運命悲劇的なところにあるのであって、濃艶華美な、官能的爛熟相と相まって、内的な人生への苦悶にあると思ふ。就中かの巻末の、母と子のくさびの挿話の如きは、今取りかへばやに改作した筆者のみがもつた人情主義の出現であらうと思はれる。とりかへばやに於ける官能的な頹廃美と、怪奇な構想の混線との中に、運命の決定を一線太く描いて、それに悲劇の特色を与へた改作者は、この宿命観と悲劇的哀傷とを、唯一の依拠として、純正物語へ近づかしめようとしたの

¹⁷黒川春村「墨水遺稿」、1899. 07、吉川半七。後に横山重、巨橋頼三『物語草子目録・前篇』所収、大岡山書店、1937. 07

¹⁸長谷川福平『古代小説史』富山房、1903. 09

¹⁹同前掲注 11、p.634

²⁰例えば池田亀鑑氏「日本文学書目解説(二)平安時代(上)」『岩波講座 日本文学』所収 1932. 01、五十嵐力『平安朝文学史 下巻』岩波書店、1939. 07。宮田和一郎『物語文学攷』、文進堂、1943. 03。ほぼ「怪奇不自然」、「病的」、「文学の末路」、「淫猥露骨」などと評してある。

であると思ふ。「人情の微を穿てるなく、同情の禁じがたきなし」といふやうな藤岡博士の批評は、修正されなければならない。²¹

この後、1942年⑨塩田良平氏をはじめ『今とりかへばや』における心理描写の巧みさと親子関係に注目し、特に作品における母性描写を高く評価した。

氏は次のように述べている。

この物語のテーマは勿論男女をとり違へた喜悲劇から生ずる事件の紛争にあるので、かなり怪奇な非現実的な一面があり、そこに末期の平安朝文学が当然赴くであらう「筋の変化」に中心をおきすぎる点があり、その故この小説は末期的頹廢的傾向を有してゐると謂はれるが、部分的には立派な心理小説になつてゐる。(中略)又、女性心理としては、男装の中納言及び見破られた後の中納言が浮気な宰相を疑ひながら、次第に女心に変化して行く過程は実に優れてゐて、男性作家では書けないほど女性心理を追究してゐる。末章、中宮が宇治に残して来た愛子をかき撫でながら、それとなく母の健在を知らせる邊りは、源氏にすらみることを得ざる当代随一の母性描写であり、写実に徹して読者をして泣かせずにはおかない。²²

続いて、1947年⑩中村真一郎氏は物語の親子関係のみならず、夫婦関係にも言及した評言を示している。

²¹田辺つかさ「取りかへばや物語の怪奇性その他」『鹿児島日本文学』(5) 所収、1932.05、鹿児島日本文学研究会

²²塩田良平『古典の伝統』育英書院、1942.04、p.140-142

人はこの不出来な物語の中に、当時没落貴族の親子や夫婦間の素朴で強烈な恩愛の絆を、芸術の外で知ることができる。歴史学派ならば、そこに近代人間感情の仄かな夜明を発見するであらうまでに。²³

1950年、⑧田辺⑨塩田⑩中村三氏の説を受け、⑪鈴木弘道氏は「『とりかへばや』に現れた愛情—倫理的な愛情を中心として—」²⁴という題名の論文で、『今とりかへばや』の中における愛情の問題—倫理的な愛情の問題に研究史上はじめて言及した。そして『今とりかへばや』において愛情が根本的な要素であると主張した。氏は⑪の論文で、以下のように述べている。

とりかへばや物語は、左大臣の、子に対する愛情が最も根本的な要素をなし、そこから兄妹愛が生れて物語が発展し、最後には、宇治の若君に対する大将（女）の愛情を大きく点出して結末を飾るなど、倫理的な愛情が主流となつてゐると言つてもよいであらう。何か事件が起れば悲しんだりする親を登場させるのも、そのやうな一貫した主流から自然に現れた趣向ではなからうか。しかしながら、退廃的な社会の現実を反映して成つたこの物語は、他方に於て猥雑な性生活の乱倫を取扱つてゐることを思ふと、些か奇異の感なしとせず、それだけに、この時代の退廃的な文学精神の中にも家族的な人間観が存在することを認めねばならぬと共に、その倫理的な愛情描写はこの物語の特筆すべき性格であると考へねばならないであ

²³中村真一郎「とりかへばや物語」小田切秀雄『古典発掘』所収、真善美社、1947.08、p.89

²⁴鈴木弘道『『とりかへばや』に現れた愛情—倫理的な愛情を中心として—』日本文学懇話会『日本文学教室』(9)所収、1950.09、蒼明社。後に鈴木弘道『平安末期物語についての研究』所収、赤尾照文堂、1971.08

らう。²⁵

これに対し、池田亀鑑氏が⑩鈴木論文の講評として、

この物語の作者は、いかなる人間の真実を、いかに忍がかうとし、かついかにに忍がいたかといふ主題と構想の根本に遡り、そこからすなほに見直してゆかねばならない。(中略) この論文の筆者は、倫理性を構成する要素としての愛情問題をば、さういふ根本的な立場に高めて検討してゐる。

²⁶ (下線は筆者による)

と述べ、池田氏をはじめとする諸氏が⑩鈴木説を支持した。⑩鈴木論文によって、これまで主流だった⑦藤岡作太郎の示した「醜穢読むに堪へざるところ少からず」という、『とりかへばや』観が覆ったといってもよい。このときから『とりかへばや』研究に対する態度は徐々に変わってきたと言ってもよいだろう。最も顕著な変化と言えるのは、『とりかへばや』を題名とした多方面に亘る作品論的な研究が次々と発表されたことである。

現在、『とりかへばや物語』研究の史的推移、現況、動向、展望課題などについて、さらに筆者は研究史の中で扱われた論文と従来全般的に論じられてきた研究テーマは次のようにまとめられるだろう。

一・伝本研究及び本文研究

1. 注釈と本文研究

²⁵ 鈴木弘道著『平安末期物語についての研究』赤尾照文堂、1971. 08、p. 336-337

²⁶ 池田亀鑑氏は同雑誌の審査委員で、鈴木氏論文に対し講評を添えた。その内容は鈴木弘道著『平安末期物語についての研究』、赤尾照文堂、1971. 08、p. 340 所収

2. 文章・文体

二・作品論的研究

1. 構造、構成、形成論

2. 主題論

3. 表現論

4. 素材論

5. 人物論

5-1 作中の人物像

5-2 家族愛や愛情について

6. 他者論：見る／見られる関係

7. ジェンダー論：変身・異装をめぐって

8. 物語史への定位

9. 享受論・引用論

9-1 『源氏物語』の享受をめぐって

9-2 『有明の別れ』『夜の寝覚』などとの比較

10. 和歌をめぐって

11. 「世」という言葉をめぐって

三、作者論

大概、このような分野において、数多くの論究がなされているが、その中で、筆者が興味を持つのは「5-2 家族愛や愛情について」に関わる親と子、きょうだいの間に見られる愛情の諸相と「7 ジェンダー論」に関わる性役割、社会規範、または権力構造の問題である。本論もこの二つの点について考察を行った。以下に、この問題意識に深く関わる「親子関係」に関する先行研究、「ジェンダー」に関する先行研究、「異装」に関する先行研究を見ておくことにする。

一. 二. 一. 親子関係に関する先行研究

『今とりかへばや』の愛情に関する研究は、上述した⑧田辺つかさ氏⑨塩田良平氏⑩中村真一郎氏のそれぞれが次々と物語の「人情主義」「心理描写」「母性描写」「親子や夫婦の恩愛の絆」要素を強調しており、親族間で互いに抱いている愛情という点に早くから注目されている。前述⑪鈴木弘道氏が1950年に発表した「『とりかへばや』に現れた愛情—倫理的な愛情を中心として—」²⁷では、この物語は倫理的な愛情を主流としたものとなっていると論じた。その後、⑫大原一輝氏が女君に用いられた「あはれ」という言葉を考察した結果、「之には（筆者注：あはれ一語を指す）父大臣、若君、男主人公等に対する親子姉弟間の肉親的愛情や同情を意味するものが多く注目されるほか、四君や大君に対する異性的愛情を示すものも少ない（中略）女主人公が之等の人々に対してそぐ愛情と相俟って従来この物語に於ける「愛情」が注目されて来てゐる所以も明らかに見出し得るのである。従って此の点でも矢張り女主人公が「あはれ」中心に置かれてゐるといへるのである。」²⁸と述べ、『今とりかへばや』の肉親的な愛情は「あはれ」という精神に富み、しかも女君を中心に表

²⁷同前掲注 23

²⁸大原一輝「とりかへばや物語の世界」『語文研究』（13）所収、1961. 10、九州大学国語国文学会 p. 18

現されたと指摘した。その後、鈴木氏はその延長線を更に開き 1971 年に氏は
⑭『とりかへばや物語』に現れた愛情に対して、全面的な考察を行った結果、
『今とりかへばや』物語における愛情を以下のようにまとめた。

【頽廢的な愛情】

- (1) 恋愛（異性愛）
- (2) 同性愛

【倫理的な愛情】

- (1) 肉親の愛
- (2) 親子の愛
- (3) 兄妹愛
- (4) 姉妹愛
- (5) その他

【夫婦愛】

【仇敵その他に対する愛】²⁹

鈴木氏は、左大臣家、右大臣家、更に吉野の宮家における親子愛・兄妹愛・
姉妹愛・祖父愛・夫婦愛などの愛情関係を検討したうえで、「深い盲目的な愛
情」、「理性的な愛情」、または「慈悲精神」が物語の親子愛情を土台として
あることが分かる。しかし、鈴木氏の指摘は人間性の光明面を強調し過ぎてお
り、人間には利己的な心があり、利益を求める行動するという暗部に対しては
検討されているとは言えない。つまり、人間性のエゴ、特に当時「院政」とい
う新たな政治体制が出現し、貴族階級はそれぞれ<家>の繁栄のために政治的
な戦略と手腕を営んでいることを見逃しているのではないか。愛情、人間のエ
ゴ、家の継続、意志、そして院政期という、態勢が入り組んでいるために、出
てくる複雑な人間問題を解くには、鈴木氏の言う「倫理的な愛情が主流となっ
てある」という見方だけでは、難しいのではないか。だが氏によって提示され
た親子の愛情という問題は、八〇年代以降ジェンダー論、セクシュアリティ論、

²⁹同前掲注 23、 p. 307

他者論が導入されるにつれ、同性愛・異性愛・偽装・視線などの研究が考察の中心になって、親子間の愛情という問題への関心は薄れて行ってしまった。親子愛情の問題が再び注目をされるのは2000年^⑮森本葉子氏の論によってである。^⑮森本氏は、父左大臣の働きかけ、和歌、「とりかへばや」という用語の使用という三点に着目し、きょうだいを如何に見つめていたのかを考察した結果、男君が父の期待としての存在であるのに対し、女君は父の失望を慰めるための存在という役割を当てていると主張した。氏は次のように述べている。

左大臣の視線は平等ではなく、その父の期待は男君が一心に受けていた。それは、誕生時の描写、男君の幼時の「なまめかし」き姿、後継ぎとしての父の働きかけ、さらにそれに応じない男君に対する激しい嘆きから明らかである。一方女君に対しては、女子としての教育を施す父の姿はなく、女君を「若君」と思う人々をそのように思わせたままにし、男姿となっても激しく嘆くことはなかった。男君に託せなかった期待による失望を慰めるための存在として、父の視線は女君に向けられてゆく。彼の「もの思ひ」は、「うつくし」き様である女君を見て「うち笑む」ことで癒されていくのである。癒されかけた彼の「もの思ひ」は、男君・女君の入れ替わりによって完全に消え、それは喜びにかわる。³⁰

つまり、父左大臣は元々男君を自分の後継ぎとして見なし、育ててきたが、男君の女らしい素性行動に我が子の立身出世という期待が裏切られた。一方、女君の優れた才能が発揮し男として世に認められることにつれ、男君に代わって父左大臣を慰める役割になってきたというのである。森本氏の所説では、父

³⁰森本葉子『「とりかへばや物語」父左大臣の期待—失望と慰め—』『愛知淑徳大学国語国文』(23)所収、2000.03、愛知淑徳大学国文学会 p.80

左大臣のきょうだいへの愛情は利益の有無を考える傾向が窺えるだろう。更に、2011年に⑩伊達舞氏が、⑭鈴木論を踏まえ「もし『今とりかへばや』執筆の意図が＜愛情の種々相＞を描くことにあったのであれば、せっかく数多く登場させた親子をこうも一様に断ち切ることはなかつたのではないだろうか。」³¹という問題意識を示す。これは鈴木論に反し『今とりかへばや』は個人の愛情より、寧ろ一家の繁栄を追及することに重点が置かれているとする。この点について、⑩伊達氏は以下のように述べている。

この物語には多くの＜愛情＞が描かれながらも、＜愛情＞の成就や＜個人＞の幸福は追求されておらず、寧ろ＜愛情＞によって繋がっている親子を切り離すことによって当初の問題の解消と、新たな成功一大団円を迎える構成となっていることが明らかとなった。この新たな成功とは、社会的立場の向上や＜家＞としての繁栄であり、物語の始まりと終わりでは個人的な＜愛情＞重視の規範から、より集合的な＜家＞を重視する規範へと巧みにすり替えられているのである。『今とりかへばや』の興味は正にこの、親子愛という＜個人＞を重視する規範からいかに脱却し、＜家＞という社会的集合を重視する規範へとシフトするか、という点にこそあるのではないだろうか。³²

だが、そうした＜家＞の繁栄はどこまで極めて追求されてきたか、また『今とりかへばや』に現れた家々³³は全部同じ性質のものか否か、と疑問に持っている。例えば、物語に現れた一心に仏道を追求する吉野の宮は、修行専心を願い、一切に煩われる人事を避けとうと姉妹に関係する女房たちを全て京へ行か

³¹伊達舞 「『今とりかへばや』の＜家＞への志向－親子間の＜愛情＞描写から－」『国文目白』(50) 所収、2011.02、日本女子大学国語国文学会 p. 21

³²同前掲注 30、p. 30

³³主に、朱雀院家、左大臣家、右大臣家、吉野の宮家を指す。

せる状況においては、伊達氏の言う社会的集合を重視する論理はどう解釈すればよいのか。また物語の結末に帝は退位し、父左大臣は出家、傍役の宰相中將は結婚せずに憂くて恋しい気持ちで日々を過ごしてゆく、などの設定は、正に家または集団からの脱出ではないか。さらに〈家〉に内包している〈個人〉、つまり、それぞれの人物は家の繁栄のためにどういう役割を担っているのだろうか。そして、物語の親子愛がどうして社会的集合にシフトするか、個人的親子愛は家という社会的集合と何故断ち切らなければならないのか、数々の問題が残されていると思われる。

以上諸説をまとめれば、『今とりかへばや』における親子関係の研究は、早期の⑪⑭鈴木氏が論じたように、無私に近づく理想的な愛情であるという論から、⑮森本氏の、父の愛情が前途有望な子に偏るものであるものに転じ、そして⑯伊達氏の〈個人〉を重視する規範から脱却し、〈家〉という社会的集合を重視する指摘へと展開していくことが分かる。だが、これを如何に主人公きょうだいの異装と繋がるか、つまり物語には親が常に子どもたちの決定的な選択を代行し、特に左大臣家は父が二人の子どもの社会的性別において重要な役割を果たし、左大臣の行為はどう解釈すればよいのか。数々の問題が残されており、検討する余地があると思われる。

一. 二. 二. ジェンダーに関する先行研究

『今とりかへばや』における男女性別の交換は、従来から論議されてきた物語の設定である。主人公きょうだいが取り替えられたあと、同性結婚・妊娠・密通などの事件が次々と語られ、とりわけ同性愛・異性愛に関する描写が筋の発展につれ交錯し合うことが、前述したように否定的な物語観を招いた所以とも言えよう。だが、物語はきょうだいの交換という表現を通して、何を訴えようとしているのかについて、早くきょうだいの交換を単なる「性転換」と視す

ることなく、その本質を分析しようとするのは⑰鈴木氏である。氏は以下のよう
に語っている。

『とりかへばや』の性転換の特質において大将（女）が男らしく尚侍が
女らしいことは物語の随所に散見するが、いかに大将（女）が男らしくても、
また尚侍（男）が女らしくても、それぞれ本性の女性的特質・男性的
特質が隠し切れなるといふ点がなくは、類似半男女と称し得ないのでは
あるまいか。つまり、大将（女）・尚侍（男）にそれぞれ本性の通り、女
性的特質・男性的特質があつてこそいづれも類似半男女と言へると思ふの
である。なぜならば、もし大将（女）から女性的特質が一切消滅してしま
ひ、尚侍（男）からは男性的特質が全くなくなってしまうならば、
大将（女）は男性に転じ、尚侍（男）は女性に転換したと言はねばならな
いからである。けれども、物語の事実では決してさうではなくて、大将（女）
と尚侍（男）は、それぞれあくまでも**本来の性的特質**が表面に現れてゐる
人物として描かれてゐる。（中略）結局、二人（筆者注：女君・男君）は
外面的に女より男へ、また、男より女へ転じたにすぎず、決して真の性転
換を行ったものではない。極言すれば、二人の性転換は、男装・女装とい
ふ一種の変装を称すべく二人ともいわゆる類似半男女に属するものと考
へられるわけである。³⁴

鈴木氏の時代の倫理観のもとでは、男女入れ替わりの問題は「類似半男女」
または「性転換」などの言葉でしか表現されていない。だが、『今とりかへば
や』物語世界の社会規範によって構築された「女／男らしい」に関する問題を

³⁴鈴木弘道「性転換とその物語」鈴木弘道『平安末期物語論』所収、塙書房、1968.04、p.131
-135

提起し、この「女／男らしい」という社会規範の枠に嵌められているきょうだいは、服装という「外面的な」交換を行う。それは、真の性転換ではなく、いわゆる社会規範によって起る「異装」と「意志」の問題であることに気づいている。これは『今とりかへばや』研究において、この⑰鈴木の指摘は、早くにジェンダーの問題として意識していたといえるだろう。

ジェンダーの領域で本格的に検討したのは、⑱片岡利博氏である。氏はジョン・マナーの説を踏まえ、次のように述べている。

人間の性について考える際に、生物学的な意味での性 (Sex) と心理的・社会的な意味での性 (gender) とを区別し、後者に「性自認」 (gender identity) 「性役割」 (gender role) という概念を導入した、ジョン・マナーの所説は、とりかへばや物語の状況設定を考える場合、有効に働くと思われる。人間社会では性差に対応して種々の社会的役割が割り合てられている。これを「性役割」といい、各個人が自らの性に対応する性役割を自覚することを「性自認」という。(中略) 各個人はそれぞれの生活する社会の中で各自の性に対応する性役割を体験しつつ、徐々に性自認を確立してゆく。各自の性に合致しない性役割を体験した場合—言い換えれば、性自認を誤った場合—には社会的制裁を受けることによって、それぞれの性自認は補強されてゆく。(中略) この物語において若君と姫君がとりかえたのは、互いの性役割であって、その結果倒錯することになったのは、「性自認」ではなくて互いの社会的役割である。³⁵

³⁵片岡利博「とりかへばや物語考—その趣向と表現—」『文林』(17) 所収、1982. 12、神戸松蔭女子学院大学 p. 39-41

片岡氏は社会の制裁こそが、物語に用いられた言葉で言うと「世の常」の制裁こそが、二人のきょうだいを取り替えた最大な原因であると主張していることが分かる。これに続いて⑩菊地仁氏がさらに、「『とりかへばや物語』においては「男（女）とは何か」「男（女）らしさ」それ自体が重大な論点なのであって、今ふうの言い方をすればジェンダーという問題がせりだしてくるのである」³⁶と説き、世間に規範された社会的役割に符合するために避け難い「視線」と「演技」の問題を以下のように説明している。

『とりかへばや物語』では真贋なる区分そのものがすっかり意味を失ってしまっているのだ。アプリアリな実体の不在とか絶対的な基準の欠如とか称してきた由縁である。こうした規範なき同価関係の世界にあっては、互換性や相対性を持つが故に可視的な存在こそが全てなのだとわが言えぬ。かくして、登場人物たちはいつのまにか他者の視覚に応じた演技をしてしまうこととなる。³⁷

更に、

女大将（筆者注：女君）が男として演じた役割を模倣し踏襲することによってのみ男尚侍は男としての実質を補填し確保しえたわけである。つまり『とりかへばや物語』における性別は先天的や生得的ならぬ、演技という学習過程を経てこそ初めて獲得され実体化されうるものであることを示している。³⁸

³⁶菊池仁『『とりかへばや物語』試論－異装・視線・演技－』片野達郎編『日本文芸思潮論』所収、1991.01、桜楓社 p.171

³⁷同前掲注35、p.171

³⁸同前掲注35、p.173

と述べる。菊地氏は、『今とりかへばや』世界できょうだいは常に、他者の視線によって二者一対として扱われるわけで、きょうだいの交換可能は絶対的な基準が存在しないからだと、まず提起し、かくして可視的な存在は全ての価値基準になるとする。つまり「視覚的」なものは基準の代わりとなってしまう、登場人物たちが他者の「視覚」に応じて演技せざるをえなくなるのである。そして演技という学習過程によって、物語中の「性別」というものが実体化されることで、男女主人公の「自己の内面というものを形成してゆくという一種の教養小説」³⁹だと解してある。菊地氏が言う絶対的基準の不在については、⑩神田龍身氏が更に広げ、この現象を「中心が喪失することによって、彼らは自らを位置づける共通の物差を失い、似たり寄つたりの人物たちが互いに模倣し合」⁴⁰うと解し、性差の弁別基準は貨幣のように流通している「陳腐なほどに典型的」⁴¹な外部記号（例えば、「あてに」「もの恥ぢ」「愛敬」「絵」「舞遊び」「鞠」「小弓」）であると唱える。そして、ジェンダー問題に常に携わってきた「記号」の問題を取り上げ、以下のように述べている。

性差なるものも飽くまで相対させることによってしか定立し得ない。記号の産物だということを如実に意味しているのである。なるほど「もの恥ぢ」という属性一つをとってもそれ自体としては男のものでも女のものでもないはずである。そもそも物語は「おほかたたゞ同じものと見ゆる」と二人のことを評していたのであって、元来あるはずもない性差をことさらに仮構していることは明らかなのである。⁴²（下線は筆者による）

³⁹同前掲注 35、p. 179

⁴⁰神田龍身「物語と分身<ドッペルゲンガー>：『木幡の時雨』から『とりかへばや』へ」赤坂憲雄編叢書史層を掘る第1巻『方法としての境界』所収、新曜社、1992. 01、p. 65

⁴¹同前掲注 39 p. 76

⁴²同前掲注 39、p. 76

更に神田氏は、物語に描かれた主人公きょうだいの身長・月経・妊娠などの場面を取り上げ、物語において「セックスは実体で交換不能」⁴³であると述べた。これは上述した流通する記号としての性に対し、きょうだいの肉体という解剖学的自然性(セックス)は交換不能で、物語の主題は「記号」と「セックス」の分裂にあり、性の混乱から本性へ、という流れを一種の性的ビルドアップ・ロマンとして扱うことは可能だと主張する。氏は次のように述べている。

この物語は記号としての性を一方で呈示しつつも、セックスの存在をそれとして否定しているわけではなく、双方の性の分裂とその一致に到るプロセスにこそ物語の主題性をみようとしているのである。⁴⁴ (下線は筆者による)

以上⑱⑳両氏は、『今とりかへばや』ジェンダーに関する研究史において、かなり示唆的な観点を与えた。この後、登場人物たちの視線の方向に基づいて物語を分析する論文、または記号の分析を中心として物語の裏に潜んだ規範意識や権力構造を論述するものが多い。例えば、㉑西本寮子氏が⑱菊地氏の説を踏まえ、物語の登場人物においての「見る」／「見られる」関係を検討し、登場人物(筆者注：主に父左大臣、帝、宰相中將の視線を指す)は常に<かぐや姫>の美質を備えている女君を中心に見つめ、「二者一対の視線とは、つまるところ同一視ではないのか」⁴⁵と主張した。つまり、男君を見るとき、その本性が男性である男君の実体を捉えることなく、目に見える女姿の男君に、見ることのできない「女姿」の女君を幻視する父も、男装の女君を見、「女にてい

⁴³同前掲注 39、p. 80

⁴⁴同前掲注 39 p. 81

⁴⁵西本寮子『『今とりかへばや』の二重構造』『広島女子大学国文学』(11)所収、1994.09、広島女子大学国文学会、p.38

みじう見まほしう」と想像の中にある女姿の女君の形代として男君を求めたい宰相中将も、女君の美質を基準とし、二人のきょうだいをみつめているのである。ついで②西本氏は「演じ続ける女君—『今とりかへばや』における罪の問題—」⁴⁶論文で女君は常に「見る」側の視線を意識し、相手の心理を巧みに利用しつつ、物語の視線の作用は「見える」／「見せる」関係になったと説いた。さらに③安田真一氏は「『とりかへばや』の交換可能の論理—ジェンダー論の視座から」論文で「見る」／「見られる」関係の主体—客体を入れ替えることで、「見せる」／「見せられる」⁴⁷関係が成り立つはずであり、これによって権力関係が反転するであろうと述べた。

次に規範意識や権力構造について、④安田真一氏は『今とりかへばや』におけるジェンダーに関わる問題の検討範囲を広げ、主人公きょうだいを含み、物語に〈普通の女〉⁴⁸として描かれた右大臣の娘である四の君、そして吉野の姉妹も検討対象として、これら子どもたちの縁談、結婚、あるいは密通によって勘等される場面、復縁などの過程では常に父たちの父権行使が介入し、よって安田氏はこれら父親の介入を〈男〉という一集合と捉え、〈男〉が築き上げた性規範意識はいかに物語世界に作用するかを検討した結果、以下のように解している。

〈女〉のセクシュアリティ—〈女〉の性規範が〈男〉によって作られたものであることを意味している。制度や規範によって、〈男〉のセクシュアリティも作り上げられたものであるが、〈男〉のセクシュアリティは常

⁴⁶西本寮子「演じ続ける女君—『今とりかへばや』における罪の問題—」物語研究会編『物語「女と男」新物語研究3』所収、有精堂、1995. 11、p. 226

⁴⁷安田真一「『とりかへばや』の交換可能の論理—ジェンダー論の視座から」日本文学協会『日本文学』(46-2)所収、1997. 02、日本文学協会 p. 30

⁴⁸安田真一「女〉の世界あるいは〈女〉の不幸—『とりかへばや』四の君をめぐる—」古代文学研究会編『古代文学第二次』(4)所収、1995. 10、古代文学研究会 p. 43

に〈女〉のセクシュアリティを規定し、回収していることを忘れてはならない。⁴⁹

次いで⑤安田氏「〈女〉と〈男〉の世界—『とりかへばや』四の君をめぐって」⁵⁰で、規範の中で女君と四の君という夫婦関係を検討し、物語は新しい男／女の形態を個人と個人の間を生じる人間／人間関係として作ろうとし、男性中心主義による差別性を解体し、無化するという反制度的な試みが窺えると、以下のように説明している。

規範との葛藤の中で、男装をしていることによって〈男〉として生きている女中納言、規範意識を持ち、〈普通の女〉として生きている四の君。二人の夫婦関係には、二人を追い詰めていくその過程が描かれていると言ってもいい。四の君は物語の論理から逃走が描かれないことによって、〈男〉に回収されているが、女中納言は、〈女〉からの逃走も〈女〉への逃走も搦め取られて、〈男〉に回収されていく過程が描かれているのではないか。それでは物語が反制度的な言説を表出しているところはないのか。

⁵¹（下線は筆者による）

さらに、安田氏が④論文で論述されてきた「制度」や「規範」は安田氏が前述③「『とりかへばや』の交換可能の論理—ジェンダー論の視座から」⁵²論文

⁴⁹同上掲注 47、p. 50

⁵⁰安田真一「〈女〉と〈男〉の世界—『とりかへばや』四の君をめぐって」物語研究会編『物語〈女と男〉新物語研究 3』所収、有精堂、1995. 11

⁵¹同上掲注 49、p. 243

⁵²同前掲注 49

にも言及した。安田氏が⑳神田氏の説く「陳腐なほどに典型的」⁵³な外部記号というこの点を踏まえ、社会規範における権力作用⁵⁴にも言及した。氏は次のように述べている。

自己同一的であるとか、本性に戻るとかいったところで、所詮記号の選択であり、記号の選択は個人にある。ただし、個人の選択は、社会的規範によって正しい（望ましい）選択というものが決定されており、社会的規範に一致していないからこそ、自己同一的ではないということになるというのであろう。ここに権力作用があることに注意すべきだ。きょうだいが「世づかぬ身」として悩むのも、そもそも社会的規範と不一致であるからである。そして、その悩みが一番の原因が「異装」であり、外部表象としての、記号としてある衣装が一致していれば、自己同一的であると言わんばかりであることが問題とされるべきことなのだ。問題の所在をズラしてみよう。常に、意識的、自発的、あるいは主体的なときにも、権力作用がある。⁵⁵（下線は筆者による）

上に論じてきた権力作用は安田氏は㉓の論の主体性に対する考察をさらに進め㉔「〈主体性〉を捏造する〈ことば〉と〈身体〉—『とりかへばや』の女

⁵³同前掲注 39、p. 76

⁵⁴権力作用については、安田氏は「ある個人が自発的に行為をしている場合、私たちはそこに権力が働いているとは考えないことが多いが、私たちの行為を規制している何かがあるはずである。社会と個人、個人と個人の間を関係を考えていくために、今まで権力として捉えられてこなかったものも、権力作用として捉えてみる必要があるはずである。」と定義した。（同前掲注 48、p.30）

⁵⁵同上掲注 46、p. 25

君と宰相中将をめぐって」⁵⁶によって、暴力的な知という考えを出してくる。氏は以下のように考えている。

主体性とは、事実確認的な<知>から解放され、なおかつ、それを変容させるための行為遂行的な自分自身を知ることができないという、<知>の放棄としてしかあり得ないのかもしれない。しかし、女君は、規範という暴力的な<知>、性別という支配装置を受け入れた上で逃走＝闘争を試みる。そこから確立された<女>の主体性など、認識論的暴力による、つまり、事実確認的な<知>の暴力による権力作用によって捏造された<主体>でしかないのではなかろうか。<女>に期待される役割を放棄することによって、女君は宇治を出た。女君は子どもよりも、<個>としての自分自身を選ぶ。女君は両方を同時に選ぶこと—<個>として生きることと子どもを捨てないこと—ができない。両立を許さない物語社会の論理がここに作用しているのだ。「母」は<女>ではない。女性は、社会的な意味において<女>として生きるか、「母」として 生きるか、選択を迫られるのだ。⁵⁷（下線は筆者による）

安田氏の考察によって、『今とりかへばや』の権力作用は明晰に出て来、つまり社会が築きあげられた規範は作中人物の生物的性別（セックス）、心理的性別（ジェンダー）、また自己同一性までを支配している。もし本性や記号の選択が社会規範意識と一致しない場合（世づかぬ身）、暴力的な<知>が常に制裁を加える、というような権力作用が物語の論理に働いていると提示した。

⁵⁶安田真一「〈主体性〉を捏造する〈ことば〉と〈身体〉—『とりかへばや』の女君と宰相中将をめぐって」河添房江ほか編『叢書想像する平安文学第3巻 言説の制度』所収、2001.05、勉誠社

⁵⁷同上掲注 55、p. 179

以上『今とりかへばや』のジェンダーに関する先行研究をまとめれば、ほぼ I. 他者の視線に応じる演技の問題、及び、II. 社会規範に関わる権力作用という二つ方向がある。しかし、前も提示してきた親子関係は物語において、常に親が子どもたちの決定的な選択を代行し、特に左大臣家は父が二人の子どもの社会的性別において重要な役割を果たしている。父や二人の子供の視線や演技、また権力作用を分析することによって、如何にこれらの場面を深く読み解き解釈するのか。また、左大臣が子どもを見るととき常に「嘆き」と「笑み」という矛盾の動作が並存しているのだが、左大臣は何のために嘆くのか、何のために笑むのか、これら感情を表わす動作の背後には、人間の意識を支配している引っ張り合う権力作用が存在するのかどうか、またこれをどう理解すればいいのか。これらの問題について、本論文で検討したい。

一. 二. 三. 異装に関する先行研究

『今とりかへばや』の異装は、ジェンダーの分野にも検討されてきたが、この一節では、『今とりかへばや』異装というモチーフの特異性を中心に検討したい。

⑦武田佐知子氏はまず『今とりかへばや』の異装が男女の社会的成功に導く特異性を提示した、氏は以下のように示している。

異性装を主題とした物語は、洋の東西を問わず、数は多い。しかし『とりかへばや』が、他の異性装の物語と際立って異なる点を挙げておくとすれば、この物語は若い異性装の男女のサクセスストーリーであるということではないだろうか。（中略）『とりかへばや』では、姉弟の容貌が似通っていると言われながら、あくまでも二人の違う人物であるという設定上、

今一つ鮮明ではなかった男性美と女性美の近似性がますますはっきりしてくる。ここでは至高の男性美と女性美が全く一致していることが、いよいよ明確であろう。同じ人物のうえに体现される、男性としても女性としても最高の美。男としても、そして女にしてみても美しいことこの上ないからこそ、地上に実現される至福の享受者としての資格があった。⁵⁸（下線は筆者による）

㊦武田氏が異装を通して、きょうだいたちがユニセックスな美質を持っていることが確立し、地上に実現される至福の享受者としての資格があった。そしてこの物語は若い異性装の男女のサクセスストーリーであると解している。だが、物語に女君は異装解除のため、涙に濡れながらも自分の子一宇治の若君一と別れる道を選択し、後に中宮になって宇治の若君と再会する場面に名乗りをあげられぬままで終わることは、母親の境遇として「至福の享受者」と言えようか。この㊦武田氏とかなり異なる視点を提示したのは㊧西本寮子氏である。氏は『今とりかへばや』の異装を「罪」の問題に帰着し、以下のように述べている。

『今とりかへばや』は異装という特異なモチーフを利用して、女の身をもつものに「罪」の問題を灸りだしたといえようか。異装解除によって一度は消滅したかに見えた「罪」は、別の形をなして依然として残り続ける。
簡単に贖われるものではない根源的な「罪」の存在。女の身ゆえに消えな

⁵⁸武田佐知子「男装・女装 その日本の特質と衣服制」、脇田晴子・S.B. ハンレー編『ジェンダーの日本史（上）—宗教と民俗 身体と性愛』所収、東京大学出版会、1994. 11、p. 229—233

い「罪」の認識。すべてを「罪」の問題に帰してしまう世界⁵⁹（下線は筆者による）

⑳西本が、『竹取物語』から『源氏物語』、そして『今とりかへばや』へと連なる「罪」と「流離」の系譜という視点から出発し、物語は異装を通して「女」の身を持つ以上、逃れることのできない「罪」の存在を認識することができる⁵⁹と唱える。だが、物語において異装が起こしたそれぞれの葛藤状況を一切「罪」に帰していくことは、不十分なところがあると思われる。更に㉑石埜敬子氏が『今とりかへばや』の異装について、次のように述べている。

『今とりかへばや』作者は、男と女の生活を経験させることによって、それまでの物語にない魅力的な女性を造形した。前半、さまざまな女の生き方を直接に目にした女君は、その経験に基づいて、人に頼るだけではない生き方を模索した。（中略）彼女の魅力は、従来 of 物語の女主人公のような弱々しいあえかな女らしさや自己抑圧の美德と異なり、泣くべきときには泣き、笑うべきときには笑うといった自由さにある（中略）『今とりかへばや』の女君には、男の言うがままに生きることを「世の常」とする閉塞した状況へのひそかな反抗が託されていたのではなかろうか⁶⁰（下線は筆者による）

㉑石埜氏は女君の自己確立に着目し、『今とりかへばや』の異装は、「世の常」への反抗だと指摘する。次いで㉒鈴木泰恵氏は以下のように述べている。

⁵⁹同前掲注 45

⁶⁰同前掲注 7、p. 177

『とりかへばや』は、そうした『源氏』『狭衣』を視野に収め、新たに
くかぐや姫>の物語の可能性を提示しつつ、ほぼ同時にかつ徹底的にそれ
を打ち砕いていくことで、むしろ、地上にありつづけなければならないく
かぐや姫>という存在の絶対の矛盾と、そういうくかぐや姫>による聖な
るくかぐや姫>の物語—この世の濁りに穢れぬくかぐや姫>の物語—そ
のものの無意味あるいは根源的不在をこそ宣言したのではあるまいか。地
上にありつづけなければならないくかぐや姫>が、この世の濁りに穢れな
がら、あらぬく月の都>を幻視する『源氏』『狭衣』のような平安のくか
ぐや姫>の物語を、十二分に理解した物語であることを示したうえで、し
かしそれら『源氏』『狭衣』のようなくかぐや姫>の物語の限界を見たり、
それをもはやアナクロニズムとみなして、痛烈に批評してみせるスタンス
が『とりかへばや』にはあった。異装の聖性とその阻害（限界）をたどり
見れば、そのような批評性を掬いられるのであり、異装とはすなわち批評
の重要なエレメントであったといえよう。⁶¹（下線は筆者による）

⑩鈴木氏が『今とりかへばや』ではまず女君の超越的主人公性を持つことを、
くかぐや姫>の系譜に繋がり、そして物語に現れたジェンダーとセックスのね
じれ現象は、女君を「女としての結婚の不可能」状態を強いらせるていくもの
で、異装は女君を「非婚の聖女」たらしめるシステムであり、非婚のくかぐや
姫>の聖性が秘められていたと言える。ところが、物語中段に起った宰相中将
との密通・妊娠事件が聖性を阻害するものとなり、物語の早い段階から構築し
た非婚の聖女くかぐや姫>聖性を徹底的に踏みにじり否定していく。よって
『今とりかへばや』の異装という設定は「この世の濁りに穢れぬくかぐや姫>

⁶¹鈴木泰恵『『とりかへばや』の異装と聖性—その可能性と限界をめぐって』鈴木泰恵『狭衣
物語／批評』所収、翰林書房、2007.05、p.400

の物語—そのものの無意味あるいは根源的不在」⁶²だと先行物語への批判エレメントであると⑩鈴木が指摘した。

以上の異装に関する先行研究を纏めれば、まずは⑦武田氏の、異装によって主人公たちが至福の享受者としての資格を持つサクセスストーリーと読む説から⑧西本氏の、異装が女の身ゆえに消えない「罪」への認識説、更に⑨石埜氏の、異装は「世の常」への反逆である説、⑩鈴木氏の、異装は先行物語への批判エレメントである説、という流れを見出すことができる。しかし、全体からみれば、諸説は女君の異装への検討に偏り、男君の異装については見逃しているのではないか。また、物語はせつかく瓜二つのきょうだいきょうだいが異装を行うという設定は、どのような物語的効果があるのか。『今とりかへばや』異装の特異な点を炙り出すには再検討する必要がある。

第三節 研究方法

以下、研究方法について述べる。まず『今とりかへばや』の主人公とそれぞれの人物は官名や呼称などが筋の発展につれ変わっていくため、呼称が重なり混乱する恐れがあるので、便宜上以下のように統一する。

- ①主人公きょうだいは姉弟か兄妹か不明だから、二人の関係を説明する場合は平仮名の「きょうだい」で表記する。
- ②主人公きょうだいの幼少期、つまり元服・裳着する前、女の子を「姫君」、男の子を「若君」で表記する。成人式後「女君」と「男君」に変えることにする。

⁶²同前掲注 61

③主人公の父親は物語の中で、権大納言兼大将→左大臣→大殿（出家）と変化するが、本論中では、もっとも長い時間勤めた職務「左大臣」で表記する。

④もと式部卿宮の中将は宰相中将→権中納言→大納言→内大臣兼大将という流れで昇進しており、主人公の父親、女君の官位と重なるので、説明する場合は「宰相中将」で表記する。

ジェラルド・プリンスの『物語論辞典』⁶³によると、「葛藤」(Conflict)は「行為者 (actor) が関与する争い。行為者は、運命や宿世あるいは社会的・物理的な環境と戦う (外的葛藤)。また自分自身とも戦う (個人的・精神的葛藤)。」⁶⁴と説明されている。本論はプリンスの定義を踏まえ、『今とりかへばや』における親子の愛情が如何に「外的葛藤」と「個人的・精神的葛藤」の間に揺らがせ、互いに影響し合い、作用しているのかを解析してみたい。

第一章では、研究動機と目的および先行研究、研究方法について述べる。

第二章では物語に現れた家々の親たちは、常に子ども自分自身の意志と背反する道を用意し、それに従わせることによって、子どもを不安な気持ちや苦痛に導きつつも、親たちはこういう状況を察知することはないという共通現象に注目し、それぞれの場面テキストから抽出して分析していくことにしたい。分析方法については、まず定説化されている菊地氏の説—父親の「視線」がきょうだいの「交換」に重要な役割を担っている—を踏まえ、『今とりかへばや』に現れた家々の親たちが子どもたちをどう見ているか、またその視線が如何に子どもの意志に介入しているのか、さらに親たちが「世」という他者の視線にどう反応し、行動しているのかを考察する。よって親たちの愛情と私欲の葛藤の共通点とそれぞれ異なる特徴を分析して見たい。

⁶³ジェラルド・プリンス著・遠藤健一訳『物語論辞典』、松柏社、2004. 12

⁶⁴同前掲注 38、p. 31

第三章においては、作品に登場する第一層の子どもたちが（主人公のきょうだい・四の君・女の一宮・吉野の姉妹）「外的葛藤」と「個人的・精神的葛藤」を分析してみる。まずは二人のきょうだい異装時代それぞれが出会った恋、または婚姻生活をめぐる場面を抽出し、それぞれ同性・異性の恋の相手と互いにどう見ているのか、また恋によって自分をどう認識していくのかを明らかにしたい。そして物語中段からきょうだいが本性に戻ることで、何かの変化があったかを考察する。第二節ではまず第一章で考察した親の視線に基づいて、子どもたちがどう反応していくかを考察する。つまり、親たちの「見る」ことで、子どもたちはどう「演技」＝「見せている」かということである。これによって子ども達が常に親への愛情によって親たちの期待に従いつつも、自分をも窮地に追い詰められてしまいという「外的葛藤」を明らかにしたい。更に、作品に登場する第一層の子どもたち自身が親になり、異装した経験、または自分の私欲によって第二層の子どもたち（宇治の若君・大姫君・太郎君などを指す）にどんな影響を与えているのかを解明してみる。

続いては『今とりかへばや』に多用された「世」という言葉に注目したい。『新日本古典文学大系 26 堤中納言物語・とりかへばや物語』⁶⁵の考察によると、『今とりかへばや』に現れた「世」に関する語が三四七例ほど見られる。巻ごとの内訳巻一 一二七例、巻二 四三例、巻三 一一八例、巻四 五九例となっている。これについて乾澄子氏が「物語のストーリーの進行にしたがってみると、女君が本来持って生まれた性と社会的な性役割の落差に悩む巻一、さまざまな状況から異装を解き本来の性役割にもどる巻三に「世」という語が多く見られ、この作品の方法の一つに「世」とも関わり方があることを知ることができる。」⁶⁶と述べ、『今とりかへばや』物語世界が拘っている「世」、

⁶⁵大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島正雄校注『新日本古典文学大系 26 堤中納言物語・とりかへばや物語』、岩波書店、1992. 03

⁶⁶乾澄子『『とりかへばや』物語における「世」』『古代文学第二次』(16)、2007. 10、古代文学

つまりきょうだいの性別規範となっているものは何の規準で構築されているかを究明したい。なお、きょうだいは物語において仙境みたいな吉野での様子をも抽出し、俗世にいる様子と対比することで、〈家〉という装置から脱出し、つまり親・世間の視線から解放されるきょうだいの様子を考察してみたい。

第四章においては、本論文の検討対象とする「親の葛藤」、「子の葛藤」、「ジェンダーの葛藤を表わす異装」の親子の愛情と負わされた社会的役割によって夫々人物の外部と内部の衝突状況を纏めてみたい。その中から異同点を分析し、『今とりかへばや』を「葛藤物語」と定位しようとする。また、その葛藤の背後に潜んだ真意は何を目標として戦うか、つまり物語が数々の親子・意志とジェンダーという錯綜な衝動によって何を訴えようとしているのかを解明していきたい。



第二章 親たちの葛藤

はじめに

『今とりかへばや』は性格の「男らしい女君」と「女らしい男君」という社会基準に合わない二人きょうだいが、その性格、そのままに公の場に導かれることによって起こした一連のストーリーである。そしてそのこどもたちが公の場に出るかどうか、つまり誰が御裳着、誰が御元服を行うかを決められるのは、親（主に父左大臣）に他ならないのだが、親が元服／裳着を行った結果、二人きょうだいを異性装をさせ、同性結婚をさせるといふ子供を嘆かせる道に導いてしまう。また、その物語において子どものジェンダーと将来を方向付ける重要な役割を担っている「親の決定」は、親のどのような判断や基準によるものなのか。また親の愛情は子供の道を「決定」する過程でどんな様相を呈しているのか、さらに物語に現れた家々の親子関係も共通しているかを、本章で検討してみたい。

第一節 左大臣家一女君・男君への愛情

二. 一. 一. 女君への愛情

父左大臣が二人きょうだいを異性装の形で御裳着・御元服したあと、女君はすぐ侍従として殿上した。そして、社会の人々と接触が増えるにつれ「などでめづらかに人に違ひける身にか」¹という疑問を持ち始めるようになりながらも、「よからぬ身を思ひ知りながら」²人と距離を保ち、悩みを抱えるまま慎重に身を処し、宮中で自分の優れた才能を発揮していく。女君の才能は帝に肯

¹石埜敬子校注、訳『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』2002・04、小学館、p.178

²同前掲注1 p.180

定され、女一宮の将来の婿にと望まれるまでになる。帝の意向を聞いた父は以下のように反応する。

殿は胸うち騒ぎて、あはれ、かからざらましかばいかに面目ありうれしからまし、と口惜しく心憂きものから、すこしほほ笑まれてぞききたまふ

3

「あはれ、かからざらましかばいかに面目ありうれしからまし」と、女君が本当は息子でない状況を口惜しく考えながらも「ほほ笑まれ」た。この父の矛盾する動作に注目したい。もし娘が本当の男なら面子がどれほど立つかと残念な思いを抱いても、わが子に対する帝の評価に対して笑顔を禁じえない。この笑顔は何を意味しているのか。「口惜しく心憂きものから」とあるので、面前の帝に対する礼儀として、内憂を露呈しないようにという配慮もあろうし、演技をさせた自分の子供が帝に肯定される慰みもあったろう。一家将来の栄達を予想できることもあるだろう。

森本葉子は「男君に託せなかった期待による失望を慰めるための存在として、父の視線は女君に向けられてゆく。彼の「もの思ひ」は、「うつくし」き様である女君を見て「うち笑む」ことで癒されていくのである」⁴と指摘しているが、帝の意向を知ることは、父親の困惑を引き起こすものであると同時に、女君に対する期待を増長させるものでもあっただろう。また、この出仕早々におこった出来事は、将来女君を婿として誰かの娘と同性婚させてしまう可能性を父に受け入れ易くさせるものであり、父左大臣はこの場で女君を演じさせ続け

³同前掲注1 p. 180

⁴森本葉子「『とりかへばや物語』父左大臣の期待—失望と慰め—」『愛知淑徳大学国語国文』(23)所収、2000.03、愛知淑徳大学国文学会 p. 80

ることに自信を持ったとも言えよう。後に右大臣家の娘四の君の縁談が来るときにも「御文書かせたてまつりたまふ」⁵と女君に命令し、女君と四の君の縁談を決めた。四の君との同性婚は、女君を一層窮地を追い詰めることとなる。そして、男として評価されながらも、じわじわと窮地に立たされる女君は、四の君が宰相中将との間に子供をもうけるに至って、厭世遁世の望みを持ち始め、吉野へと一時的に失踪してしまうほどの精神状態になる。

だが、このような窮地に陥った女君に対して、父親の反応はやはり女君の素晴らしさによって慰められる要素はなくなる。女君が吉野から帰ってきたとき、父左大臣は以下のような発言をする。

「(前略) 世離れて人に知られて歩きたまふは、なほいと軽々しきことを」とて、日ごろはものもをさをさまゐらざりけるを、今ぞ御前にもものまゐらせたまふついでに、もろともにきこしめす。世づかぬ御有様を、今はさるべきなりけりと、かかるさまにつけてもめでたくすぐれて世に交じらひつきたまへば思し慰みはてつるに、うれしくいみじと思したる御気色、いとあはれなり。見れども見れどもはなやかに飽く世なくめづらしくうつくしげなるを、うち笑みてつきせずまぼりたまひて、「右の大殿も日ごろ思ひ嘆きて、心苦しきことの添ひてしも心とまらぬやうになりゆくこそ嘆かれけれ。などて、さはた見ゆる。人目はめやすくもてなしこそ」など教へのたまはせて、そそのかしたまふものから、「世にあらんほどは、なほ朝夕の隔てなく見えたまへ」とて、涙ぐみたまふ⁶。(下線は筆者による)

⁵同前掲注 1 p. 184

⁶同前掲注 1 p. 252

女君が妻四の君の懐妊することを苦に、吉野へ一時的な失踪をしたことに理解を示しながら、女君に対する対応は「いと軽々しきこと」と批判し、「人目はめやすくもてなし」と、女君に対して世間一般の婿に見えるように四の君に対応するように、「男」として演技し続けるようにと諭す。そして目の前に異装している娘の立派で優れた様子に、いつまでも見てみたいとにこにこ満足げに微笑むのである。演技への要求と異装する女君への肯定は、先に挙げた森本葉子氏が指摘するように⁷、父左大臣の娘としての女君への期待があるだろうし、ひいては、女君がこの問題を露見させずに秘密裏に処理することによって右大臣家との関係を保ち、左大臣家の栄達への欲望があるとも読み取れるだろう。

しかしだからといって、父左大臣はわが子である女君の苦悩が理解できないわけでもない。これまで述べたように「人目はめやすくもてなし」という女君の心情よりも世間体を重視した指示をだしながら、「世にあらんほどは、なほ朝夕の隔てなく見えたまへ」と、涙ぐみ懇願する。この「世にあらんほどは」の部分は、通常「左大臣が生きている間は」⁸と解釈されているが、父親は女君の失踪に対して「思わぬ山なく」と出家を想像し、また右大臣家の四の君は「いかに思しなりにけるぞ」と婿である女君の出家を疑っている。四の君の妊娠を契機にした失踪は、女君の出家を想起させるものであったことを考えると、この部分の「世にあらんほどは」というのは、「姫君在家の間は」という意味で理解するほうが適当であろうから、父親の「世にあらんほどは」というのは「出家する前に、毎日隔てなく顔を見せてください」と女君に言っているであろう。体面を保とうとしながら、いつか出家してしまうことを肯定するこの言葉は、女君の苦悩を察した父親の愛情の示し方であるとも言える。このよう

⁷同前掲注 4 p. 80

⁸同前掲注 1 p. 253 頭注十五「自分（左大臣）が生きている間は」新編古典文学大系「とりかへばや」p.169 脚注十八「私が生きている間は」とある

に父の葛藤は①<家>の栄達を保つために女君を苦しませる要求を次々としてしまふ一方②女君は演技をすればするほど、「世づかぬ身」が起こした身と心の衝突が原因で厭世観を持ち始めた女君を見、自分もつらい気持ちを味わった。このように、異性装している女君を話題にする時、父左大臣の<笑む>と<嘆き・涙>という行為が交錯する場面が物語中に散見していることには注意しておきたい。これは前述の①と②の気持ちがいつも父親の中で葛藤しているためであろう。自らの期待を実現してくれる子供である女君に注ぐ愛情である。期待とは無関係に親として子供に注ぐ愛情。その気持ちは前述の①と②があるからであった。そして、ここに親から女君に対する愛情の葛藤を見ることができる。

二. 一. 二. 男君への愛情

二. 一. 一. の考察によると、父左大臣は女君に<笑む>と<嘆き・涙>行為が交錯する傾向があることから、女君に対し、<家>の栄達という自分の欲望と親子愛が混雑することによっての葛藤が現れることが確認された。では、男君の場合はどうだろう。以下分析してみたい。

男君が誕生したとき「いとど世になく玉光る男君」⁹と描かれており、『源氏物語』の光源氏の系譜の流れを継承して理想的な主人公として造形されると言えよう。この点について、既に森本氏が「主人公の理想像として造形される男君と、幼児に対する形容をもって遇される女君との間には明らかな差が見られ、男君はより「期待」されるものとして誕生していることがわかるのである。」¹⁰と指摘した。ところが、誕生時の描写に反して、この男君は父親の期待をあきらめさせる存在としてあるようになり、前項で述べたように、「男君」とし

⁹同前掲注 1 p. 165

¹⁰同前掲注 4 p. 69

て父親の愛情を受ける存在は「女君」であった。では、父親はこの『今とりかへばや』の男君にどんな愛情を示しているのだろうか。

二人の子どもがまだ幼いときに、内気な若君（男）と活発な姫君（女）に対し、父親はかなり異なった接し方を見せている。例えば、誰に対してもよそよそしく恥ずかしい若君を見るとき、父は以下のような言動を取ることがある

I.

「(前略) 御文を習はし、さるべきことどもなど教へきこえたまへど、思しもかけず、ただいと恥づかしとのみ思して、御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひなどしたまふを、殿はいとあさましきことに思しのたまはせて常にさいなみたまへば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましうつつましとのみ思しつつ、ただ母上、御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見えたまふ。さらぬ女房などの、御前へも参れば、御几帳にまっはれて恥づかしいみじとのみ思したるを、いとめづらかなることに思し嘆くに、」¹¹（下線は筆者による）

父左大臣が貴族男子として必要な教養や技能などを若君に習わせたがるが、若君は改まることなく、ただ恥ずかしく絵かき、雛遊び、貝覆いなどの女性向けの遊びに熱中するという女々しい性格を父に見せる。こうした現実を見た父左大臣は常に若君に対して苛立ってしまい、仕方ないと嘆くしかない。この場面のすぐあと、姫君の行動は対比的に描かれたが、父は若君に対し、屋外遊戯や漢詩文、笛、朗詠など男子向け教養や遊びばかりしている姫君に、父左大臣は矯正しようとする働きかけはいっさい見られず、左大臣家を訪れる殿上人た

¹¹同前掲注 1 p. 167

ちは姫君のことを「若君とのみ思ひもて興じうつくしみきこえあへ」¹²でも、父はただ「さ思はせてのみものしたまふ」¹³と「御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばや」¹⁴と願うようになった。姫君に対して、積極的な言動も見られず、ただ活発な姫君を自分の期待を裏切った若君と交換したいのである。若君は一家の後継ぎとして誕生から父に期待されてきているが、その性格や教養などは一人の貴族男子になれようもなく、つまり男性として貴族社会を渡っていく基準に合わない人物に育ってしまったからこそ、才能はすでに殿上人たちに認められている姫君と取り替えたいのである。要するに、「交換」することの一番の目的は、父親に才気溢れる後継者が出来ることであり、立派な男君が得られるかどうかということにほかならならず、男女がその性/生物学的性のおりになることではない。

更に、時間が経り、二人の子どもの若君と姫君が一層大人になるにつれ、父の目に映った子どもたちは以下のように描かれている。

II. 若君

「御髪は丈に七八寸ばかり余りたれば、花薄の穂に出でたる秋の気色おぼえて、裾つきのなよなよとなびきかかりつつ、物語に扇を広げたるなどこちたく言ひたるほどにはあらで、これこそなつかしかりけれ、いにしへのかぐや姫も気近くめでたき方はかくしもやあらざりけんと見たまふにつけては、目もくれつつ、近く寄りたまひて、「こは、いかでかくのみはなり果てたまふにか」と涙を一目浮けて御髪をかきやりたまへば、いと恥づかしげに思し入りたる御気色」¹⁵（下線は筆者による）

¹²同前掲注 1 p. 168

¹³同前掲注 1 p. 168

¹⁴同前掲注 1 p. 168

¹⁵同前掲注 1 p. 170

III. 姫君

「桜、山吹など、これは色々なるに、萌葱の織物の狩衣、葡萄染めの織物の指貫着て、顔はいとふくらかに色あはひいみじうきよらかにて、まみらうらうじう、いづことなくあざやかにほひ満ちて、愛敬は指貫の裾までこぼれ落ちたるやうなり。見まほしく目も驚かるるを、うち見るには、落つる涙もものの嘆かしさも忘れられてうち笑まるる御さまを、あないみじ、これももとの女にてかしづきたてたらんにいかばかりめでたくうつくしからん、と胸つぶれて、御髪も、これは長さこそ劣りたれ、裾などは扇を広げたらんやうにて、丈に少しはづれたるほどにこぼれかかれる様体、頭つきなど、見るごとに笑まれながらぞ、心のうちはくらさるるや」¹⁶。

(下線は筆者による)

父左大臣は貴族女性的美質を備えた若君を見、涙に目もくれてしまい、若君の様子を「どうして、すっかりこんなふうになってしまったのだろうか」と哀嘆しながら、絶望感を味わい、「いとあさましや、尼などにてひとへにその方のいとなみにてやかしづき持たらまし」¹⁷と若君を尼として出家させるという念頭が浮かべてしまった。ところが、父は男装している魅力的な姫君を見た反応はどうだろうか。まずは父が男らしい姫君の容貌や気質などの様子を「うち笑まるる御さま」と考え、その可愛い様子は「女の子として育てていたらどれほどすばらしくかわいいでしょう」と口惜しく感じたが、姫君を見るたびに、笑みが浮かんでしまう。子供たち二人のジェンダーを支えるものとは相反する要素の中に合わない美質を見る父親は、反応は随分違っていることがわかる。女らしい若君に対し、父の頭には「あさまし」と規定し、息子の変った様子を世間から追い出させたいという強い拒否心理が窺える一方で、男らしい姫君

¹⁶同前掲注 1 p. 172-173

¹⁷同前掲注 1 p. 172

に対しては、男性的なジェンダーであるがために却ってかわいがるという父の愛情が見られる。同じ出家させたい描写にも、「今さらにせめて女にとりなすべきやうもなかめり、これも法師になして」¹⁸と出家させるかと考えたが、姫君に対する批判はない。ここに使った「これも」に注意したい。前も述べたが、二人の子どもを「交換」したいと思う一番の理由は、父親に後継者が出来ることであり、立派な男君が得られるかどうかこそが父の関心点に他ならない。今はまだ「交換」していない段階で、若君が期待に答えられず後継者になれないから、父は彼を世から追い出したいと思っている。同じ社会基準に合わない姫君に対して反感が見られないのは、男らしい姫君が後継者になれることは、若君と同様に扱うことができる子供で、若君として扱いたいという父の気持ちが窺えると言えよう。

この父の扱い方については、西本寮子氏が「父親の視線はきょうだいを均等にみつめているわけではない。……目に見える「女姿」の若君に、見ることのできない「女姿」の姫君を幻視していることになる。……父親の視線自体が一貫して男君を捉えながらに姫君の女姿を幻視していることは見逃してはならない。」¹⁹父の視線は均等ではなく、常に若君に基づいて姫君を見るという傾向があると指摘している。つまり、二人の子どもが公の場に交換する前に、社会基準を代行できる父は、一家の跡継ぎとして生まれた若君を期待の対象として捉え、意志的に若君を自分の視線の中心（焦点）に置いたのである。若君は父に焦点を当てられ、父がそれぞれのジェンダーを矯正しようとする働きかけや反感の感情などに受身にならねばならない。一方、同じ社会の性別基準に合わない姫君は、若君の欠けている男性的な特質を備えているからこそ、父が息子の理想の様子を幻視することができるので、父の微笑みを得られるのである。

¹⁸同前掲注1 p.174

¹⁹西本寮子『『今とりかへばや』の二重構造』広島女子大学国文学会、『広島女子大國文』11号、1994.09、p.37-39

こうした場合は、二人子どもが元服／裳着をすることによって、女君（上述の姫君）が社会の殿上人としての男性ジェンダー、男君が家に居る女性ジェンダーに納まったとき、女君の才能は帝や殿上人など、世間に認められるにつれて、父の視線は女君に移っていくことになる。以下父の視点を中心に見ていきたい。

IV.

「中納言（筆者注：女君）のこよ思し出でられて、これもさるべきやうこそはあらめ、とうれしくもめづらかにもさまさま御心乱れて、げにさほどの交じらひは仕うまつりもやせんとて、母なる人にのたまひ合はせんとてまかでたまひぬ。……中納言の有様を見ればこれもかうさまにてよかるべきにもやあらん、仰せ言違へず、げに後の位に定まりたまふやうもありなん、思ひの外にめでたきことにてこそはあらめ、と思す。あらましごとにも胸ぞ騒ぎたまふや、御祈りさまさまにせらる。」²⁰（下線は筆者による）

IVの部分では、男君を東宮の遊び相手として出仕させたいという帝からの申し出を聞いたあと、父左大臣は出仕してから優れた才能は人々に認められ、四の君と結婚しても、無事に権中納言まで昇進する女君のことを思い出し、男君が内侍として出仕することに「これもさるべきやうこそはあらめ」と判断し、生まれてからずっと父左大臣を失望させている若君の身の上に、はじめて家の繁栄を期待させる事が起こったことを喜び期待をかける。若君に対するプラスの評価を持つようになっていたのである。しかも、男であることを知りながらも、「思ひの外にめでたきことにてこそはあらめ」と、将来順調に后になれることに期待し始め、祈願をする行動をする。

²⁰同前掲注1 p. 193-194

二. 一. 一で検討したが、女君が公の場に出仕してから、父が<家>の栄達を保つために女君を苦しませる要求、つまり「人目はめやすくもてなし」ように「男」を完璧に演技することという要求を次々としている。その上、演技できない女君に対して「いと軽々しきこと」などの批判も行う。これに対し、男君に完璧に「女」を演じなければならないという要求もうまく演じられなかったことに対する批判も一切見られない。先に述べたが、男君が男ジェンダーを持つ可能性があるうちは父の視線は男君に注がれ、父の期待が示される行動があるが、女君は殿上するようになってからは、父の期待や視線は女君へと転換してののである。

これについて、森本葉子氏が「若君は生まれたときは「いとど世になく玉光る」男君であったが、この場面以後、「光る」が用いられることはない。……中期段階において「光る」を用いられるのが男君から女君へと逆転し、孫誕生の描写においても女君と男君の誕生時の描写が逆転しているのである。」²¹また「男君に託せなかった期待による失望を慰めるための存在として、父の視線は女君にむけられてゆく」²²と、指摘したように、男君・女君は父の「期待」の目線に当たって、その位置づけは、二人の幼少期に反し、焦点はすでに逆転してしまったのである。

さて、男君の気持ちはどうだろう。幼少期の内気な性格は父に叱れるたびに、いつも恥ずかしく涙零れて御几帳に隠れるという外面的な行動しか描かれず、若君の心情はあまり触れてないが、宮中に入ってから、男君はこれまでとは異なった様相を呈するようになってきた。以下にその様子をあげよう。

V.

²¹森本葉子『『とりかへばや物語』考—逆転する二人の北の方』『愛知淑徳大学国語国文』22号、1999.03、愛知淑徳大学国語国文学会 p.173

²²森本葉子『『とりかへばや物語』父左大臣の期待—失望と慰め—』『愛知淑徳大学国語国文』(23)所収、2000.03、愛知淑徳大学国語国文学会 p.80

しばしば夜々のぼりて一つ御帳に御殿籠るに、宮の御けはひ手あたりいと若くあてにおほどかにおはしますを、さそこいみじうもの恥ぢしつつましき御心なれど、何心なくうち解けたる御らうたげさにはいと忍びがたくて、夜々御宿直のほどいかががさし過ぎたまひけん、宮はいとあさましう思ひの外に思さるれど、見る目けはひはいささか疎ましげもなく、世になくをかしげにたをたをとある人ざまなれば、さるやうこそはと、ひとへによき御遊びがたきと思しまとはしたる、世になくあはれにおぼえたまひけり。昼などもやがて上の御局にさぶらひたまひて、手習ひ、絵かき、琴弾きなど、起き臥しもろともに見たてまつるに、よろづつつましく恥づかしきものと埋もれしほどのつれづれよりは、何事もまぎるる心地したまふ。²³ (下線は筆者による)

男君は東宮の無邪気に愛らしさに惹かれ、東宮と同衾するようになったことによって、自分の男性性が目覚めた。そして男君がそういう性的な覚醒によって気が紛れるようになり、過去の退屈、憂鬱な性格を一掃して「何事もまぎるる心地したまふ」と快樂を覚えるようになる。このような変化をもたらしたのは、東宮という女性を通して、自らの男性性とその中にある快樂を自覚したからである。後に女君は妊娠して宇治へ脱出する前、惜別に男君を訪れ、互いに苦悩を語り合う場面では、女君の「おほやけしくもてすくよけたるほどこそ雄々しくも見えけれ」²⁴、と男君の雄々しい男性的な姿を見ることによって、その姿を鏡とするように、理想的な自分の姿も見erようになった。

VI.

「世づかざりける身どもかな、我ぞかくてあるべきかしと、かたみに見

²³同前掲注 1 p. 195

²⁴同前掲注 1 p. 323

交はしたまひて、尽きせずあはれにかなしきことども聞こえ交はしたまひ
ていみじく泣きたまふ」²⁵（下線は筆者による）

今まで「男」のあり方や異装のわが身への苦悩などについての描写はまったく見られない男君は、女君との会話を通して、はじめて自分の身を不自然さ（世づかざりける身）を直面し、自分のあるべき姿を確認した。つまり、男君の身による心身的な葛藤は物語の後半から描かれはじめた。だが、その本性に戻る過程は女君と比べて、男君の葛藤の程度や苦悩などは程浅いと思われる。その原因を追究すると、やはり男君は物語の途中、社会基準を代行する父の目線の焦点から外れたことなのである。かつて、西本寮子氏、石埜敬子氏は物語において男君造形の薄さについて『今とりかへばや』は「女の物語」「女の成長する物語」だという指摘も示唆的だと思われるが、男君の成長過程の背後に潜んだ論理、「家の論理」というべき論理を見逃してはならないだろう。後に女君は失踪し、父が病臥になるとき、ずっと焦点に外れてきた男君は以下のようなことを考えるようになる。

VII.

「男の身となりおきにし身の、幼かりしほどこそ心引く方にまかせても
過ぎししか、今はかくて過ぐるに、いつかれ埋もれたるはいとあさましく
心憂きことなり、殿の御身もいたづらになりたまふべきなめり、わが御身
は限りある御身なれば尋ね求むべきにもあらず、人はただ大方の世の響き
ばかりこそ歩くめれ、まことに心に入れて尋ねにこそあめれ、またいみじ
くともこの世の外にはいづちかおはせん、我かくてのみあらじ、男の姿に
なりてこの君を尋ねみんに、いかなる様にて尋ね出でたらばもろともに

²⁵同前掲注1 p. 323

帰り来ん。²⁶（下線は筆者による）

男君は自分の過去の性格や言動を「あさましく心憂きこと」として反省し、男の姿に戻し女君を捜そうと決意し、この時点で自分の社会的なジェンダーに目覚めた。前に男君の心情について深刻に描かれた描写もなく、この部分は男君が一見唐突な変化をしたかのように思われるが、その変化には「父の病臥」と「大将（つまり女君）の失踪」が深く関わっている。つまり、この時点では、現在左大臣一家の家長の役割を果たしている父と、将来家の繁栄を保証できる女君とともに不確定な状態になってしまい、男君しか家に対して責任を負えなくなっているのである。男君はこれを意識し、家の論理に駆使され、自分の社会的な役割、あるいは左大臣一家の息子としてのあり方を自覚したわけである。その自覚は女君への言動により明確に表れてくる。後に、宇治で子どもを産んだ女君と対面するとき、女姿になり、子を産んだ自分が「ありし様に身をまたなし変へんことは、あるべきにもあらず」²⁷と風変わった自分の身はどこに置くべきかを彷徨う女君は吉野山で出家しようと男君に訴えた時に、男君は①厳粛な言葉遣いによって女君の出家願望をやめさせる、②今後の方向に対して二人の身を取り替えるという積極的な提案をするようになっている、という変化を見せるのである。

VIII.

「わが君、かかることなたまはせそ。殿、上のおはせん限りは、我も人も世をなん思ひ限るまじき。御ことにより殿はむげに不覺になりたまへりしを、見置きたてまつりてなん出ではべりにし。げに、何にかはかくては

²⁶同前掲注 1 p. 341

²⁷同前掲注 1 p. 375

忍び隠ろへておはしますべき。また、異様にては聞こえ出でたまはんもあいなし。我なんただあるさまにもてなしてあれと言ひおきて出ではべりにしかば、誰も見え知らるることもはべらざりし身にて、そのけぢめのありなし知る人もはべらざなり。さてこそやがておはしまさめ。」²⁸（下線は筆者による）

これまでの男君とは別人のように「わが君、かかることなのみたまはそ。」と、まず、女君の困惑を鎮め、ついで女君の出奔により父親が病気になったことを伝え諫め、「げに、何にかはかくては忍び隠ろへておはしますべき」と出家を思いとどまらせているのである。その上で、下線部「異様にては聞こえ出でたまはんもあいなし」以下に見られるように、入れ替わりの提案をするのである。このように家に纏り、家を支えた二人、父の病に患う情況と女君の失踪という二つの事件をきっかけに、男君は一家の跡継としてのアイデンティティを覚醒させ、物語の中で次々と家父としての姿勢と見せてくる。

このような男君の変化は、物語が進むにつれてより強調されていく。例えば、女姿に戻った女君が帝と契ったあと、帝は女君に魅了され、恋を訴えようにも女房さえもない忍びの逢瀬であったため「御文取り伝ふべき人もなければ」²⁹ため、男君を使いとして女君に後朝の文を送る。帝が手紙を送った事情を詳しくは知らなかった男君は、宣耀殿に参上し帝との関係を悩んで悲しく泣いている女君と対面するのだが、女君の様子や気持ちに斟酌することなく「かならず御返りあるべきさまにこそそのたまはせつれ。とりわきたる御使ひの、かひなく待ち思されん、いと面目なかるべし」³⁰と言って女君の返信を催促する。ま

²⁸同前掲注 1 p. 375

²⁹同前掲注 1 p. 454

³⁰同前掲注 1 p. 456

た、女君にこの上なく魅了された帝の様子を見るときにも「かつがつ限りなくうれしく聞かれ」³¹て、一家の将来に后が誕生する可能性のあることに喜ぶのである。男君の発言は前項二. 一. 一で検討したが、ここに見られる男君の女君へ手紙の返事を催促する様子は、四の君への返信を催促する父の発言「御文書かせたてまつりたまふ」³²と似ているのではないか。つまり、父と同じ行動を男君がするようになったということであり、それは男君が父と同じポジションになり同じような役割を担いつつあるということを示す。男君は男装に戻ったときから、<家>を守るという利益心を持ち始めるようになり、父と同様に女君を苦しませる要求を出すようになるのである。つまり、家の論理で動き始めるのである。だから、男君の要求を聞いた女君は、「異人の言はんやうにものたまはするかな」³³と、内情を知らず前に互いに悩みや苦悩を語り合った男君とは別人のように感じはじめ、男君が家の理論で動き始めたことを感じていると言えよう。

さて、男君は内気で女らしく性格から、男装に戻り、父と類似した行動を取るようになってくるといふ変化をしていく。先に父の視線の焦点と父親の期待は連動していることを述べたが、このようにしっかりとした行動を取るようになった男君に対し、父親の視線が注がれるようになるかどうか、つまり父親の愛情が男君に注がれるようになるのかという点を検討して置くことも、男君の変化が家にとって望ましいものであったのかどうかをより明確にしてくれるだろう。以下の用例を通して検証しておく。

上述したように、二人の子どもが宇治で身を再び交換するという男君の提案に合意した夜、父左大臣は、夢で、尊く清らかな僧から、二人子どもの「世づかぬ」様は前世の報いとして嘆かせる業であり、天狗の働きのもたらした結果

³¹同前掲注 1 p. 458

³²同前掲注 1 p. 184

³³同前掲注 1 p. 456

だと教え、そして今、長年の祈祷の効果で業が尽きたということを告げられる。父はこの夢の内容を北の方に教え、北の方から、男君は既に男装になって女君を捜しに出て行ったことを知り、その後以下のような言動が見られるようになる。

IX.

夢にはまことなりけりとうれしながら、「この人も世に出でたまひにけるを、我も知らで」とあさましくあきれたまひて³⁴（下線は筆者による）

X.

幼かりしときより交じらひつきたまひにし大将（筆者注：女君）こそびびしかりしか、あえかに人にも見えず籠りたまひてし人とは思ふに、かたくなしくおはすらんと、思すに³⁵（下線は筆者による）

XI.

ただ大将の御にほひ有様ふたつにうつしたるやうにて、これはいまましそぞろかになまめける気色まさりたまへり。かれは少しささやかに小さき方に寄りたまへりしぞ飽かぬところなりしかど、まだ年の若かりしに、これはいますこしものものしく飽かぬところなくぞ見えたまふ。うちまぼりたまひて、夢のやうなるも、行方なきまづ堪へがたく思し出で、声も惜しまず泣きたまふ。³⁶（下線は筆者による）

IXにみられるように「これも」表現のあと、Xで二人の幼少期ごろから、男君が「かたくなしくおはす」ことを思い出し、男装に戻った男君にいささか物

³⁴同前掲注 1 p. 377-378

³⁵同前掲注 1 p. 378

³⁶同前掲注 1 p. 378-379

足りなさを感じている。後に、XI で眼前に男装に戻った男君を見たときに、父の反応は一先ず前に男装する女君を想起することであった。指示代名詞「これ」（ここは男君を指す）「かれ」（女君）という表現で眼前の男君を女君と比べるだけで、男君が自分の期待通りの様子になったことについて特に喜びなどは描かれていない。その上、父は未だに行方不明の女君を思い出して、声も惜しまずに泣くのである。父の喜びは、男君から女装に戻った女君の平安無事を伝えた後「まさしかりける夢の告げかなと、うれしさに喜び泣きさへしたまひ」³⁷て、と、女君の無事を知った時に喜びを表に出す。この部分からは明らかに父の視線や関心はまだ女君に止まっていることが分かるだろう。このような父親の態度は、女君に対する愛情が男君に対する愛情とは異なったものであることを示すだろう。つまり、子供に対する愛情は、女だから、男だからというものではなく、男君、女君個人によるものであるとも考えられるのである。だが、その根底にはやはり「家」への意識があるとも考えられるのである。

上述した父左大臣が夢を見る場面について、『新編日本古典文学全集 とりかへばや』の頭注には以下のような説明がある。

子供たちの「世づかぬ」さまは、天狗の悪業によるものであったことが明らかにされる。作中歌第一首目の左大臣の独詠「いかなりし昔の罪と思ふにもこの世にいとどものぞ悲しき」はここに呼応し、「とりかへばや」の嘆きは終息することになる。物語としてはここで結末を迎えることもできたであろう。しかし作者はここで終わらせない。新生した彼らは、これ

³⁷同前掲注1 p. 379

まで生きてきた軌跡と、どうかかわってゆくか。物語は新たな主題を切り開くことになる。³⁸（下線は筆者による）

女君と男君が本性に戻ることで、父左大臣の嘆きや苦悩は、一見すべての問題は解決されたように見えるのだが、上記の頭注が指摘するように、物語はそう簡単に終わらずに、新たな主題を切り開こうとしている。

では、ここに出された新たな主題は何だろうか。かつて西本良子氏は「『今とりかへばや』の第一主題は言うまでもなく男女の偽装とその解除、そしてそれに伴って起こるさまざまな悲喜劇を描くことにある。……その登場人物たちの活躍が副次的主題として構想の中に組みこまれ、複雑に絡み合いながら第一主題を支えているものであると思う。……副次的主題の一つとしてこれまであまり注目されることのなかった『今とりかへばや』における政治的側面」³⁹に注目し、それを検討したうえ、二人の子供が本性に戻ったあとについて、以下のような指摘がある。

この女中納言（筆者注：女君）の失踪を契機に、兄妹は偽装を解き、各々本来の姿に戻る。物語の第一主題である男女の入れかわりが一応完了するのである。そして、主人公たちの社会復帰がはじまるのだが、このあたりから、今まで沈黙を守り続けていた左大臣が動き出すことになる。……左大臣も右大臣も、「後の位」への執着が強い。右大臣は、元々家柄の壁がある上に、大君の後への夢が破れ、摂関家への接近へと政策をかえる。左大臣も、ここにそのいちいちをあげることは避けるが、后

³⁸同前掲注1 p. 378

³⁹西本寮子「『今とりかへばや』に描かれた政治的側面」稲賀敬二編『源氏物語の内と外』風間書房、1987. 11、p. 371

の位を常に意識した発言を繰り返しつつ、子供たちの因縁に涙している。
……やがて今尚侍（（筆者注：女君）は左大臣の思惑通り帝の皇子を生
み、中宮の宣旨を受け「后」となり、左大臣の勝利が確定する。⁴⁰（下
線は筆者による）

下線部で指摘されるように、父の「後の位」への期待の大きさは、男君が帰京する場面で、父の関心は女君に偏っている言動を示していることから窺える。父は「後の位」を家の繁栄にとって大きく影響を与えるものだと考えるから、目の前にいる男君が自分の期待通りに変わり、家の跡継ぎが保証されても、父は特に喜ぶ姿勢は見せなかったのであろう。さらに、男君に対し「よし、この人（筆者注：女君）を尚侍にと聞こえて、そこにこそは代はりしたまはめ」⁴¹と、女君の代わりに大将を務めなさいと指揮し、政治的な布石を着々と置いていく。つまり、二人が本性に戻ったあと、父の視線や関心は依然として一家の跡継ぎに当たる男君より後の位になれる女君に偏っている。その原因は、＜家＞の利益を守るために政治優先の視線をもっていると言えよう。

このように、父左大臣の男君への愛情を検討した結果、父の愛情には以下のような特徴が見られる。父が男君に対し①幼少期のごろは元々一家の跡継ぎとして男君は常に父の視線の焦点に当たっていたが、息子が期待に応えらず、よく父を嘆かせるので、その関心は立身出世できる女君に転換したのである。②後に女君の失踪と父の病臥を契機に、男君は一家の跡継ぎとしての自覚が目指し、父の期待通りになったが、父は「後の位」という新たな期待が表れるため、視線の焦点は依然として女君にある。要するに、父の視線は常に＜家＞に対し最大な利益をもたらすことの出来る子に向けられているのである。これは服藤

⁴⁰同前掲注 41、p. 383－385

⁴¹同前掲注 41 p. 379

早苗氏が平安朝の親子関係について指摘しているように「子どもはみんな平等にかわいがらないといけない、あるいは外見だけで子どもを判断するのは親としてあるまじき行為だ、などという倫理は確立しておらず、親の経済的・政治的利害が優先し、それで子どもを差別しても不道德ではないのである」⁴²と指摘した平安朝の親子関係と軌を一にしており、家長として父左大臣の行為は、子どもへの愛情より常に政治的利害への考慮が先行している。よって父の男君への愛情は家の利益が生まれる行動をするかどうかということと比例している。

二. 一. 三. まとめ

以上検討したように、親の葛藤は女君に偏っていることが分かる。何故かという、父は女君に対し、無条件に愛する場合と女君を苦しめると分かっているが、家の中の利益のために無理な要求を出す場合が見られるからである。それに対し、男君の場合は、父の無条件的な愛情はあまり描かれていない。それは、男君は父親に、その内向的で女性的行動により失望を味わわせてしまうからである。また、男君の異性装は政治的な利害や家の利益を考慮する上で、父にとって利するところは少なかった。よって、親の関心はほとんど女君に転換しているのである。

物語には、女性的な男君と男性的な女君は常に「二者一対」⁴³として描かれ、常に男君と女君を見る主体の視線によって、指示代名詞と伴って二人を対照的に描いていることがわかる。視線が注がれる多少によって、父の愛情が単に親として無条件の愛情ではなく、家への利益があるかどうかを愛情の基盤としてあることが窺えるのである。

⁴²服藤早苗『平安朝の母と子』、中央公論社、1991.01、p.80

⁴³菊池仁『『とりかへばや物語』試論—異装・視線・演技—』片野達郎編『日本文芸思潮論』桜楓社、1991.01

第二節 右大臣家一娘たちへの愛情

はじめに

第一節で左大臣家の二人の子どもへの愛情を検討した。左大臣の愛情は、その「視線」と「笑み」の表現より、家の利益を多くもたらす可能性のある子どもへより多く注がれることが分かった。左大臣家と同じく、政治的な力を持つ右大臣家で子どもの結婚や繁栄が家の利益と関わるわけだが、右大臣家においても左大臣家のような親の愛情のあり方がみられるのだろうか。また、四の君と姉たちは右大臣家娘として生まれた。その父親は娘たちに対し、どのような政治的な考慮をするか。親の無条件な愛情は、そういう政治的な配慮にどう葛藤するか。本節は以上のような問題意識を抱きながら、検討して行きたいと思う。特に、四の君の勘当と和解を通して、右大臣の子どもへの愛情を考えたい。何故、右大臣は四の君を勘当したのか。

二. 二. 一. 四の君への愛情

『今とりかへばや』において右大臣は、主人公きょうだいの叔父であり、その右大臣は四人の娘に恵まれている。大君は今上帝（後の朱雀院）の女御、中の君も春宮の女御になっており、三、四の君は未婚で右大臣邸にいと紹介される。

末子の四の君は、不足な点はなく素晴らしいという優れた美貌を持ち、ことに父右大臣は「この君をのみ限りなきものに思ひきこえたまひ」⁴⁴て、「姉君たちよりもこよなく親たちの思しかしづき」⁴⁵て、最も親の愛情を受け、将来の后がねとして育てられてきた。ところが、物語が始まるや否や、帝（後の朱雀院）が女一宮の立太子をすることで、鍾愛する四の君の東宮入内は不可能と

⁴⁴同前掲注 1、p. 331

⁴⁵同前掲注 1、p. 186

なり、父の政治的な後宮戦略として、四の君を関白左大臣の息子（実は女）と結婚させることになる。父右大臣の政治戦略については、曾根誠一氏が以下のように指摘している。

右大臣は、母方の祖父として摂政大臣関白を継承すべく、緻密な戦略を立て布石を打っていることが確認されるのである。後は、帝や春宮との間に皇子の誕生を得て、関白左大臣である父大殿と協力し、孫の皇子を春宮・天皇に擁立するとともに、娘の女御を皇后に押し立てて行くだけの、ほぼ完璧な後宮戦略が実施されていることが知られるのである。⁴⁶

父右大臣は鍾愛する娘が同性婚をすることになるなどと想像もせず、この政略結婚を積極的に推し進め、凶らずも四の君を後に不幸な道に導いてしまうのである。何故なら、四の君は女君と結婚したあと、名実のない夫婦生活を送ることになるからである。好色な宰相中将に強引に関係を結ばれるまでは、女君との結婚の内実の不自然さには気がついていないが、宰相中将との関係が発生した後には、いつも優しく語り合う女君との淡い関係と反して、宰相中将は四の君に恋に身を焦がすという恋愛感覚を味わわせ、宰相中将を拒むことができなくなる。そして、宰相中将と密通関係を結ぶことになった。四の君はこうして夫への貞節と恋に落ちる気持ちの間で彷徨い、悩みで心身ともに弱っていく。やがて、宰相中将との子が二度もでき、夫（女君）との夫婦関係は破綻するのである。しかし、真相を知らない右大臣は、四の君の苦悩を察知することなく、自分の布石通りに左右大臣両家の関係を強化できる孫が誕生することと

⁴⁶曾根誠一『『とりかへばや』権大納言の左大臣昇任の論理—兄右大臣越階の政治性』古代文学研究第二次（18）、2009. 10、p. 72

見込み、四の君の妊娠することに「いといみじく思して、笑みひろごり」⁴⁷で、大喜びするのである。右大臣が一家の洋々たる未来の光景を思い描いて喜ぶ一方で、自分の婿（つまり女君）、宰相中将と四の君の間には複雑な三角関係が形成されるのである。そして皮肉なことに婿にも自分の娘にも宰相中将の子が出来てしまうのである。

ところが、女君は自分の懐妊を隠すために宇治へ隠棲を決意した。京で失踪してから四の君の密通の噂が囁かれるようになった。この噂を左大臣家から聞いた右大臣は「あさましくいみじとあきれ惑ひて、（筆者注：左大臣の邸に）参りつらんことも面恥づかし」⁴⁸と驚き呆れてしまい、自宅に帰ったあと、四の君に問いただした後、以下のように言う。

「いと心憂し。このうちにも、なものしたまひそ。今におきてはまぼりいさめんも無益なり。人の聞き耳、大臣の思さんところもあり。大将も世を捨てても聞きたまはんこと、いと恥づかし。聞きつけて憂しとこそ思ひけれとだに聞かれたてまつらん」とて、ほかに放ちわたして見聞こえたまはず」⁴⁹（下線は筆者による）

四の君の行為は右大臣の期待に裏切り、そして自らも世間で面目が立たないと思い、激怒のあまりに四の君を家から追い出そうとするのである。鍾愛していた娘に裏切られた父の怒りと家の名誉を守ろうとする気持ちが見られる言動である。

⁴⁷同前掲注 1 p. 217

⁴⁸同前掲注 1 p. 330-331

⁴⁹同前掲注 1 p. 331

父の怒りによって、居場所を失った妊娠中の四の君は「いとど身もなくあはれげなるさまにて、髪はいと長くうち添へて腹はいとふくらか」⁵⁰という頼りなく憔悴した様子になり、宰相中將は妊娠した女君と自分の間で奔走するのだが、頼れる人もおらず四の君の衰弱は一層激しくなっている。やがて四の君は姫君を産む。産後の衰弱によって瀕死状態のなか、四の君は「殿をいま一度見たてまつらず、思し直されでやみなんとするよ」⁵¹と、自分は父右大臣の許しを貰えないままに死ぬことを思い出し、悲しく泣く。この状況を知った右大臣はすぐ四の君のもとに出向き、意識もない娘の状態を見て、自分の依怙地な行為に後悔し、娘の姿を見つめ、以下のような言動を取る。

わたりて見たてまつりたまふに、いみじくをかしげなる人の、あるかなきかなる様にて、いとこちたく長き髪をうち添えてふしたまへるは、いかならん仇敵さらにおろかに思ふまじきを、まいてさばかりかなしくしたまふ親の御目には、何せんにとひがひがしく、いかにつらしと思すらんと、くやしうかなしくなりて、「あが君や、かうなりたまふまで見たてまつらざりけるよ。限りなく思ひきこえさするあまりに、思はずなることをうち聞きしがうれはしくやすからざりしままに、言ひ勸事しきこえてける、くやしきこと。さはれや、ただ生きて見きこえんにますことあらじを、仏神、わが命にかへたまへ」と声も惜しまず泣き惑ひたまひて、御湯などせめてすくひ入れたまふに、あるかなきかの御心地にも殿の御声と聞きて、目をさめて見開けて御顔うちまもりて涙の流るるさまを、いみじくかなしく心

⁵⁰同前掲注1 p. 336

⁵¹同前掲注1 p. 395

苦しきに、御祈りなども尽くして、つと抱へて惑ひたますに、⁵²（下線は筆者による）

右大臣は四の君の危険な様子を見、自分が娘に勘当を与えたことに後悔し、「世間の非難などはどうでもよい、とにかく生きてください」という気持ちになり、号泣した。また、自分の怒りは下線部のように「限りなく思ひきこえさするあまりに、思はずなることをうち聞きしがうれはしくやすからざりしままに」と、強く愛するがゆえに、愛するものの醜聞をきき期待を裏切られたため動揺し、強い態度に出たためのものだという。憎しみは愛情の裏返しというが、父右大臣の四の君に対する激しい反応は、四の君への愛情の深さであるともいえるのである。そしてその鍾愛の娘は病床にいて「あるかなきかの御心地」のなかで、「殿の御声」父の声を聞き意識を取り戻し、気力を振り絞って目を開き、父の顔を見つめ涙を流す。その様子は父右大臣の視線を通して「目をさめて見開けて御顔うちまもりて涙の流るさま」と描写される。父の視線を通して鍾愛の娘の頼りない姿が認識されることによって、父親である右大臣に「いみじくかなしく心苦しき」という、父親の子供に対する愛情を引き出していく。左大臣は祈禱を指示するものの効果は得られず、なすすべもなく「つと抱へて惑ひたます」父の姿が描かれるのである。抱く父という描写で、父の許しと和解を描くのである。父に抱かれた四の君は、居場所のない自分は出家したいという意思を父に伝えるが、右大臣は自分は生きている限り、そのようなことを考えてはいけないと娘に言い、一刻を争って四の君を邸に連れ戻し、片時も離れず看病し、二人は本当に和解をする。この右大臣の言動から、家の面子を越えたところにある、一人の親として一人の子どもに対する深い愛情を見せている。

⁵²同前掲注1 p. 396

右大臣が一人前の右大臣という官位にふさわしく、自ら一家の利益のため子どもへの教育や結婚を考える場合、政治的戦略を前提に画策し布石を置くことは可笑しいことではないだろう。そして、親としては、自分の布石どおりに動かない娘、つまり自分の期待を裏切る娘である四の君に怒りを向けることは当然である。しかしその怒りも、娘の憔悴した様子を見ることによって、すべて解消し、この場面に現れた父親はただ娘の体は健康に回復を祈るのみなのである。一家の将来や自分の期待、世間の非難などどうでもいい、わが娘四の君は何よりも大切であるという子どもに対する深い愛情、無条件の愛情を持つ親の姿勢を見せるのである。

これは、前項二. 一. 一で考察したように、左大臣が、四の君の密通・出産を巡って出奔し出家を望む女君に、「人目はめやすくもてなし」といって世間体を取り繕うようにと指示したような愛情の形とは異なることにも注意しておきたい。

以上のように、右大臣の四の君への愛情は前項で検討した左大臣の子どもへの愛情と、随分違う様相を見せている。それは、同じ政治的戦略の布石として子供を使う父親たちではあるが、左大臣は一家の利益を遂げるために女君の苦しい気持ちを察知していても、次々と女君を苦しませる要求を出していく。これに対し、右大臣は一家の利益のため、政略結婚などのアレンジ、期待を裏切ったときには怒りをみせたが、娘の苦しく憔悴の様子を見るにつけ、何事も忘れてただ健康なわが子に回復することだけを望むという、政治よりも子どものほうが大事だという姿勢を見せるのである。

二. 二. 二. 姉たちへの愛情

前項で父右大臣の四の君に対する愛情を考察した上、政治よりも子どものほうが大事な姿勢を見せていることが分かる。では、他の姉たちに対する愛情はどのような形で描かれているだろうか。

「今とりかへばや」においては物語の中を見渡してみても姉君たちに対する愛情を示す描写は見る事が出来ない。ただ、四人の娘の上の二人がそれぞれ朱雀院女御・当帝女御になっていることを考えていると、十分に大切に教育を行っていることが分かる。だが、親の愛情という面から考えると、四の君以外の娘に対する愛情は薄かったことが推測できる。

2.2.2で述べたように、四の君はその密通と妊娠によって父親から勘当されるのだが、四の君の勘当の原因となった情報を父親にもたらした乳母については「この君をのみ限りなきものに思ひきこえたまひて、異御方々はことの外にのみ思ひ落としたまへるを、妬しいみじとのみ思ひつめける御乳母の、いと心のうちあはぬ、」⁵³と描写される。この乳母は、たの娘たちの乳母であったようだが、父右大臣の四の君に対する鍾愛が乳母には「異御方々はことの外にのみ思ひ落としたまへる」ものに見え、乳母の心を「妬しいみじとのみ思ひつめ」させるような嫉妬を生む待遇の差を生んでいたらしい。このように乳母に感じさせるほど、親の愛情という点では他の娘たちと四の君の間には軽重があったと考えられる。

この点は親の愛情というものを考える上でも、興味深い。何故かという、父右大臣はそれぞれ既に朱雀院・当帝の女御になった大君・中の君という成功した娘たちに薄い愛情を見せる一方で、自らを失望させた四の君に対し、却って無条件で深い愛情を見せている。それは、父右大臣の四の君に対する愛情は

⁵³同前掲注1 p. 331

盲目的で、自分の鍾愛する子一人に偏っているからであろうし、またそれが親から子どもへの愛情の姿なのであろう。そして、右大臣の四の君への愛情に嫉妬する、他の姫君たちの乳母を通し、盲目的に愛情を注がれない姉たちの姿を浮き彫りにすることによって、戦略的な愛情と盲目的な愛情を持つ右大臣の姿を見ることが出来るのである。また右大臣のこのような盲目的な愛情は、左大臣のいつも子どもへ理知的な視線を向け、家の利益をもたすことが出来る子に注目し続ける左大臣愛情とは対照的であるといえよう。

二. 二. 三. まとめ

以上の考察によると、右大臣の葛藤は四の君に偏っていることが分かる。それは、父右大臣が父親としては四の君に最も期待や愛情を注いで育ててきた子であったにも拘らず、その子は密通事件で父を失望させ、自らの政略的布石も破綻させてしまう。だが、右大臣は自分を失望させた娘に対し、やはり切り離すことができず、病臥する娘を目の前にして、この罪を犯した子のことを引き受けたのである。こういう深い愛情は、自分の期待通りに生きている大君と中の君の身の上では見ることはできないのである。よって、右大臣は同じ娘である姫君たちに対し、娘の成功するか否かを問わずに、自らの親としての愛情を盲目的に四の君一人しかに注いでいないことが確認されたのである。この右大臣の親としての特徴は、第一節で検討した左大臣の愛情の形と随分違う様相を呈していることも分かるだろう。

なお、右大臣・左大臣それぞれの親としての愛情について、鈴木弘道氏が示した愛情のあり方とは正反対になっている。

右大臣及び北の方の、四の君に対する愛情は、左大臣夫婦の、若君・姫君に対する愛情に似通った点があり、描写も類型的であるが、強ひて愛情の性格を比較するならば、後者が盲目的であるに反し、前者には稍ゝ理性的に目覚めたものが見られるやうに思はれる。（中略）しかるに、右大臣が左大臣から意外な真相を聞かされるや、忽ちその愛情は峻厳なる処罰と化して四の君は勘当される身となり果てるが、この一時的な子に対する父親の激情が母親の温かい慈愛に依ってやがて冷却し、却って四の君に対する不憐の情に変わって行く経過などは、左大臣夫婦の場合には見られぬ理性的な愛情が描写されてゐるのである⁵⁴。（下線は筆者による）

鈴木氏は、下線部のように左大臣の愛情が盲目的で、右大臣の愛情が理知的であるとするが、これまで検討してきたように、右大臣の四の君に対する愛情こそが盲目的である。何故なら、右大臣は四の君が自らの政治的戦略の布石として十分に成功をもたらすか否かを問わずに、愛情を注いでいるからである。

確かに、鈴木氏の指摘するように、母親のとりなしによって怒りが冷却され最終的に受け入れる父の姿は、「理」で動いているかもしれない。だが、その許しを支えるものは、娘をただ娘として愛する盲目的ともいえる父の愛情であると言える。

よって、本項では、政治的戦略と愛情という問題を通して、右大臣と左大臣の愛情の違いを明確にすることができた。

⁵⁴鈴木弘道「とりかへばや物語に現れた愛情」鈴木弘道著『平安末期物語についての研究』赤尾照文堂、1971.08、p.325 - 326

第三節 吉野の宮家—吉野の姉妹への愛情

はじめに

第一節と第二節で検討した左右大臣の行為は、常に一家の利益に着眼し、子どもを政治的な布石として視することで、それぞれの子どもはそれが自分を苦しめるものであっても父の命令を従わなければならないものとしてあった。また、左大臣・右大臣ともに二人の父親は、家の栄光を追求する過程で世間的な規範に拘わった功利心と親としての愛情の間で葛藤していることが分かった。

さて、女君は自分の「世づかぬ」身を苦しめ、出家の念頭に浮かんだとき、吉野山の麓に住んで修行している吉野の宮の噂を聞いて宮に対して慕う気持ちを持つようになり、吉野を訪れた場面があるのだが、この吉野にも一組の親子関係が描かれる。この俗世を離れる代表として描かれたとも言える吉野の宮は、自らの二人の娘（以下姉を姉宮、妹を中の君と呼ぶ）に対し、どんな愛情の様相を示しているのか。また、物語に仙境のイメージを備えている吉野は、貴族社会の規範が及ばない場所でもあり、ここに生きている吉野親子三人は、京中の左右大臣の親子関係とはどんな違いがあるのだろうか。

二. 三. 一. 吉野の姉妹への愛情

吉野の宮は先帝の第三の皇子であり、「世の人のしとすること、方々の才、陰陽、天文、夢解き、相人などといふことまで、道きはめたる才どもなりける」⁵⁵という万事に優れた才能を備えている人物として物語に登場する。吉野の宮は若いとき留学生として唐土に渡したことがあり、唐土に滞在する間に、その第一の大臣の娘と結婚するのだが、妻は二人の娘たちを産み残して亡くなっ

⁵⁵同前掲注 1、p. 227

たことで、悲しみのあまり出家をしようとする。しかし、二人の娘たちが絆しとなり、出家を諦める。その後、唐国に吉野の宮を殺そうとする人が現れ、やむを得なく日本に帰ったという経歴をもつ。帰国したあと、一国の皇子という身分に当たって複雑な政争に巻き込まれた吉野の宮は、再び世を背こうとしたが、やはり二人の娘たちが絆しとなり、娘たちを連れて吉野の山に隠棲すし、穏やかな日々を送ってきた。だが、出家への望みということが念頭から離てはいない。これは、後に女君と対面するとき、宮の以下のようなことばからも分かるであろう。

姫君たちの人めき出でたまはんしるべなりと御心のうちに悟り思せば、
いとなつかしくうち解けたまひて、昔よりこことどもを、唐土に渡りたま
ひてありしさま、かさしういみじき目を見て、世になき女二人をえ見捨て
ず、例なきやうなる世の音聞きかしこく身に添へて、憂かりし世の乱れに
もひきかかり、なおこの人々を道のほだしにて、これより深くも身をえ隠
さぬよしを言ひ続けたまへる⁵⁶。（下線は筆者による）

吉野の宮は女君と対面すると、女君こそが将来娘たちを世間に連れて行くことのできる肝要な人物だと悟り、心を打ち解けて自分の数奇な経歴を女君に親しく語ったのである。会話の中に、今まで見捨てられず二人の娘は自分の仏道への「道のほだし」だと表明したことに注意したい。つまり、宮が女君の出現を自分の出家の宿願を叶えるために娘たちの後見を期待できる人物として評価したから、自分の経歴を何もかも語って、娘たちを「道心の妨げ」だと女君に紹介し、将来娘たちを世話できる後見を探したいという意向をわざと漏らす

⁵⁶同前掲注 1、p. 238

のではないか。後に、娘たちを女君に引き合わせる場面も、女君は帰京前の場面においての会話も「聞こえさせつるほだしども」⁵⁷、「ほだしにかかづらひはべる人々」⁵⁸と、何度も娘たちは道心の妨げだと女君に強調している。更に、三人が対面するときには、長年吉野の山に隠棲する娘たちが、男として異性装をする女君を見て恥ずかしく思い、部屋の奥に隠れようとする、吉野の宮は「世の常にもてなしたまはんも違へり。うしろめたくはあるまじきを」⁵⁹と娘たちを諭し、積極的女君を娘たちのもとに導き、三人が早く馴れるように工夫したのである。その結果は、女君の「この世に生きている限りは、後見させていただくつもり」という承諾を得るのだが、女君との対面する場面において吉野の宮の言動や言葉などから、娘たちによい後見をみつけ、自分が仏道に専念したい強い意欲が窺えるだろう。

その後、宇治に隠棲する女君を捜しに男装に戻って吉野を訪れる男君に会う吉野の宮は、男君に対しても自分の娘たちを言及するとき「はかばかしかるまじく、わが身のほだしとなり」⁶⁰と同じ明らかに娘は自分の修道の「ほだし」と男君に話した。更に、以下のように言う。

いみじかりける人の御相かなとうちかたぶきて、これぞわがむすめに縁ある人にもものしたまふめりと見たまふに、かつがついとうれしく頼もしくて、所につけたる御饗などをかしくしなしたまひて、いにしへおりの御物語などこまやまに聞こえたまふ⁶¹。（下線は筆者による）

⁵⁷同前掲注 1、p. 241

⁵⁸同前掲注 1、p. 250

⁵⁹同前掲注 1、p. 242

⁶⁰同前掲注 1、p. 356

⁶¹同前掲注 1、p. 356-357

相人の能力のある吉野の宮は、娘たちの縁のある人の出現することで、「かつがついとうれしく頼もし」と大喜びを見せ、男君を歓待し、女君と対面するときと同様に、自分の数奇な経歴を親しく語る。更に、姉宮を男君に紹介するとき、女君と入れ替わった男君が姉宮に好色めいた行動をすることを知っ
ながら、「いかに宿世にまかせてわがあたりを放ちていますこしひとへに心を澄まし果てん」⁶²と、娘を身元から放して、修行に専念したいと考え、姉宮に「この人は前の女君とは別人だ」と教えることなく、二人の契りを許すのである。父吉野の宮の言動には、自分が仏道に専念するために二人の娘たちを自らの身元から切り離そうとする意欲が随所に現れている。吉野を訪れた女君・男君に対しても、積極的に縁つけようとする姿勢を見せる。そして、ついに姉宮と男君の契りを取り持つのである。父吉野の宮の意思を知る男君はその後、姉宮は京に迎えるという提案を出したが、幼いから吉野に住み慣れてきた姉宮は「人笑はれ」と世間の目と将来の不安定さを考え、拒絶する。

いくらばかりも見馴るることもなき人にうちなびきて、わが身ひとつにもあらず、中の君を遅らかすべきにもあらねば、引き具せんにもところせし、この世の外に住み果てで、同じ麓隔てぬ御住まひならず、見たてまつること難く、宮の御有様をも思ひやりきこえさせん、おぼつかなさいみじかるべし、また、さるいみじき所に、人にも似ずうひうひしくてにはかにたち出でても、人笑はれに、憂きこと添ひて帰り入らんも松の思はんこと恥づかしきを、と思ひて⁶³（下線は筆者による）

男君の提案に対し、姉宮は出会ったばかりの男に身を任せて家を離れるという未知の将来に不安を感じている。これは、新編古典文学全集『とりかへばや』

⁶²同前掲注 1、p. 390

⁶³同前掲注 1、p. 398

の頭注の指摘するように「姉妹が吉野を出ることは父宮の願いであったが、姉宮は決心がつかない。知り合って日も浅い男君を頼りに妹まで連れてゆく不安、父宮と遠く離れて住む不安、都で人々の物笑いになるかもしれない不安。あれこれ考えれば、とても京に出る気にはなれないのである」⁶⁴と考えているからであろう。父吉野の宮の期待する道には、娘は不安しか感じられず男君の申し出を断るのである。だが、男君が二条邸を建て、再び吉野の姉妹を迎えに来るときには、逃れるすべもなく上京することになる。姉宮は出発前に「もの憂くのみ思さる」⁶⁵と悲しむ様子を見せるが、父である吉野の宮の胸には、悲しみよりも長年の願いである出家が果たせることに喜びを感じる心が勝っているようである。

宮はいとうれしく、かひあるさまと見送りきこえたまふ。名残なくかい澄む心地して、心細く思さるれど、一筋におこなひ勤めさせたまひければ、いみじくうれしく、年ごろ思しつる本意かなひ果てぬる心地せさせたまふ。⁶⁶（下線は筆者による）

娘たちの上京は心細く感じてはいるが、今後仏道に専念できることを思うと、長年の願いである出家が実現できることに喜びを感じていることが分かる。父吉野の宮は別れの際に、親としての愛情は「心細く思さる」や「うち泣きたまひ」⁶⁷で娘と唱和する表現では窺えるが、頭の中はただ一途に出家が成し遂げられるように願っているから、娘の不安な気持ちを察知することなく、最後まで姉宮の「心憂い」気持ちに気づかぬまま姫君たちと別れる。娘に後見を見つ

⁶⁴同前掲注 1、p. 398

⁶⁵同前掲注 1、p. 462

⁶⁶同前掲注 1、p. 464

⁶⁷同前掲注 1、p. 462

けるという処世をする父吉野の宮は、親としては理知的でよい選択を行ったといえよう。しかし、娘たちの身の安定は考えるが、心の中までは十分に斟酌することができない。吉野の宮の親としての愛情は、常に自らの出家への願望の下位に置かれているようである。

二.三.二. まとめ

以上、父吉野の宮の娘たちに対する愛情は、常に自らの出家への願いとの間で葛藤を引き起こしていると言えよう。簡単にまとめると

①俗世での政争に疲れた身は出家を望むが、幼い娘たちを見捨てることができず、娘たちのよい後見を見つけ、娘たちの身の安定を図ったうえで、出家を行おうとする。

②女君・男君の出現は娘たちの身を安定させて手放す絶好の機会と考え、彼らとの関係を積極的に取り持ち、自分の宿願を成し遂げるが、かえって娘に不安を抱かせる。しかし、父はその不安を察知することなく、子どもを自分の期待の通りという道に送り出し、それぞれと別れる。

このような親の愛情の示し方は、前節で検討した左右大臣と類似した行動だといえる。父吉野の宮は貴族社会の規範が及ばない場所に隠棲しているという世俗から外れたところにいる人物として描かれているが、左右大臣と同じように、自分の期待することのために、子どもを苦しませる道へと導いてしまう。また、自らの願望を成し遂げるには、布石を打つような行動も見られる。

だが、「<家>の繁栄」のために子供たちを苦しませる左右大臣とは異なり、吉野の宮は一心に仏道に専念するために、俗世の塵縁をすべて切り離そうとしている。これは、寧ろ「<家>の解散」に向けているのではないか。この点は、

今まで検討した家々とは異質なものであり、聖地のイメージを持つ吉野に住んでいる一家の葛藤だと思う。



第三章 子どもの葛藤

はじめに

「今とりかへばや」の面白さは、きょうだいの入れ替わりが終わったところで大団円を迎えたとも思われる「古とりかへばや」を、大団円のあとに、入れ替わりの大きなきっかけとなった秘密の子供たちとその親の関係を描くところである。また、秘密の子供たちの出生や養育には、作品に登場する第一層の子どもたち（主人公のきょうだい・四の君・女の一宮・吉野の姉妹）の恋が大きく関わる。

本章においては、作品に登場する第一層の子どもたちが（主人公のきょうだい・四の君・女の一宮・吉野の姉妹）「外的葛藤」と「個人的・精神的葛藤」を分析してみる。まずは二人のきょうだい異装時代それぞれが出会った恋、または婚姻生活をめぐる場面を抽出し、それぞれ同性・異性の恋の相手と互いにどう見ているのか、また恋によって自分をどう認識していくのかを明らかにしたい。そして物語中段からきょうだいが本性に戻ることで、何かの変化があったかを考察する。第二節ではまず第一章で考察した親の視線に基づいて、子どもたちがどう反応していくかを考察することによって、子供たちの葛藤を考察していきたい。

第一節 恋に対する葛藤

本節では、男君と女君が恋に対して、どんな行動を取り、どんな反応をしているのかを分析してみたい。二人は異装時代と異装解除後に出会った恋の相手に対する行動を分析し、その行動の背後に働いている意識はどんなものか、また「恋」は二人にどんな影響を与えたかを解明していきたい。

三. 一. 一. 女君の恋

「今とりかへばや」において、女君は「恋」めいた場面では、その異性装及び状況に応じて「男」も「女」も演ずることをする。そして、「恋」めいた行動によって、自らが典型的な「男」「女」と異なり、いかなる人間ということを実感させるものようである。

まず、宰相との関係を見てみよう。女君は宰相との関係によって、自らが女性であることを自覚される。例えば、妊娠した女君は宰相中将に宇治に迎えられ、宰相中将は京にいる同じ自分の子を妊娠する四の君が父右大臣に勘当を与えられたという窮状を知り、二人の間に往還するようになるにつれ、女君は宰相中将のいない間に物思いに耽り日々を過ごすしかない自分に対し、以下のようなことを考えた。

かくてのみあるべきなめり、とる方なくもあるべきかなと見るままに、人は我に劣らず深き方に心を分けて、これに五六日、またかれにさばかりと籠り居たまふ絶え間を、さもならず、待ちわたり思ひ過ぐさんこそあ
いなく心尽くしなるべけれ、さりとてもとの有様に返りあらためなどせん
ことはあるべきことならず、ともかくもたひらかにもしあらば、吉野に参りて尼になりてあらん、と思すを慰めにしたまへるを、中納言は知りたまはず、今はおだしくかくて見るべきものとうち解け思しては、限り限りで見ゆる有様のいみじく心苦しきにあさからず心を分けて、大方の世にはばかりて歩きもしたまはぬままに、なかなか心やすくこの二所に通ひ見たまふ。¹

¹石埜敬子校注、訳『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』小学館、2002、04、p. 352

この場面で注意したいのは、女君が、「かくてのみあるべきなめり」と一般の女ならばどのように行動するか、ということを考えていることである。しかし、女を演じながらも、「待ちわたり思ひ過ぐさんこそあいなく心尽くしなるべけれ」のように、その行動を否定するのである。

宰相との関係は、「恋」をする女のように模倣による行動は出来るが、宰相の好色な様子を見ると、自分は典型的な「待つ女」になれないという自覚をする。その自覚は、宇治に子供を残し、異性装を解いて自ら京に戻るという決断させるものとなる。そして、京に戻って内侍として東宮の傍に仕えることになるのだが、その後、帝と契るが女君は女を演技していることが明らかに分かるのである。

女君は帝に部屋に侵入されたときに、次のような考えをめぐらす。

男の御様にてびびしくもてすくよけたりしだに、中納言に取り籠められてはえ逃れやりたまはざりしを、まして世の常の女び、情けなくは見えたとまつらじと思すには、いかでかは負けじの御心さへ添ひていとど逃るべうもあらず乱れさせたまふに、せん方なく、恥づかしうわりなくて声も立てつばかり思いたるさまなれど、人目をあながちに憚るべきにもあらず²
(下線は筆者による)

「まして世の常の女び、情けなくは見えたとまつらじと思す」というのであるが、これは、自分も家を守るためという意識があるからか、帝との関係を通

²同前掲注1、p. 450 - 451

して、自分は「待つ女」として典型的な女になれないとしても、「待つ女」が持つ弱いイメージを演じ続けている。つまり、女君にとって、「男」も「女」も他者の模倣であり、自分の本質とは違うものであるということにも気づいていくということである。このような「典型的な男／女」とは違う自分ということへの自覚は、「恋」めいた行動によって、女君にもたらされたものである。

そして、面白いことに、中將も帝もそのような女君の憂鬱に気がついてはいない。女君の演技について、菊池仁氏が以下のように指摘している。

『とりかへばや物語』における性別は先天的や生得的ならぬ、演技という学習過程を経てこそ初めて獲得され実体化されうるものであることを示している。……『とりかへばや物語』においては回復すべきアイデンティティーそのものの存在すら不確定である。見方によれば、『とりかへばや物語』を主人公が（たとえ他人の視線に応じた演技を通してであっても）内面というものを形成してゆく一種の教養小説とも解釈できる。³（下線は筆者による）

生まれてから男を演じてきた女君は、宰相中將と帝という二人の男性との関係を通して、「女」のあり方を身に付け、学んできたのである。そして、女君はそういう過程で世間が築き上げた「男」と「女」の規範に葛藤していると言えよう。

三. 一. 二. 男君の恋

女君にとっては、「恋」とは、男女それぞれの「恋」の行動を模倣することによって、自分の本質を考えるものであった。一方、第二章でも触れたが、男

³菊池仁『『とりかへばや物語』試論—異装・視線・演技—』片野達郎編『日本文芸思潮論』、桜楓社、1991.01、p.173 - 179

君は女東宮との関わりによって、自分の男性性に目覚め、男性ジェンダーを獲得するにしたがって、父左大臣の家を取りまとめるもの、いわゆる家長としての役割を徐々に担うようになる。また、男君が男性ジェンダーを獲得するにしたがって、多くの女性と関わりを持つ「好色性」を持つようになる。

そのように、男性的な行動を取るのは、生来のものなのか、それとも模倣しているものなのか、不明瞭である。ただ、男君が社会が求める男らしさに安易に順応しているようにも見える。安田真一氏は男君は女として生活していたにもかかわらず、男に戻ったときには四の君に男としての理論を振りかざすと指摘し⁴、石埜敬子氏は「男君の造型が、たとえそれが女君の苦悩を反措定的に際立たせる意味を持つにしても、社会の求める男らしさにあまり安易に順応し類型的に終わっていることと対照的である」⁵と指摘しているように、男君の恋は、男君の女としての経験をすべて消しさり、男の理論のなかに男君が飲み込まれた行くものようである。

男君が物語のなかで、初めて男性性を示すのは、女東宮とのかかわりにおいてである。

しばしば夜々のぼりて一つ御帳に御殿籠るに、宮の御けはひ手あたりいと若くあてにおほどかにおはしますを、さそこいみじうもの恥ぢしつつましき御心なれど、何心なくうち解けたる御らうたげさにはいと忍びがたくて、夜々御宿直のほどいかがさし過ぎたまひけん、宮はいとあさましう思ひの外に思さるれど、見る目けはひはいささか疎ましげもなく、世になくをかしげにたをたをとある人ざまなれば、さるやうこそはと、ひとへによ

⁴安田真一「<女>の世界あるいは<女>の不幸—『とりかへばや』四の君をめぐって—」『古代文学研究（第二次）』第4号、1995.10、p.51-52

⁵石埜敬子校注、訳『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』解説小学館、2002.04、p.534

き御遊びがたきと思しまとはしたる、世になくあはれにおぼえたまひけり。昼などもやがて上の御局にさぶらひたまひて、手習ひ、絵かき、琴弾きなど、起き臥しもろともに見たてまつるに、よろづつつましく恥づかしきものと埋もれしほどのつれづれよりは、何事もまぎるる心地したまふ。⁶（下線は筆者による）

男君は尚侍として女東宮のもとに仕えるようになり、夜東宮と同衾すると、「いと忍びがたくて、夜々御宿直のほどいかがさし過ぎたまひけん」ように、かなり自然に男性性を発揮している。だが、その後、男性理論を発揮することはないのであるが、女君の吉野失踪にあたり、異性装を解き、男性ジェンダーを担うことを意志的に示そうとする。

男の身となりおきにし身の、幼かりしほどこそ心引く方にまかせても過ぎししか、今はかくて過ぐるに、いつかれ埋もれたるはいとあさましく心憂きことなり、殿の御身もいたづらになりたまふべきなめり、わが御身は限りある御身なれば尋ね求むべきにもあらず、人はただ大方の世の響きばかりこそ歩くめれ、まことに心に入れて尋ねにこそあめれ、またいみじくともこの世の外にはいづちかおはせん、我かくてのみあらじ、男の姿になりてこの君を尋ねみんに、いかなる様にて尋ね出でたらばもろともに帰り来ん。⁷（下線は筆者による）

東宮と契ったあと、男君は自らの自然な男性性が目覚めたが、彼の心理的な変化について深くは描かれていないのである。ところが、父の病臥と女君の失

⁶同前掲注 1、p. 195

⁷同前掲注 1、p. 341

踪をきっかけに、自分の今まで内気で女々しい生きてくることに「今はかくて過ぐるに、いつかれ埋もれたるはいとあさましく心憂きことなり」と反省するようになり、「我かくてのみあらじ、男の姿になりてこの君を尋ねみんに、いかなる様にて尋ね出でたらばもろともに帰り来ん」と、父左大臣と女君の不在という危機に落ちる一家を救おうとする意志を見せ、自らは一家の跡継ぎとしての自覚をしたのである。

その後、男君は、他の女性と関わりを積極的に持つようになり、父の役割を代行するようになる。例えば、男君が男姿に戻したあと、昔女君と親しく語り合う麗景殿の女に近づき、そっと部屋に滑り入り、「いとのだやかに騒ぐべきにもあらず、うちたゆめてやうやう隔てなくなりゆきたまふ」⁸と積極的に彼女を求める場面が描かれたことある。更に、自分の子を懐妊する東宮を見捨てたいという男の薄情の態度を見せ、典型的な好色男のような行動を取るようになったのである。

さらに、女君は帝の子が五ヶ月になり、出産のため里下がりするとき、父左大臣邸の代わり、女君は男君が築きあげた新居二条邸に帰ったのであることから、この時期は、男君が既に父の役割も果たすようになったと言えよう。この点について、伊達舞氏は以下のように述べている

ここで左大臣邸と二条殿、父と兄の立場がさりげなく入れ替えられていることに気付く。この差し替えに全く不自然さが感じられない理由の一つとして、この前後から、それまで頻繁であった左大臣の登場そのものがこの前後から格段に少なくなり、物語からフェードアウトしていつてしまうことがあげられるだろう。そして物語の最後、男君が関白へ昇進と対照的

⁸同前掲注1、p. 477

に左大臣の出家も語られ、はっきりと代替わりが示される。だが、この父左大臣と男君との力関係の入れ替わりは二条邸完成を境に行われはじめていたのである。⁹

二人のきょうだい再び身を取り替えて本性に戻ったあと、父は政略的な頭脳を用い、女君の入内を成し遂げるために布石する姿は見られるが、その後、影は薄くなってゆくことで、一家の家長は男君に転換したのである。これは伊達氏の指摘するように、父左大臣と男君の力関係が入れ替わったという「家の論理」が窺えるだろう。

以上の考察によると、男君は恋によって、一先ず自分の自然な男性性が目覚めることで、自らは男の論理に巻き込まれ、いろいろな女性に対して、好色な男性というイメージを見せるようになってきたことがある。そういう性格の変化する過程で、男君の女君のように模倣をして、状況・相手にあった行動をしようという意欲を示めずことなく、ごく自然にそれらしい振る舞いをするように描かれているものであり、女君とは異質なものと分かる。さらに、男君は男の論理が目覚めたあと、家の論理にも目覚めた、それは自分は「男」としていつか一家の責任を担う人—つまり一家の家長—になる可能性があることを悟り、そういう自覚をさせる家の論理は男君の性格を違和感なく明らかに変えてゆくのであるだろう。その自覚を自然発生的に促すものは、女性との関係であることにも注意しておきたい。

⁹伊達舞『『今とりかへばや』の「家」への志向—親子間の「愛情」描写から—』日本女子大学国語国文学会 編集発行『国文目白』50号 2011.02、p.26-27

三.一.三. まとめ

本章では、恋に対する葛藤を通じて、女君と男君の変化を考察した。その結果、女君はそれぞれの「恋」（または「恋」めいたもの）を経験した後、男と女という規範を模倣し続け、学習し続け、その過程で「自分がいかなる人間か」ということを知り、それに応じて生きる方法を模索する。それに対し、男君は恋の過程で性格は明かに変わっていく様子が見られるが、そこには自分のジェンダーが変わることに対する葛藤は見られず、男が家の論理と男の論理に巻き込まれることは自然なことであり、それは一家の跡継ぎとしての自覚の流れに抵抗もなく乗っていく。

「恋」をめぐる二人きょうだいの言動から、本来の性に戻っても「葛藤」のある女君、本来の性に戻った後は「葛藤」のない男君という二人の姿をみることができるのである。

第二節 子への愛情

はじめに

第二章で検討した父親左右大臣は、常に一家の利益を守るため、子どもたちを自分の期待する道に送り出したり、または子どもに苦しませる要求を出したりすることが分かった。特に物語の主演と思われる左大臣一家では、父左大臣の視線を検討したうえ、父の期待と失望を映すことのできる「笑む」「嘆く」「泣く」などの情緒表現は、男君・女君それぞれに多大な影響を与え、ついに子どもの行動を縛るようなものになってゆくことが明らかである。そして本節では、作品に登場する「第一層の子どもたち」が（つまり男君・女君）、自分自身も親になるとき、自ら異装した経験と自分の私欲は如何に「第二層の子ど

もたち」(宇治の若君・男君の子どもたち) 影響を与えているかを解明してみたいと思う。

三. 二. 一. 女君の嘆き

帝の寵愛を独占する女君は、立后するときの儀式はこの上なく華やかに行った。後の位に着いた女君はに対し、世間の人々は「年ごろあるべかりし子どものいみじう心もとなかりつるなれば、いとど誰も誰も御心ゆきたまふべし。」¹⁰と女君が后になることに対して肯定した。女君は女姿に戻ったあと最高の位に着き、そして自分の本来のままの様子で世間の人に認められるようになった。その中は特に世間の眼に認められる点は、男装していた自分がずっと求めていたものではあるが、物語はその前後に女君について喜びの言動は描かれてはなかったのである。それは何故だろうか。

女君を男皇子を産む時、長年男皇子の出現を願ってきた王家では盛大な産養を行った。しかし皇子を産んだ女君は少しの喜びも見せずに以下のように宇治の若君のことを考えた。

督の君は、若君の御折のこと忘れたまふべき世なし。若宮の、いとうつくしげに大きに王氣づきておはしますを、ただ人知れず人の生まれたまへりしほどとおぼゆるに、いみじうあはれにて、御涙ぞほろほろとこぼれぬる。ひたぶるに思ひ出てじと思ふ世に忘れ形見のなに残りけん とぞ御心のうちに思しける¹¹。

¹⁰同前掲注 1、p. 505

¹¹同前掲注 1、p. 501

大切な皇子を産んで、一家の将来の栄えに喜びを見せるはずなのに、女君は却って宇治の若君のことを思い出し、涙が出てしまったのである。同じ場面は、女君が帝の子を懐妊するときにも「督の君（筆者注：女君）、かかるにつけても、はじめの若君のこと思し出でられて、月日の重なりしままに世の中心あわたたく、もの心細く」¹²という気持ちを見せ、更に帝の寵愛を独占するときにも、宇治の若君を想起することで、嬉しい気持ちは見せなかった。

女君の嘆きは以上のように、自ら見捨てた若君の身の上にあるがゆえに、自分の男装している時代に願っていたことが叶えるとしても、それによって喜ぶ姿は見せないのであろう。そして、後宮に最高の位に据えながら、そういう心細い心情を抱いて日々を過ごしてゆくのである。女君の嘆きは第二章で検討した父の嘆きとはかなり異質なもので、父の嘆きは子どもにたいする「失望」の表現であるのに対し、女君の嘆きは宇治の若君への純粋な愛情と自分の経歴へのものだと言えよう。

三. 二. 二. 男君の嘆き

では、男君はどうだろうか。男君が、子どもを思う場面は、以下にあげる一例しか見ることができない。

大将殿も、四の君の御腹に男三人うち続き生まれたまひて、大殿に生ひ出でたまひし若君も、今は大人になりたまひて、童殿上などして歩きたまふ。吉野の山の御方にかやうのこと心もとなくものしたまへば、この若君をぞ御子にしきこえて、とりわきかなしうしたてまつりたまふ。女院には殿上して常に参りたまふを、昔の宣旨などはいとかなしう見たてまつりて、中宮の御ゆかり、大将の御心もおろかならずこの御方さまに親しくものせさせたまふにことづけて、御簾のうちにも入れきこえて、いみじう興じう

¹²同前掲注 1、p. 498

つくしみたてまつるを、女院も、さこそものづつみしあえかなる御心なれど、いとうつくしげにおとなびたまへるさまを、御心の闇は、いみじうかなしうなん見たてまつりたまひける。¹³

ここに語られる男君と子どもは「四の君の御腹に男三人うち続き生まれたたまひて、大殿に生ひ出でたまひし若君も、今は大人になりたまひて、童殿上などして歩きたまふ」と語られ、一家の繁栄の象徴のような存在でしかない。これは、男君が、家の論理を成し遂げたことをあらわすものであり、男君には、何も葛藤がないことが表されている。

女君や宰相の中将が、自分の子どものことを思って嘆く様子とは対照的である。子どもへの愛情という点を見ても、男君が繁栄が大切という家の論理によって子供に愛情を注ぐ父左大臣と類似してきていることが分かるだろう。

三. 二. 三. 宰相の中将

ここで、宰相の中将についても触れておかななくてはなるまい。『今とりかへばや』が、宰相の中将の子どもに対する嘆きで終わることは興味ぶかい。だが、その表現をよく見ると、「人よりことなる御様、容貌、才のほどみたまふにつけて」¹⁴とあり、子どもに対する愛情なのか、男君と同じく家の論理に飲み込まれての嘆きなのか、つまり、家の役に立つ子どもを失ってしまったという嘆きなのか、明確ではない。

ここで改めて女君、男君、中将の君の行動を縛り続けた「家の論理」について考えておきたい。「家の理論」とは一体何だろう。また、その背後に潜む訴

¹³同前掲注 1、p.510

¹⁴同前掲注 1、p.521

えや批判は何だろうか。出口剛司氏は権力と家族について以下のように指摘している。

衝突に対する禁止命令はたんなる父個人の命令ではない。むしろ社会を統制する支配構造の表現と考えられねばならない。つまり、家父長制家族におけるエディプス的關係において、幼児の衝突や欲望・快楽は形式的に父への服従へと方向づけられているが、実質的には子が父を理想として同一化することにより、父が体現する社会全体の支配構造に服従するよう統制されるのである、むしろ、家族や父が発するさまざまな禁止命令の内実は、社会全体の支配構造であり、家族はその社会心理学的エージェントとして機能していると考えられるのである。権威への服従は、成人後の現実社会における権威現象の基礎となる。現実生活がもたらすさまざまな不安・脅威に直面するとき、ひとびとは再び幼児期の強力な権威への依存快楽を呼び覚まされる。¹⁵

出口氏が指摘するように、確かに、女君・男君の葛藤を検討すると、幼児期は已む無く社会を代表する父の決定に服従し、女君は成人後は一連の自己認識を経てようやく自分の意志でジェンダーを選択することを成し遂げたが、后になるという選択は嘆きの成分も含まれることが分かった。これはやはり一家の繁栄を前提として「家の論理」に従った結果と思われる。もし家族が出口氏の指摘のように「社会心理学的エージェントとして機能している」であれば、不自然な程に自発に権威に服従し一家の繁栄を守って行く男君に対して、帝に寵愛されながらも子供を思って嘆く女君は社会権威構造と戦う役割を担っているとと思われる。

¹⁵出口剛司 著「家父長制がナチズムを生んだ」。山下昌弘 編『家族本 40—歴史をたどることと危機の本質が見えてくる』東京印書館所収、2001.04、p. 236

三. 二. 四. まとめ

女君の嘆きは、子どもへの純粋な愛情だが、自分のこれまでの身の上に対する心細さの表現でもある。そして、男君は女君に反して、子どもに対する葛藤や嘆きは見られない。そして、宰相中将は、嘆きで終えるが、その嘆きは女君への思慕や役に立つ子どもを失ってしまったという、家の論理にのっとった嘆きのようにも見える。

第三節 世に対する葛藤

はじめに

「世」という言葉を『古語大辞典』¹⁶で調べてみると、以下の意味が含まれていることが分かる。

- ①生涯。
- ②寿命。
- ③年代。時代。時世
- ④時節。時期。
- ⑤仏教語。前世。現世。来世の三世の一つ。
- ⑥統治者が国を治める期間。
- ⑦（転じて）国政。また、それを行う人、機関。天皇。朝廷。
- ⑧世間。世の中。
- ⑨夫婦の仲。男女関係。

¹⁶中田祝夫、和田利政、北原保雄ほか編『古語大辞典』小学館、1983.10、p. 1700

⑩時流。

⑪身辺の環境。身の上。

⑫俗世間。浮き世。

⑬世俗的な欲望。

⑭生活。家業。

⑮（「世に」「世の」の形で）比類ないこと、まれなことを強調する。

①～④のように時間に関わるもの、⑤仏教に関わるもの、⑥・⑦のように政治的な潮流を示し社会を示すもの、⑧・⑨のように小さな空間を示すもの、⑩～⑭のように俗世間を示すもの、⑮のように程度を示す比喩的表現として使われるものなどがあるが、総じて見るに「世」という語には、＜内と外＞の関わりが内包された意味があるようである。自分という内に対して、それを取り巻くものとも言えようか。

『源氏物語』における「世」という言葉については、既に藤田佳代氏が以下のように述べている。

摂関政治体制下にある平安朝貴族社会そのものを最大半径に、一夫多妻制の矛盾を内包した男女の仲を最小半径に、作中人物たちが直接かかわっていくもろもろの生活空間を「世」と呼ぶことにする¹⁷

¹⁷藤田加代著『「にほふ」と「かをる」－源氏物語における人物造型の手法とその表現－』1980. 11、風間書房、p. 235

また、高木和子氏が「「世」ないしは「世の中」の語は、認識の主体と他者との関係についての意識を鮮明する語」¹⁸と解釈した。さらに乾澄子氏は両氏の説を踏まえ「「世」という言葉は「「個人」と「社会」の関係性である。」¹⁹と指摘した。三氏の説によると、物語人物の「外部」（社会的・物理的）と「内部」（個人的・精神的）との関係性を検討する際には、世という言葉は関係を形成する時の境界線を鮮明に提示する役割を果し、おろそかにできない存在と言えよう。特に、『今とりかへばや』を見れば、「世」に関する描写が数多く見られ、乾澄子氏の調査によると、「宿世」という言葉を除き、総体的には約三四七例見られる。内訳は巻一 一二七例、巻二 四三例、巻三 一一八例、巻四 五九例²⁰となっている。計 355 ページの中で、15 行に一度の頻度で「世」という語が多用されている。これは作者が意図的に「世」という言葉を用い、語ろうとしているように思われる。また、物語創作背景の摂関政治体制下（平安末期）の「世」を強調するのと同時に、何かの問題を炙り出そうとしているのではないだろうか。本節はこれらの問題意識を抱きながら、『今とりかへばや』における「世」という言葉を分析して行きたい。

『今とりかへばや』の「世」に関わる言葉を分析するに当ては、まず「世づく」と「世の常」という両語に注目したい。何故なら、かつて石埜敬子氏が指摘したように、

『とりかへばや』の女君の苦しみは、身と心の離れではない。身と心は女でありながら、社会的には男として生きる違和感なのである。社会によって定められた姿とあるがままの自己の対立の構図と読み替えることも

¹⁸高木和子『源氏物語の思考』2002、風間書房

¹⁹乾澄子『『とりかへばや』物語における「世」』『古代文学第二次』（16）、2007.10、古代文学研究会

²⁰同前掲注 15、p. 78

できる。それはまた逆に、異装して生きる女君に、世の常の男らしく演ずることを強いることでもあった。作中に頻繁に現れる「世の常」と「世づかぬ」の語は、そうした女君の心の反映するものと見ることが

できる。²¹（下線は筆者による）

両語から葛藤する人物が「個人」と「社会」の対立構図が読み取れるからだ。更に用例をみると、「世の常」三一例、「世の常めく」「世の常めかしく」各一例、「世づく」は三十六例あり、そのうち、三十五例は否定形とともに用いられている。以下はまず「世の常」をめぐって、分析していきたい。

三. 三. 一. 「世の常」に拘る人々

「世の常」という言葉は『古語大辞典』²²で①世間並み。普通。②あまりにも普通すぎて表現に事欠くさま。言うもおろか。という二つの意味がある。

『今とりかへばや』の中を見て見ると、物事の美や価値の「程度」を示すものと、世の中の「規範」にあっているか否かを示すものとして使われているようである。たとえば、『今とりかへばや』ではじめて「世の常」という言葉が出るのは、巻一において、若君が元服する所に、「その日になりて、この殿の御しつらひ世の常ならずみがきたてて、姫君渡したてまつりたまふ。東の上も渡りたまへり。大殿ぞ御腰は結ひたまふ。」²³という寢室の美しさを描写する部分である。（「程度」についての描写）。これに対し、「規範」についての描写は女君が梅壺女御を見て、自分の身を嘆きながら「あはれ、私も世の常に身をも心をももてなしたらましかば、かならずかくてぞ下り上らまし、あない

²¹同前掲注 1 解説、p. 532

²²同前掲注 15、p. 1700

²³同前掲注 1、p. 176

みじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにはあらずかし」²⁴と自分の身の異常さを意識した。そして「世の常」への意欲も示している。また、きょうだいの男君を思い出し、「我こそ契りつたなくてかからめ、姫君だに世の常にてかやうの交じらひしたまはましを飽かぬことなからまし」²⁵と考えて男君の人生を祈る。特にここで注目したいのは、男君を「姫君」と呼ぶことである。つまり、ここでは、弟である異性装の「男君」は、この場面の女君の頭のなかでは、<女という「規範」>に従った「姫君」である、という意識なのではないか。きょうだいである男君に対し、男という意識はないのである。そして、そのような女君の感覚を引き起こすのは、弟の行動なのである。つまり、『今とりかへばや』の中においては、行動は「規範」が強く意識されていることがわかる。

上述したように、『今とりかへばや』における「世の常」は1. 程度の描写、つまり行いや装飾、支度などの豪華なことを表す場合と2. 官人社会一般の規範認識という意味がある。このように、その場面、立場、状況似合った行動や反応をする、二つ方向に分けられる。『今とりかへばや』に見られる「世の常」については【表一】のようになる。

【表一】を見れば、「世の常」の分布は：巻一 十五例、巻二 七例、巻三五例、巻四 六例。左大臣家の三人のきょうだいが社会的な性別を交換、つまり元服し宮中に出仕する、女君が中納言として右大臣の娘四の君と結婚し、男君は尚侍として入内した。その後、四の君と宰相中将の密通を知り、夫婦関係が疎遠し、厭世になる女君は吉野に訪れ、また京に戻る内容を語る巻一の用例が一番多いことが分かる。全部の用例三十三例の中で、「規範」に属する用例は二十一例、これに対し、「程度」の用例は十二例数えられる。『今とりかへ

²⁴同前掲注 1、p.188

²⁵同前掲注 1、p.188

ばや』の「規範」、つまり社会的規範認識が分かるためには、まず二十一例の用例を検討しなければならないだろう。

巻一の十五例の中、十二例は「規範」の範囲に属し（例②③④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑫⑬⑭）、これに対し、「程度」の範囲は僅か三例（例①⑨⑮）しかないのである。

「世の常」という言葉が男性的なあり方と女性的なあり方の規範として用いられているだけではなく、その70%が女君の言動を決めるものとして使われている。つまり、「世の常」というのは、女君の中のジェンダーとセックスの分離を浮かび上がらせるものとしてあるようだ²⁶。以下、例を見ると分かるだろう。

- ⑦いとおつつましうややましけれど、世の常のさまに乱れ入りなどすべうも
あらず (p198)
- ⑩世の常の迷ひなどありと聞かれたてまつらずもがなと (p. 224)
- ⑫世の常の懸想びてはあらねど、ただあはれに心深く、訪ね入るよしをい
みじくなつかしげに言ひなしたまふに、すこし面馴れゆくにや (p244)
- ⑬うち続きたまひぬべき気色なれば、世の常めかしく引きとどめて、(p247)
- ⑭今の間もおぼつかなきにたちかへり折りてもみばや白菊の花 と、世の
常めきたるを、むげにさやうにとりなし気色ばむを、 (p248)

²⁶この部分のジェンダーとセックスという表現は、第一章のなかの研究史⑮の文献で挙げた、片岡利博「とりかへばや物語考—その趣向と表現—」『文林』(17)、1982. 12、神戸松蔭女子学院大学、p. 39-41 の考え方をういた。

例⑦は、その年の五節に、中院の行幸があったとき、女君と宰相中將は共に青摺の衣を着ている。後宮に仕える女房たちの目には、宰相の「そそろかにををしくあざやかなるさまして、なまめかしうよしあり色めきたる気色、いとをかしう」と見える様子に対し、中納言（女君）は「はなばなど見れども見れども飽くまじう、にはほはしくこぼるばかりの愛敬似るものなきに、もてなし有様も、さは言へどなごやかにたをたをといとなつかしきほど」女君が男装しながら女性的美質を備えているのを「人にこよなくすぐれて目もあやなるを、御方々の人々をかし」と思う。

後に中納言の御隨身が麗景殿の細殿の一の口からの手紙を持って来れば、「逢ふことはなべてかたきの摺衣かりめに見るぞ静心なき」と書いてある。中納言が手紙を読み、まずは「うちほほ笑まれ」て、落ち着かなくて返事しなかった。そして自分の返事しない行為「情けなくや」（情趣を解さない）と躊躇し、行事が終わったあと、麗景殿の細殿のあたりに訪れた。互いに歌を吟詠し合い、中納言は麗景殿の細殿に近寄っても、ただ立つまま「世の常のさまに乱れ入りなどすべうもあらず」と思いながらも、相手は並の身分ではないと判断し、「情けならぬほどに語らひて」そっと立ち去った。

この場面において男装している中納言の反応に注意したい。まずは男装している自分の魅力が肯定されることに嬉しくなって「うちほほ笑まれ」た。次は自分の返事しないことを「男」の立場として情趣を解しないと心配し、麗景殿の細殿の妹に訪れ、世間一般恋のパターンを意識し「男」を演じ、歌を交わしながら、女に近寄って言い戯れている。ところが、二人が対面し合うとき、急に「世の常のさまに乱れ入りなどすべうもあらず」世間一般の男のように無理矢理に入り込むはずもないと考え、適当に「情けならぬほどに語らひて」風情を失わなく、失礼しない程度で語り合っただけでその場を離れた。

中納言の慎ましい身振りに対して、世間は「玉の瑕と飽かぬことに思ふ人々あり」と判断し、これに対し、どんな女性にも近寄り話しかける好色な宰相中将は「をかし」という評判を招いた。ここは「男」に対して、「世」の価値基準が窺えると言えよう。つまり宰相中将みたいにどんな女性に対しても好色で、軽佻な男を肯定し、「世の常」の男のように無理に女をかき抱くことができない、身を慎重に対処する中納言は玉に瑕、物足りないだと否定した。女君は、「世に常」のように「男」を演じ努力をすることにより接近したいが、「世の常」にはならず。いわゆる「世の常」の男性のように、女性に対して身体的接触を含む行動を取ることは出来ないからだ。このように中納言は完璧に男性ジェンダーを演技しているが、女性と接触すると、女性というセックスであるがゆえに、ジェンダーを超えられない状況は不可避であり、男性としては玉に瑕で飽かぬことという世間の評判を招き、中納言の身と心の歪みがここに窺えると言えよう。

同じ、セックスとしての「男」への拒否の場面は用例⑩もある。中納言（女君）は妻四の君の懐妊を知った後、他人の視線が気になってならず、「人聞きは例ざまにききはやしたまふ顔」をして、父左大臣の考えにも気になって「かたはらいたくおぼえ」て、出掛けるときも「我にはをこがましもあやしとも目をかけて見る人あらんかし」と心配し、仏道への思いを態度に出した。そして今まで四の君との「さる方にあさからず契り交はして、起き臥しもなつかしうひとつ心にて」結婚生活を回想し、「世づかぬわが身に類ひたまふべかりける契りも心苦しう」四の君を同情しながら、「世の常の迷ひなどありと聞かれたてまつらずもがな」と、四の君を思いやって身を慎重に対処する、自分の努力を四の君に認めてほしい、という気持ちもある。密通の実情を知ったあと、夫婦が疎遠になり、中納言が四の君に対し、「さは言へどまことの契りこそ心に入るらめとのみ心得るに、あまがちに恨み慰むべきやうもなければ、気色も

あらぬさまに」夫としてのプライド、と嫉妬の気持ちも抱いている。つまり、中納言は、四の君の婚姻生活において、セックスとしての「男」への制限を見せながら、ジェンダーとしての「男」への接近していく意欲も窺えるのだ。

中納言は女性に接触するとき、こうした矛盾する心理もある。

中納言は妻四の君と宰相中将の密通事実を苦に、吉野を訪れ、吉野の姉妹と接触するとき、⑫は姉宮に対し、世間一般の男の色めいた態度をしない。セックスとしての「男」への拒否である。しかし、その直後「我にてはかひなくもあるかな、宮の宰相はかかる人世にものしたまふともいまだ聞きつけぬにやあらん、いかに聞き迷ひ心を尽くさんと、まづ思ひ出でられて、わが身も嘆かしくうち笑まれ」るように、宰相中将への羨ましが読み取れる。次は、姉宮に対し、「「あが君、かくな疎ませたまひそよ。なれなれしき有様はよに御覽ぜられはべらじ。かたじけなきことなれど、あやしなから、いまひとり類あると思せ」と、いとどのどやかになつかしうこしらへ慰むれど、」と本性を明らかにしたいとする無意識の姿勢がうかがえる。だが、ここに矛盾しているのは、後に⑭、またジェンダーとしての男を演じ続ける。⑬は、恥ずかしくて几帳に引き籠もる中の君に対し、世の男のように引きとどめるが、「ただうち添ひ臥して、この世ならず契り語らひ臥したまふ」という、ジェンダーの男を演じ、セックスとしての男を拒否しているにも拘わらず、セックスとしての男も暗示させるかのような矛盾する行為を示す。

このように、男装している女君の身の上に用いられた「世の常」の八例(③④⑤⑦⑩⑫⑬⑭)は、異装による心理的な変化が読み取られる。つまり③④⑤例は、初めて素敵な女性を見て、ジェンダーとセックスの一致への欲求心理から、⑦へ、男装する自分の魅力が異性または世間に肯定され、満足する心理が浮かび上がり、ジェンダーとしての演技が演じ続けていく。だが⑩例で、自分

が「まことの契り」が出来ないことを分かるにつれ、身体性の自覚が目覚めた。そして、だんだん自分の異装に満足できなくなり、混乱し始める。⑫⑬⑭例では、混乱を鎮めるために吉野へ行くが、セックスとジェンダーの混乱は一段と強くなり、鎮められることはない。

さて、本性に戻ったあと、女姿をするとき女君の身の上に用いられた「世の常」を分析してみたい。

⑭中納言はかなしと思ひて、「これこそは世の常のことなれ。年ごろの御有様は、現しごととや思しつる。もとより直面にし出でてあまねく人に見え交じらはんの御好みに、ことさら交じらひたまひしにこそありけれ。めでたくとも、わが身をあらぬに変へて過ぐしたまへること、あるべきことならず。あやしくとも、かくておはせんこそ例のことなれ。殿にも聞かれたまはん、さらに悪しとよに思ひきこえたまはじ」と言ひ知らせ (p326)

⑲男の御様にてびびしくもてすくよけたりしだに、中納言に取り籠められてはえ逃れやりたまはざりしを、まして世の常の女び、情けなくは見えたてまつらじと思すには、いかでかは負けじの御心さへ添ひていとど逃るべうもあらず乱れさせたまふに、せん方なく、恥づかしうわりなくて声も立てつばかり思いたるさまなれど、人目をあながちに憚るべきにもあらず、 (P450)

⑳昔もかやうなる宵々は目馴れしかば、今とても世の常の乱りがはしき御もてなしはあるべきならねば、うちたゆみたるに (P477)

㉔の場面は、妊娠した女君は宰相中将と宇治に隠れることになる。宇治に到着早々、宰相が「頭洗はせなどして、髪もかき垂れなどして見れば、尼のほどにふさふさとかかりたり。眉抜き、鉄漿つけなど」して、一切「男」に関する記号を抹消し、髪、眉、齒などの「女」記号を身に付けさせ、「女ぶさせたれ」た。更に宰相は「これこそは世の常のことなれ」と女君に言い知らせ説得した。

女君の反応はどうだろうか、女君はまずは、女装した自分に対して「わが心は、いかにしつる身ぞとのみおぼえて、世の中のこともいぶせく、ほれぼれとして、もののみかなしければ起きも上がらぬ」と憂鬱になり、宰相の言葉を聞いて、妙に自分の短い髪を見苦しいと感じ、吉野の宮が送った薬を使うことにより、完璧に女姿に戻り、積極的に「世の常」になる行動するけれど「我もほれぼれしくしのび音がちにて、はかなく日ごろにもなりゆく」気持ちで日々を送ることになった。

㉕の例は、帝が宣耀殿に忍び込み、無理に女君を抱く場面である。女君は相手は帝と察知すると、まずは「あはあはしかりける身の有様を御覧じあらはしては、あなづらはしき方さへ添へて、行くてに思しめし捨てられなむことも、心憂く恥づかしう」と、自分が処女でないことを心配し、次は再び世に進出することや東宮と一緒に退出なかったことを後悔し、泣き始めた。だが、帝を目前に、今自分の姿は世間普通の女であることを意識し、「情けなくは見えたてまつらじ」という演技の意志が浮かび上がり、「せん方なく、恥づかしうわりなくて声も立てつばかり思いたるさま」など演技を見せた。

㉖の例では、今大将になった男君が麗景殿の細殿を訪れる場面である。きょうだいは既に身を交換したことがまったく知らない麗景殿の細殿は、久々の再会に当たって、目の前の男君を女君と見込み、昔(女)大将と親しく語り合うだけのことに馴れて、「今とても世の常の乱りがはしき御もてなしはあるべきな

らねば」、男君も世間一般の男みたいに振舞うはずもないと判断し、つい無理に男君に抱かれてしまった叙述である。ここは明らかに今大将と対比し、男装していた女君は世の常ではないと読み取れるだろう。

以上を検証してみると、「世の常」という言葉は、ジェンダーの入れ替わった男君と女君の身と心を混乱させるものでありながら、反対に自分を守り肯定するためにも使われる。「世の常」に従うことで家の利益を守り、賞賛される自分への満足を示す言葉である。また、男が女らしい、女が男らしいという世の常から見ると異常な事態であり、そんな異常事態から発生する混乱を避けるために「世の常」に拘わり、身を交換しなければならないわけであるが、「世の常」に拘ることによって招かれた混乱は二人きょうだいの異性装及びジェンダー役割の交換が自分自身の精神的な満足感をもたらすという「葛藤」を示しているのである。

三. 三. 二. 「世づかぬ」に苦しむ女君

前項で検討した「世の常」と同じく「世」に関連する語として「世づく」がしばしばみられる。

「世づく」は『古語大辞典』²⁷で以下の意味がある

- ①世慣れる。世間のことに通じる。
- ②男女の情けを解する。人情を知る。
- ③世間並である。
- ④世俗の濁りに染まる。俗っぽくなる。

²⁷同前掲注 1、p.1713

という意味を持つ。テキストの中での「世づく」の例をみると、【表2】（後掲）のようなものが見られる。また、「世づく」の分布を見ると、「巻一」十二例、「巻二」七例、「巻三」十六例、「巻四」一例である。中でも、女君が妊娠し、宰相中将と宇治隠棲することを決意をして女姿になり、子供を産み、その後またきょうだいと身を取り替え、再び京に戻るという過程を描く「巻三」の用例が一番多い。次には幼いころから性質に応じて身を交換し、元服、結婚、出仕、入内するまでの経緯を記す「巻一」である。また、「世づく」の用例三十六例の中で、僅か一例のみが「世づく」という肯定形で使用され、他三十五例は否定形である。さらに「身」や「有様」という語と共起することが多い。「世づかぬ」という語はを通して、主人公きょうだいの尋常でない身を強調しているようである²⁸。

さて、『今とりかへばや』の中には、次のような部分がある。

女君は妻四の君の妊娠を苦し、世間の眼を逃れるため、出家の志を持って吉野を訪れる。「世に違」う身ゆえに「世にありにくく思ひなる」と泣く女君に、吉野の宮が次のような予言めいたことを言う。

しか御心ならず思すべきことなれど、それしばしのことなり。いかなるにも、この世のことならず、前の世のものの報いなれば、ともかくも人の思すべき。この世に世を嘆きを恨むるなん、いと心幼くむげに悟りなきことにはべるべき。さらに思し厭ふべき御こともはべらず。つひには思ひのごと上を極めたまふべき契り、いと高くものしたまふめり。くはしく聞こ

²⁸細部を分類してみると、女君が自分の身を「世づかぬ」と思う用例は三十六例の中十七例を占めている（①⑤⑥⑦⑨⑩⑬⑭⑮⑯⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）。女君に対し、男君が自分の身を「世づかぬ」と思う用例は四例がある（㉑㉒㉓㉔㉕）。他に男君が女君の身の上に用いた用例は二例（㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）、父左大臣が女君の精神や身を「世づかぬ」と思う用例は五例ある（㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿）。北の方が二人きょうだいのことを「世づかぬ」と思う用例は一例（㉗）

えさせずとも、おのずから、さ言ひきかしと思し合はするやうもあらん。
うたて、相人めかしく聞こえ続けじ²⁹

女君は吉野の宮の予言を受け、「いかに見たまふにかあらん、にはかに、世づかぬ身を何故に上を極むべきにか」³⁰と、まず相手は自分のことをどう「見ている」のか、という反応を起こし、次に世間並でない自分の身を「世づかぬ身」と思い込み予言を疑う。この場面は、「世づかぬ」という言葉を意識することと伴って、主人公女君の外部からの視線を追い詰められた状況と、自分自身の限界を感じている心境を呈示しているのではないか。それでは、「世づかぬ」という言葉は、物語においてどのような役割を果しているのかを確認してみよう。

「女」の身でありながら「男」を演じて、右大臣の娘四の君と結婚してしまった女君は最初、妻と「人目にはうち交はしながら、かたみに単衣の隔てはみなありて、うち解くるかたなきも、深くはいかでか知る人あらん」³¹と外見だけは取り繕い、「かたみに単衣の隔て」があるという肉体関係のない夫婦生活を送っていた。この時期の女君は、梅壺女御など素敵な女性と接触するとき、本来あるはず自分の姿を自覚する時があるが、時々「男」として上手に演じている自分に成就感を得られる状況もある³²。ところが、妻四の君は好色な宰相中将と密通した後、気が咎め仮病になり、女君に対して冷淡な態度に取るようなことになると「もし我をおろかなりなど人の聞こえたるにや」³³と他人の視線を気にし始めるのである。身は「女」で、妻と実際の肉体関係を結ぶことの

²⁹同前掲注 1、p. 238—239

³⁰同前掲注 1、p. 239

³¹同前掲注 1、p. 186

³²前掲 3.3.1 麗景殿の細殿の場面を参照されたい。

³³同前掲注 1、p. 212

できない自分を「おろかなり」と判断する点に注意したい。つまり、いくらうまく「男」を演じて、本物の「男」を超えられない、自分の限界を感じている自分に愚かだという劣等感を味わう。妻との関係の変化によって、これまでは成就感をもたらすものであった人の視線が、自分を批判するものへと変化していく。こうした状況は、妻の懐妊することを知ったあとに、他者から自分たち（あるいは女君自身）へ注がれる視線に敏感になっていく女君の様子は、以下のような部分から窺うことができる。

- I. わが身の心のうちこそ人に似ず心憂けれ、大方の世のおぼえは塵つくべうもあらぬ身を、世にとりては痴れがましう見思ふ人あらん、いみじきことなりかし、かくてありながらいまだ古りざりけるさまなどをあやしと思ひあやむる人もあらん³⁴（下線は筆者による）
- II. 誰ならん、かかることのありけるをなほ何心もなく出で入り交じらひつるを、いかにをこがかしようちまもる人もあるらん³⁵（下線は筆者による）
- III. 御気色と見はべりながら、曇りなきみづからの心のままに何心なく御覧ぜられつるを。世づかぬ身の有様をいかに思しなるぞなど³⁶（下線は筆者による）
- IV. 人はをこがましとも世づかずともさまざま目を立てて思ふらんこそ

³⁴同前掲注 1、p. 221

³⁵同前掲注 1、p. 221

³⁶同前掲注 1、p. 222

いみじう恥づかしけれ³⁷（下線は筆者による）

V. 世づかぬわが身に類ひたまふべかりける契りも心苦しう³⁸（下線は筆者による）

VI. まことの契りこそ心に入るらめとのみ心得るに、あながちに恨み慰むべきやうもなければ、気色もあらぬさまに³⁹（下線は筆者による）

VII. いやで、さはれ。かくてあり果つべき身ならばこそは。世の人の見思はん言の葉を聞き入れられたてまつるもあいなし。すべてわが身の世づかぬ怠りのみこそ、思ふにも言ふにも尽きぬ心地すれ⁴⁰（下線は筆者による）

I～VIIの部分において下線部のように、「人」「思ひあやむる人もあらん」「いかに思しなるぞ」「思うらん」「あやし」など他人の視線や評判を憶測する推測表現が繰り返されることから明らかである。他者から「見」られ、どのように「思は」れるかが重大事項になっている。この部分では、それに伴って「まことの契り」ができない自分の「世づかぬ」身への悔しさと恨みも深刻になった。世間の価値基準に基づいて「男」を演じることで、「大方の世のおぼえは塵つくべうもあらぬ身」と築いた自認が密通事件によって崩れてしまう。その結果、いくら「世の常」どおりにふるまっても、永遠に生物学的な「男」を超えられない「世づかぬ身」という意識が強くなっていく。つまり、妻四の

³⁷同前掲注 1、p. 223

³⁸同前掲注 1、p. 224

³⁹同前掲注 1、p. 225

⁴⁰同前掲注 1、p. 261

君と宰相中将との密通事件をきっかけに、女君は自分の演技の限界を見通し、自分の社会的・生物的性役割ともに危惧感を持ち始めるのである。

またこのような危惧感は、妻の密通事件後に発生する、宰相中将との関係の中でより明確になっていく。宰相中将に強引に関係を結ばれ、女君の異性装が暴露される時である。女君は、以下のように考える。

今は言ひはしたまてもわが身の世づかぬ有様を見知られぬればたけ
かるべきやうもなし、心をあらだてても、あさましき世語りに、さるべき
人とうち言ひ出でもいかがはせん、吉野の宮ののたまひしやうに、これも
この世のことならず、さるべき契りにこそはありけめ、と思ひなすに⁴¹(下
線は筆者による)

女君は「あさましき世語りに、さるべき人とうち言ひ出でもいかがはせん」と思う。「あさましき世語り」として低俗な興味として、異性装が噂されることの不安を語る。この不安は、自らの異性装が露見したことももちろんだが、むしろ異性装が露見することによって自分の官位や家の面目が潰されるなどの事態が予想され、家の利益が守れないことを気にしているからでもあろう。つまり、異性装とは、女君にとって家を守るための手段である。

その後、家を守るための手段として「男」を演じ続けていた女君が、自らの保身のためあえて宰相中将に対して「女」を演じるような姿がみられるが、宰相が女君に近づこうとし、恋を訴えようとするたびに「人目もいとあやしかるべし」などを忠告し、距離を保ちたがっていることが窺える。たとえば、殿上人が宿直所に集まり、二人が再会するとき、女君は宰相に対し、以下のような言動を取る。

⁴¹同前掲注 1、p. 275

人目もいとあやしかるべし。あが君や、まことにあひ思さば、いとかく
いちじるくなもてなしたまひそ。見る目の難く、行きあふ瀬あるまじきこ
とこそかやうには思さめ、明け暮れかくさし向かひ御覽ぜらるるには、何
のめづらしきふしにかさも思さるべき。ただ世づかぬをこがましき身の有
様をことさらにもて軽めたまふべきなめりとなむ思へば、いとなん心憂き」

⁴²（下線は筆者による）

殿上人として出仕し「男」を演技しなければならない場合でありながら、宰
相中将に対面するとき、今まで見たことのない、宰相に対し弱みを見せるとい
う「女」を演じている場面もある。

まことに思ふ心のゆくばかりの逢瀬はいと難うのみもてなしつつ、大方
はいとなつかしううち語らひ、あひ見るほどは、あやしかりける身のえさ
らず逃れざりける契りを思ひ知りいみじう靡きながら、たち離れらちぬれ
ば、さは言へど心にまかせつべき行きあひをさらに心やすくもあらずわり
なくありがたいもてなすも、いとわびしうなりまさるに、「思ひわづらひ
忍ぶる人に」など時々は言ひすすめて、我は知らず顔にていとようさりぬ
べき隙をつくり出でてあひ見する、げにいとめづらしうあはれにいみじき
心ざしこれこそは世の常のことと思へど、なほ中納言に半ら過ぎは分けて
ける心なれば、例のことにおぼえなりにたり。⁴³

女君は冷静に宰相中将の性格を判断し、一途に靡いているように振舞ってい
る。この傾向は、女君が妊娠してから宇治で子供を生むまでの間に強くなって

⁴²同前掲注 1、p. 282

⁴³同前掲注 1、p. 284

くる。子を産むために、不本意ながら、「ところせく世づかぬ有様を異人に見扱はれん、あやしかるべかりけり」⁴⁴と思い、宇治隠棲を決意した。妊娠をきっかけで、身を「女」に戻り、身と心を一段混乱させてしまい、繰り返し「いかにしつる身」⁴⁵と自分の身の激変を受け入れることができない。自分の「世づかぬ有様」によって、前項で述べた「規範」に従って異性装に応じた行動をすることで喜びを感じていた自分への萌芽でもあるといえう。子供を産んでからこの傾向は強くなる。「男」を演じていた自分を明確に「あやし」と考え始めるようになる。

あはれなりける契りを。昔よりかかる御様にて思ひなくあらましかば
と言ひ出でたまふにぞ、げにと、あやしかりける身かなと思ひ出づる⁴⁶(
線は筆者による)

自分が待つ女と分かったとき、また過去の自分を回想し始めるのであるが、自らの異性装の時代の回想を通して、「げにと、あやしかりける身かな」と今さらながらかつて自分が異性装をしていたかのような言葉で、女君は「女」としての立場から、「あやしかりける」と過去の異性装を回想する。

このようにして女君は、女へと戻るわけだが、実はそれは女君の意識だけを変化させたのではない。異性装を解く要素を含んでいるものなのである。そして、男君が本来の性に戻ってから、父の代行をするような言動をする(P. 415・458・459) ことによって、女君は「家の利益」のために「女」を演じることを要求されるようになるのである。女君は<家の利益>に支配され、専念に「女」

⁴⁴同前掲注 1、p. 314

⁴⁵同前掲注 1、p. 324-325

⁴⁶同前掲注 1、p. 361

を演じる。それは、「巻四」においては「よづかぬ」の用例が一例しかないことから読み取れるだろう。以上のようにみると、男君、女君は本能に従って従来の性別に戻ったとはいいがたい。

以上「世の常」「世づかぬ」という語を通して、人の視線を通して変化していく女君の「葛藤」を考えた。

「世の常」という言葉は世間の「規範」を強調し、「世の常」を模倣することで身と心の衝突があっても、他の人に怪しまれず、俗世（社会）の人々と融和し生きることができる。これに対し、「世づかぬ」は模倣によっては解決できない身と心の葛藤を浮かびあがらせる。「世づかぬ」の用例から見ると、模倣するという意欲がほとんど見えない、それは「世づかぬ」と意識するとき、外部からの視線や身と体の不調和ということのみが頭を占め、演技あるいは模倣では解決できない外部と内部の葛藤を男君、女君双方に突きつけているのである。つまり、ここに見られる「葛藤」は、こどもたちそれぞれ（主に女君）のジェンダーが家の利益に従えるかどうかという問題でもある。

三. 三. 三. 俗世と聖地

前項で『今とりかへばや』世界の人々を束縛した「世づく」（しばしば否定形「世づかぬ」「世づかざる」）・「世の常」という二つの言葉を考察することで、「世の常」という言葉は「社会に融和するために追及されたもの」というイメージを持っていることが分かった。これに対し、「世づかぬ」は模倣によっては解決できない「身と心の不調和」というイメージとして使われていることがある。今まで繰り返し述べてきた物語の人物たち（左大臣一家を中心に）が拘っている「規範」を解明することで、それぞれの人物の外的な葛藤を確認した。

女君はその外的葛藤から逃れようとするように、吉野に向かう。吉野は俗世とは対比的な場所であり、古来から聖地である。しかもそこに「吉野の聖」或いは「吉野の宮」という世俗の人と異なる道心を持った先帝の第三の皇子がいる。そこで、異性装をしているにも関わらず女君は吉野の宮によって「つひには思ひのごと上を極めたまふべき契り、いと高くものしたまふめり」と、将来后になることを予言される。女君が葛藤から逃れようとして訪れた「吉野」という場所は、この吉野の宮の予言によって、一層神秘的な色彩に彩られている。また、この吉野という地には、男君と女君が入れ替わったあとで、男君が「中納言」として訪れ、吉野の宮の娘である姉宮と結ばれる点も興味深い。

では、このような俗世を逸脱しようとして訪れた「吉野」という場所において、京での外的規範による葛藤から逃れ得たのか。主人公きょうだいはどんな様子を見せているのだろうか。また、この「吉野」という場が装置されることは、物語にどんな役割を果しているだろうか。

先にも述べたように、女君は吉野に苦悩からの脱出と安息の場所を求めて赴いている。吉野の宮と面会をし、吉野の宮の仲立ちで二人の娘にあったときも、「もう一人の姉妹と思ってほしい」と言い、外的葛藤から逃れようとしている。だが、同時に、吉野の宮の二人の娘たちに引き合わされた女君は次のような行動をとる。

中の君いとわりなくてひきかづきて埋もれ入りたまふを、げに心苦しくて、几帳さし隠して入れつ。「心憂くも隔てさせたまひぬるかな。いづれ同じこととこそ思ひきこえさすれ」と恨むりも、うち続きたまひぬべき気色なれば、世の常めかしく引きとどめて、ただうち添ひ臥して、この世な

らず契り語らひ臥したまふさまの、つゆばかり疎むべきやうもなきを、い
かでか見知りたまはぬ人のあらん⁴⁷（下線は筆者による）

異性装の女君を警戒し、つらがつて着物を引きかぶつて隠れるようにしている妹宮に対しては、「心憂くも隔てさせたまひぬるかな。」と恨み言をいい、妹宮につづいて入ろうと姉宮が部屋の奥へ隠れようとする女君は、「世の常めかしく引きとどめ」る。まさにこれは、男を模倣する行動である。外的規範から逃れようと吉野に行っても、男を模倣することをやめてはいない。これはなぜだろうか。これは、日常的な規範に応じて「男ジェンダー」として慣れた規範に縛られてしまっている、ということではないのか。同じ現象は宇治でも伺える。

かくのみこそはあるべきなめれ、わが心ひとつにこそよろづのことにつけて嘆き絶えせざりしか、大方の世につけてはかたはらなくなりにし身を、あいなくもてしづめて、類なくだにあらず、かくのみ待ち遠に思ひ過ぐさんことこそ、なほあるべきことにもあらね⁴⁸

宇治で女姿になったが、「わが心ひとつにこそよろづのことにつけて嘆き絶えせざりしか、大方の世につけてはかたはらなくなりにし身」のように、女君は男として生きていた自分は、世間には及ぶ者のない栄華の身を回想し、今の自分は宇治の橋姫のような「待つ女」に遭遇することに、自分の男の身であったときの、決断力や行動を当然のものとして思い出し、後に自らの子どもを見捨てて京に戻したのである。女君にとっては、今まで学んだジェンダーは内化

⁴⁷同前掲注 1、p.247

⁴⁸同前掲注 1、p.364

してしまっている、といえるだろう。そして、男君の場合には、吉野の宮の積極的な仲立ちで、男君は姉宮と契る。父たちを同じ行為をしていて、規範の及ばないはずの場所でありながら、主人公たちはやはり、京規範に即した行動を取っている。つまり、規範は既に内化しているし、聖地に行ったとしても、ここで行われることは実は俗世（京）で期待されることと何ら変わりはないのである。

三. 三. 四. まとめ

本章は、『今とりかへばや』の「外的な葛藤」をめぐって、第一節と二節では「世」という言葉に着眼した。つまり親たちの決定において、子どもたちの行動においても、その中に作用している「規範」のあり方を究明しようとした結果、左大臣家が常に「世の常」という「規範」を追求することを通し、男君と女君の身と心を混乱させるものでありながら、反対に自分を守り肯定することもできる。そしてその追求する過程で模倣や工夫などの手段によっても超えられない挫折感は「世づかぬ」という表現で示すのである。更に、三節では、主人公きょうだいが吉野と京、それぞれ自ら「聖地」と「俗世」のイメージを備えている場所で、同じ男を模倣や、好色な身振りを見せるなど俗世にいるときの行動を取ることで、追求してきた「世の常」という規範は既に二人の内面に内化し、ジェンダーに従った行動を駆使してゆくのである。

そして、俗世である京であっても、聖地である吉野・宇治にあっても、そこには、外的規範は強く働き、それぞれのジェンダーを逃れることはできない。そして、場面や状況に応じて、ジェンダーを演じ続けなければならない、また、内化したジェンダーにより、より有効なジェンダーを選んでしまうのである。そこに、外的規範から逃れようとして、内化したジェンダーによって、阻止されるという葛藤があると言えよう。

第四章 結論および今後の課題

この『今とりかへばや』を検討をすると、さまざまな葛藤が組み合わせられた物語であることが分かった。特に、左大臣家、右大臣家、吉野の宮の父女など、親たちと子どもたちの関係の中にあるさまざまな人間の造型や関係の変化を検討すると、そこには、親子、愛情、家の繁栄、世の中の規範などさまざまな葛藤の様相が示されていた。またそれらの葛藤によって人間が変化したり自己を確認していく「葛藤の物語」と言えるだろう。

そして、その葛藤の根源にあるのはすべて「家」の論理であることも分かった。ただ、この物語の人物たちはその葛藤の中を生きるために、異性装が解けたあとでも、それぞれのジェンダーを意志によって選び取っていく。日本文学史を顧みれば、早くも上代において『古事記』の天照大御神、小碓命、『日本書紀』の神功皇后などの異装の記述があり、また『源氏物語』、『紫式部日記』、『土佐日記』などの作品において、主人公を異性として幻視することや、異性に仮託する描写が窺われるが、『今とりかへばや』のように異装を一つの媒介として、物語世界の親子愛情、恋、権力関係、世間を巧みに絡み合うものとして語るものはない。何故なら、『今とりかへばや』の異装は親に決められたジェンダーによるものであり、取り換えられたきょうだいの優れた外見及び才能も世間の注目を浴び、父左大臣の政治的な布石に沿って天皇家の権力の中心に接近することができたが、家の繁栄をもたらすものであると同時に異装も左大臣一家の親子愛情、それぞれの恋を苦しませる矛盾した決定でもある。更に、自ら家に存在する親子関係の矛盾も、異装するきょうだいに出会った恋の相手や、恋の経験によって提起され、重層な葛藤構造の物語世界を編み出したのである。ジェンダーは意志によって多元的に流通できるものであり、これは正に主人公きょうだいの取り換えられた「もの」を通して喚起された概念である。

『今とりかへばや』のジェンダーの交換は、物語の発端で親の意志が決定するものである。そのため、出仕・入内の経由で、社会を認識しながら形成した外的葛藤及び恋・結婚によって自ら生物性を越えられないセックス、妊娠で自分自身が男・女の間において戦っているという精神的葛藤になるのである。そして、これらの内外的な葛藤で主人公のジェンダーが揺らいてしまう過程が、物語の後半部において自らのジェンダーが自分の意志で選択できるものへと移り変わっていくのである。

女君の行為を検討すると、殿上で出会った様々な人や吉野の宮一家との触れ合いの中で、場合に応じて、男性的なジェンダーでも女性的なジェンダーでも選んでいく。つまり、自分でどのようなジェンダーで生きるかを定めることができるのである。一方、男君は強い意志によって異性装を解いたあとは、家の論理に生きるために、より強固な男性ジェンダーの中に、意志を持って取り込まれていく。つまり、この『今とりかへばや』という物語は、意志によってジェンダーを決める人間の姿と葛藤を描いた物語であるといえる。また、葛藤の中でジェンダーを選び取るというところに、この異性装物語が切り拓いた面白さがあると言えるのである。

だが、第三章第二節で検討した二人の子供の嘆きから分かるように、女君は自分の意志でジェンダーを選択し、大切な皇子を産んで、帝の寵愛を独占するとき、一家の将来の栄えに喜びを見せるはずなのに、宇治の若君を想起することで、嬉しい気持ちは見せなかったこと、及び男君が「家の論理」に生きるために、やや不自然な程に内気な個性から強い男性に一転した設定の背後には、「家の論理」が頸木となって、（第三章第二節で引用した出口氏の言葉を用いれば「社会心理学的エージェントとして機能して」いる家の理論）は『今とりかへばや』の男君、女君、また、この二人と浅からぬ関係をもつ宰相中將の行動を規制する。だが不自然な程に自発に権威に服従し、一家の繁栄を守って行

く男君に対して、女君はその「家の論理」という社会権威構造と戦う役割を担わされていることも分かった。

最後に今後の課題について述べておきたい。本論は『今とりかへばや』の「親」と「子」それぞれのジェンダーによる葛藤を検討したが、まだ数々の問題が残っている。

まずは、平安末期から鎌倉時代にかけて現れた異性装物語、特に『堤中納言物語』に収録された「虫めづる姫君」と『有明の別れ』の検討も行いたい。『今とりかへばや』と同じく、異性装物語における親子関係、異装、ジェンダーは、どのような共時的な現象を持っているか、ということも視野に入れて、それぞれの作品には異なる性質を示しているのかを検討してみたい。そうすることで、より明確に『今とりかへばや』の親子関係と異性装の特異性を炙り出せると考える。

また、中間発表の折にご指摘いただいた、意識的にジェンダーを演じるのか、または、身体的無意識によってジェンダーが決定されるのかという「身体的無意識とジェンダー」という問題についても、本稿では考察が進められなかったので、今後の課題としたい。特に異性装の解除の後も、異性装をしていた時代に習得した交渉方法で物事を運んだり行動をしたりする女君、および異性装の女君の系譜として考えていくと、より広い視野での考察が行えるのではないかなと思う。

更に、王朝物語史の流れで『今とりかへばや』はどう位置づければよいかという問題も考えるべき問題としてある。通時的な物語の発展の推移に従って、このような異性装の物語を検討することは、その発生の時代において、異性装の物語が何を訴え得たのかということを知ることができるのではないかなと思う。

最後に、「母」の問題も考えたい。『今とりかへばや』に現れた母たちは、かなり異質に造型されている。たとえば、女君の母親は、不自然な結婚になると知りながら四の君との結婚を推し進めるし、女君が妊娠出産という苦境に陥っても、四の君の母親とは異なり娘の出産に関わったり父親との間をとりもったりなどはせず、娘の異常さにさへ気が付かず、出産にも関わってこない。このような母親の造型は『今とりかへばや』における親子関係と有機的に繋がるものなのかどうか、また「異質な母」という設定は、物語史においてどのようなものがあり、どのような役割をしているのかなどを考えたい。そして、その成果をもって、平安末期の物語群を読んだ場合に、『今とりかへばや』がどのような容顔を持った作品として立ち現れるのかも考えてみたい。



附表

【表 1】

番号	テキスト	
1	その日になりて、この殿の <u>御しつらひ世の常ならず</u> みがきたてて、姫君渡したてまつりたまふ。東の上も渡りたまへり。大殿ぞ御腰は結ひたまふ (p. 176)	程度
2	「子めかしからん人のむすめの、あやしなど思ひ咎め言ふべきならず。ただうち語らひて、 <u>人目を世の常にもてなして出で入りせよかし</u> 」 (p. 184)	規範
3	あはれ、我も <u>世の常に</u> 身をも心をももてなしたらましかば、かならずかくてぞ下り上らまし、あないみじ、ひたおもてにて身をあらぬさまに交じらひ歩くは現のことにはあらずかし、と思ひ続けるに (p. 188)	規範
4	我こそ契りつたなくてかからめ、姫君だに <u>世の常にてかやうの交じらひしたまはまし</u> を飽かぬことなからまし、 (p. 188)	規範
5	身を嘆きても、ひとり <u>は世の常にておはすと</u> 見てこそはかやうの下り上りのかしづきも <u>せまし</u> 、など、わが身ひとつのことを思ひ続けるに、 (p. 188)	規範
6	女房四十人、童、下仕へ八人、めでたくかしづきたてて参らせたまふに、 <u>世の常なるべき御交じらひ</u> にもあらぬに、そのこととなくて候ひたまはんもそぞろなれば (p194)	規範

7	いとつつましようややましけれど、 <u>世の常のさまに乱れ入り</u> などすべうもあらず。(p198)	規範
8	「かくのみはればれしからぬ御心地を、歩きはべらんほどこそ、いと静心なかりぬべけれ。 <u>世の常に起き上がり</u> などしてこころみさせたまへ。何事も同じ心に聞こえのたまはせて過ぐしつるこそ、いつまでと心細くおぼゆる道のほ だ しにも……」(p. 212)	規範
9	深き心をとどめて、たち帰る御心も思ひ絶えにけるに、かなしういみじとは <u>世の常</u> なり。(P.228)	程度
10	<u>世の常の迷ひ</u> などありと聞かれたてまつらずもがなと(p. 224)	規範
11	「ただ聞こえんままに。かばかり世づかぬ御住まひには何かは。 <u>世の常にもてなしたまは</u> んも違へり。うしろめたくはあるまじきを」(p242)	規範
12	<u>世の常の懸想</u> びてはあらねど、ただあはれに心深く、訪ね入るよしをいみじくなつかしげに言ひなしたまふに、すこし面馴れゆくにや(p244)	規範
13	うち続きたまひぬべき気色なれば、 <u>世の常めかしく引き</u> とどめて、(p247)	規範
14	今の間もおぼつかなきにたちかへり折りてもみばや白菊の花 と、 <u>世の常めきたる</u> を、むげにさやうにとりなし	規範

	気色ばむを、 (p248)	
15	絵に描くとも <u>世の常</u> なりや (p255)	程度
16	気近く馴らしては、宰相中将に懲りにたれば、まめやかにかしこまりて、いかにも <u>世の常の有様</u> を思ひ離れたるさまをすくよかに奏してさぶらふが (p281)	規範
17	「かうのたまふ、いと心憂くわびしく。なかなか <u>世の常</u> に逢瀬難からんことは、とてもありや。(後略)」 (p282)	規範
18	げにいとめづらしうあはれにいみじき心ざしこれこそは <u>世の常</u> のことと思へど、なほ中納言に半ら過ぎは分けてける心なれば、例のことにおぼえなりにたり。(p284)	規範
19	(筆者注：宰相中将が) 例の人は、心ならぬ嘆きむすぼほれながらうち解けぬとてもなほ <u>世の常</u> なりけり。(p287)	程度
20	ここには、「いかならん御心地も、うちまかせたまはんこそ <u>世の常</u> ならめ。時々さし離れたる御離れ居の、心得ず」 (p289)	規範
21	面目ありうれしなどは <u>世の常</u> なりや。(p305)	程度
22	男も女も。頼もしげなきものは人の心かな、この女君見る目有様は子めかしうあてやかにも遠きながら、かくこそはものしたまひけれ、うちうちのわが心こそいかがはせんと思ひなされるれ、よその人聞き、ことの有様、わがためいみじきことなりや、まして <u>世の常</u> ならんなべての人の心いかならん、と思ひやるに、いと憂けれど、いまさらに何	程度

	かはつゆもものしげなる気色を見えん、と思へば、女君にはかけても気色漏らさず (p308)	
23	大将も、あらはしてはあらねど、 <u>世の常</u> よりも思ひやり心細きよしを聞こえたまへば、皇子うち泣きたまひて、(p315)	程度
24	中納言はかなしと思ひて、「これこそは <u>世の常</u> のことなれ。年ごろの御有様は、現しごととや思しつる。もとより直面にし出でてあまねく人に見え交じらはんの御好みに、ことさら交じらひたまひしにこそありけれ。めでたくとも、わが身をあらぬに変へて過ぐしたまへること、あるべきことならず。あやしくとも、かくておはせんこそ例のことなれ。殿にも聞かれたまはん、さらに悪しとよに思ひきこえたまはじ」と言ひ知らせ (p326)	規範
25	ただ消えに消え入るやうなるを、かなしういみじとは <u>世の常</u> なり。(p337)	程度
26	七月ついたち、思ふほどよりはいたくほど経で、光るやうなる男君生まれたまへるうれしさ、 <u>世の常</u> ならんや。(p360)	程度
27	客人の君に見せたてまつりたまふ。うれしとは <u>世の常</u> なり。(p370)	程度
28	そこにはげに悪しからず思すべきことなれど、思ひ捨てたまはんなんことわり知らず恨めしかるべき。 <u>世の常</u> の女御、御息所もものしたまはず、おほぞうの宮仕へざまなめ	規範・常識

	れば、 (P441)	
29	<p>男の御様にてびびしくもてすくよけたりしだに、中納言に取り籠められてはえ逃れやりたまはざりしを、<u>まして世の常の女び</u>、情けなくは見えたてまつらじと思すには、いかでかは負けじの御心さへ添ひていとど逃るべうもあらず乱れさせたまふに、せん方なく、恥づかしうわりなくて声も立てつばかり思いたるさまなれど、人目をあながちに憚るべきにもあらず、 (P450)</p>	規範
30	<p>「<u>世の常の懸想文</u>のさまならんことのやうに、こはかやうに艶なるべきことのさまにもあらぬものを」とのたまふものから (P457)</p>	程度
31	<p>思ひなく<u>世の常のさま</u>にて参りたまひて、後の位にも居たまはんに飽かぬことあるまじき御身を、何となきさまにて御覽ぜられぬぞ、いみじく口惜しき。 (P458)</p>	規範
32	<p>昔もかやうなる宵々は目馴れしかば、今とても<u>世の常の乱り</u>がはしき御もてなしはあるべきならねば、うちたゆみたるに (P477)</p>	規範
33	<p>やがて四月に後に立たせたまふ。儀式有様<u>世の常</u>ならんや。 (p505)</p>	程度

【表2】

番号	テキスト	
1	<p>我はいとうちとけ睦びられず。うち出づるごとには、人の御身の<u>世づかざりけることのみ</u>知らるるに、胸うちつぶるれば、いたくもあひしらはず、言少ななるほど (p182)</p>	
2	<p>父大臣にも聞こえやまへば、をかしと思しながら、なにかは、いかに言ひてかあるまじきこととはものせん、と思して、「いかなるにか、かやうに<u>世づきたる心</u>はゆめにもはべらざめるは。さりともまめやかなる方ばかりは、いとよく人に御覽ぜらるべきものにはべり。」と受けひき申したまひつ。(P183)</p>	
3	<p>「<u>世づかぬ有様</u>をも、異人に言ひあはせたまはんよりはかたみにうち語らひつつこそ過ぐしたまはめ」(P200)</p>	
4	<p>ゆきかかづらふ所もなくいとあまり<u>世づかぬまでまめやかなる</u>を、何事の心尽くしなるにか、と聞くに (P206)</p>	
5	<p>何ごとをかは聞こえたまはん。<u>世づかぬ身</u>の現し様にてながらふるを、(p220)</p>	
6	<p>御気色と見はべりながら、曇りなきみづからの心のままに何心なく御覽ぜられつるを。<u>世づかぬ身</u>の有様をいかに思しなるぞなど、いとほしうこそ嘆かれはべるに (P222)</p>	
7	<p>人はをこがましとも<u>世づかず</u>ともさまさま目を立てて思ふらんこそいみじう恥づかしけれ (p223)</p>	

8	<u>世づかぬ身</u> を知るとてもさのみ思い嘆くべきならぬを (P224)	
9	世づかぬわが身に類ひたまふべかりける契りも心苦し う (P224)	
10	いかに見たまふにかあらん、にはかに、 <u>世づかぬ身</u> を何 故に上を極むべきにか、と思す。 (P239)	
11	「ただ聞こえんままに。かばかり <u>世づかぬ御住まひ</u> には 何かは。世の常にもてなしたまはんも違へり。うしろめた くはあるまじきを」 (P242)	
12	<u>世づかぬ御有様</u> を、今はさるべきなりけりと、かかるさ まにつけてもめでたくすぐれて世に交じらひつきたまへ ば思し慰みはてつるに、うれしくいみじと思したる御気 色、いとあはれなり。 (P252)	
13	「いやで、さはれ。かくてあり果つべき身ならばこそは。 世の人の見思はん言の葉を聞き入れられたてまつるもあ いなし。すべてわが身 <u>世づかぬ</u> 怠りのみこそ、思ふにも 言ふにも尽きぬ心地すれ」と、涙さへ落つる、さばかりも て騒がるるにゆゆしと見る人もこそとわづらはしければ、 立ち退きぬる名残も、女の御心のうちぞいと苦しう消えぬ なかりなれど、人はいかでか思ひ知らん。 (P261)	
14	今は言ひはしたまてもわが身の <u>世づかぬ有様</u> を見知 られぬればたけかるべきやうもなし、心をあらだてても、 あさましき世語りに、さるべき人とうち言ひ出でもいあが	

	<p>はせん、吉野の宮ののたまひしやうに、これもこの世のことならず、さるべき契りにこそはありけめ、と思ひなすに (P275)</p>	
15	<p>「人目もいとあやしかるべし。あが君や、まことにあひ思さば、いとかくいちじるくなもてなしたまひそ。見る目の難く、行きあふ瀬あるまじきことこそかやうには思さめ、明け暮れかくさし向かひ御覽ぜらるるには、何のめづらしきふしにかさも思さるべき。ただ<u>世づかぬをこがましき身</u>の有様をことさらにもて軽めたまふべきなめりとなむ思へば、いとなん心憂き」と向かひ火つくりて怨ずれば (P282)</p>	
16	<p>さりとて、かくのみ纏はしたてられてのみもいとあやしう、<u>世づかぬ身</u>の有様をあらはれぬべけれな、「なほ、人目見苦しからぬほどにを」と契るも、いと堪へがたきことに思ひ惑ひたり (P282)</p>	
17	<p>中納言、この気色はみな隔てなく見聞き知りたまへれば、あやしのことどもやと、をかしうも<u>世づかず</u>もうち嘆かれつつ、今はたまいて女君に見聞き知る景色ばかりも見せず (P285)</p>	
18	<p>「<u>世づかず</u>なりにける身を思ひ知りしほどより、世にあらであらばやと思ふ心は深くなりなら、殿、上の思さんところを憚りて、今まで世にながらへて、あやしき有様を人に御覽ぜられぬること。わが身のはてもなくしなしつる、</p>	

	心憂くいみじきこと」とて、 (P295)	
19	<p>中納言は、さればよ、ただかうぞかし、さばかり憂へかけつとならばひとへにいかなるべきことぞなど思ひ嘆きてもあらず、さてしも、あなたさまの深き心のあやにくに添ふべかめるよ、と思ふは、恨めしうもあれど、そのままに恨み出でんも人わろく<u>世づかぬ心地する</u>に、思ひ忍びつつ、さらぬ顔にいみじくもの嘆かしきままに、心地も直るともおぼえず。 (P299)</p>	
20	<p>かかるほどはなほこの人に従ひて世を背き隠すばかりと、ところせく<u>世づかぬ有様</u>を異人に見扱はれん、あやしかるべかりけりと思ひ直して (P314)</p>	
21	<p>去年の秋つ方より乱り心地のあやしく例ならずもの心細く思うたまへらるるは、世の尽き果てぬるにやと、あるにつけてはいみじく<u>世づかぬ憂さ</u>も思ひたまへ知りながら、ひとへに限りと思ひたまへしほどは、 (P321)</p>	
22	<p>「年月の過ぎはべるままには、かやうにいぶせき有様も、こはいかなりし有様ぞと<u>世づかずあさましく</u>など。かかる類はまたあらじを、いまさらにと言ひて、立ち出でんもあるべきことならず、深からん山などに跡を絶えばやと、のたまふやうにこそ、思ひ知らぬやうにて過ぎはべりぬれ。さりともかくてのみやは。なほいとめづらしう思ひ知られゆきはべるぞや」とて、いみじく泣きたまふ。(p322)</p>	
23	<p>督の君は、大将のはなばなとにほひ限りなき容貌の、い</p>	

	<p>たく面瘦せたるしもいとどうつくしうらうたげなるに、おほやけしくもてすくよけたるほどこそ雄々しくも見えけれ、かやうに思ひしめる屈じたまへるはたをたをとあはれになつかしく見ゆるを、<u>世づかざりける身</u>どもかな、我ぞかくてあるべきかしと、かたみに見交はしたまひて、尽きせずあはれにかなしきことども聞こえ交はしたまひていみじく泣きたまふも、あはれに立ち離れ苦し (P323)</p>	
24	<p>大殿にも聞きたまひて、げにもあらん、あやしと思ひて、いとかしこく心深かりし人にて、<u>世づかぬわが有様</u>を人に見え知られぬ、されはいかでか交じらはんと思ひて、隠れたるなりけり、と心得たまふに、かなしく、かかることぞと言はず、心ひとつに思ひあまり身を失ひてけるよ、と泣きこがれたまふに、 (P330)</p>	
25	<p>げに、とてもかくても<u>世づかぬ身</u>のゆかり、我も人も世の乱れあるべきを思へば (P334)</p>	
26	<p>我さへ失せたりと世の人の聞きはべらん、<u>世づかずあやし</u>くはべれば、女房などにも四五人よりほかは見えはべらねば、ありなしのけぢめ知るもはべらじかし、ただある顔にておはしませ。大殿にもしばしな聞かせたてまつりそ。問はせたまふ折あらば、心地例ならでとを申させたまへ。(P343)</p>	
27	<p>「<u>世づかざりける御有様</u>どもかな」とうち泣きたまひて (P358)</p>	

28	いとよき御学問の師なりと思して、 <u>世づかぬ身の有様な</u> ど聞こえたまへば、 (P358)	
29	「年ごろは <u>世づかぬ身の有様</u> を思ひ嘆きながら、さる方にいかがはせん、ありつきぬべきよと思ひはべりしに、心よりほかに憂きことの出できはべりにしかば、さてあるべきやうもなく、思ひわびて身を隠しはべりにし」さま、気色ばかりうちのたまへる、さなんなり。 (P374)	
30	「そのことにはべる。かくのみなんさらにはべるまじうおぼゆるを、 <u>世づかぬ身なりし</u> ほどのみ、恥づかしさを異人に見え扱はるべきにはあらず、あさましと見え知られにし人にこそはと、ひたぶるに身をまかせてはべりつれど、今は、ながらふべきやうにやと生きとどまりはべるには、かくてはあらじとおぼえはべれど、さりとて、ありし様に身をまたなし変へんことは、あるべきにもあらず。とてもかくても身の世づかぬ、置き所なくおぼえはべる」と、うち泣きてのたまふ。 (P374)	
31	「そのことにはべる。かくのみなんさらにはべるまじうおぼゆるを、世づかぬ身なりしほどのみ、恥づかしさを異人に見え扱はるべきにはあらず、あさましと見え知られにし人にこそはと、ひたぶるに身をまかせてはべりつれど、今は、ながらふべきやうにやと生きとどまりはべるには、かくてはあらじとおぼえはべれど、さりとて、ありし様に身をまたなし変へんことは、あるべきにもあらず。とてもかくても <u>身の世づかぬ</u> 、置き所なくおぼえはべる」と、う	

	ち泣きてのたまふ。(P375)	
32	「殿に、かくてこそありけれとは聞こしめされじ。ただ <u>世づかざりける身</u> をもてわづらひたりけるさまを」(P376)	
33	『なほいと <u>世づかず心憂</u> かりしかば、もとのやうに身を 変へこころみんとてなほしばし隠れたりつる。髪などの生 ふるほど人に見え知られじ』(P379)	
34	「あやしく <u>世づかぬ御有様</u> も見たてまつり知りたまひ にけん人を、あらためてかく離れさせたまはんもあぢきな き御事にはべるべきを、いかに思しめし定めさせたまふ ぞ」とのたまふを(P386)	
35	常に、あらましごとにてだに、直面にあらまほしげにて 過ぎにし方を恋ふると言ひあはめしものを、げにいかにあ さましく思ふらんと、さすがに胸うち騒ぎてあはれなる に、大将は、我にはあらずとあらがひたまふべきにもあら ず、この人の <u>世づかぬものぞ</u> かしと思ふらん心のうちひと つは、いとほしく恥づかしかるべけれど、わが身を世にな くきよめんとて、督の君の御ことをあほつけきやうに人 に見せ聞かせじ、と思へば、「たださ思はせて、御返りは、 心とき人にて見あやむるやうにもぞはべる、これ聞こえた まへ」と、せちに督の君にそそのかしきこえたまへば、う ち見んとこえお恥づかしくいとほしけれど、いとあえかに わりなく辞ぶべきわが身、ことのさまにあらねば、この御 文のかたはらに、(p415)	

36	<p>今は大将殿の御よすがにて、この御里居のほども、中納言はつとさぶらひたまひて、女房などとの言ひうち乱れなどして歩きたまふを、昔よりかたはなるまで馴れ遊びて、かたみに何ごとも隔てず言ひ合はせうち語らひての果て果ては、あさましう<u>世づかぬ身</u>の有様をさへ残りなく見えにし契りも、あはれならぬにもあらぬに、まして若君の何心なかりし御笑み顔思し出づるには、この人の声けはひを聞きたまふたびには、あさからずあはれにて、御涙のこぼるる折々もあるを、見咎むる人もあらばあやしともこそ思へと、押し拭ひまぎらはしたまふ。(P498)</p>	
----	--	--



参考文献

テキスト

石埜敬子校注、訳『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』
2002. 04、小学館

参考文献（五十順）

あ行

1. 阿部秋生ほか校注、訳『新編古典文学全集 20 源氏物語①』小学館、
1994. 03
2. 安藤為章「年山紀聞」国民圖書株式會社『日本随筆全集第六卷』所収、国
民図書株式會社、1927. 07（初出：安藤為章『年山紀聞』、文化元年（1804）
刊）
3. 五十嵐力『平安朝文学史 下巻』、東京堂、1939. 07
4. 池田亀鑑氏「日本文学書目解説（二）平安時代（上）」『岩波講座 日本文
学』1932. 01、岩波書店
5. 石埜敬子「『今とりかへばや』—偽装の検討と物語史への定位の試み—」、
『国語と国文学』82(5)、2005. 05、東京大学国語国文学会
6. 乾澄子「『とりかへばや』物語における「世」」『古代文学第二次』(16)、2007. 10、
古代文学研究会
7. 岡本保孝著「取替ばや物語考」折口信夫『国文学註釈叢書 12』所収、1929. 08、
名著刊行会（初出：室松岩雄編『国文註釈全書十五』所収、1910、国学院
大学出版部）
8. 大原一輝「とりかへばや物語の世界」『語文研究』(13)、1961. 10、九州大
学国語国文学会
9. 大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島正雄校注『新日本古典文学大系 26 堤
中納言物語・とりかへばや物語』、岩波書店、1992. 03

か行

10. 片岡利博「とりかへばや物語考—その趣向と表現—」『文林』(17)、1982. 12、
神戸松蔭女子学院大学

11. 河合隼雄『とりかへばや 男と女』、新潮社、1991.01
12. 菊地仁『『とりかへばや物語』試論－異装・視線・演技－』片野達郎編『日本文芸思潮論』、桜楓社、1991.01
13. 菊地靖彦ほか校注、訳『新編古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』、小学館、1995.10
14. 黒川春村「墨水遺稿」横山重、巨橋頼三『物語草子目録・前篇』所収、大岡山書店、1937.07、(初出：黒川春村『墨水遺稿』、吉川半七、1899.07)
15. 桑原博史校注『新潮日本古典集成 無名草子』、新潮社、1976.12
16. 神田龍身「物語と分身<ドッペルゲンガー>：『木幡の時雨』から『とりかへばや』へ」赤坂憲雄編叢書史層を掘る第1巻『方法としての境界』所収、新曜社、1992.01

サ行

17. 塩田良平『古典の伝統』、育英書院、1942.04
18. 鈴木弘道「性転換とその物語」鈴木弘道『平安末期物語論』所収、塙書房、1968.04
19. 鈴木弘道『『とりかへばや』に現れた愛情－倫理的な愛情を中心として－』鈴木弘道『平安末期物語についての研究』所収、赤尾照文堂、1971.08 (初出：日本文学懇話会『日本文学教室』(9)、蒼明社、1950.09)
20. 鈴木泰恵『『とりかへばや』の異装と聖性－その可能性と限界をめぐって』『狭衣物語／批評』、翰林書房、2007.05
21. ジェラルド・プリンス著・遠藤健一訳『物語論辞典』、松柏社、2004.12

タ行

22. 武田佐知子「男装・女装 その日本の特質と衣服制」、脇田晴子・S.B. ハンレー編『ジェンダーの日本史(上)－宗教と民俗 身体と性愛』、東京大学出版会、1994.11
23. 伊達舞『『今とりかへばや』の<家>への志向－親子間の<愛情>描写から－』『国文目白』(50)、2011.02、日本女子大学国語国文学会
24. 田辺つかさ「取りかへばや物語の怪奇性その他」『鹿児島日本文学』(5)、1932.05、鹿児島日本文学研究会
25. 伴資芳「閑田耕筆」国民圖書株式會社『日本随筆全集第六卷』、国民図書株式会社、1927.07、(初出：伴資芳『閑田耕筆』享和元年(1801)刊)

ナ行

26. 中村真一郎「とりかへばや物語」小田切秀雄『古典発掘』、真善美社、1947. 08
27. 西本寮子「『今とりかへばや』の二重構造」『広島女子大國文』(11)、1994. 09、広島女子大学国文学会
28. 西本寮子「演じ続ける女君—『今とりかへばや』における罪の問題—」物語研究会編『物語「女と男」新物語研究3』、有精堂、1995. 11

ハ行

29. 長谷川福平『古代小説史』、富山房、1903. 09
30. 藤岡作太郎「国文学全史平安朝篇」秋山虔ほか校・注『国文学全史2 平安朝篇』、1974. 02、平凡社（初出：藤岡作太郎著『国文学全史平安朝篇』、東京開成館、1905. 10）
31. 藤岡忠美ほか校注、訳『新編古典文学全集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』、小学館、1994. 09
32. 服藤早苗『平安朝の母と子』、中央公論社、1991. 01
33. 氷室冴子『ざ・ちぇんじ!』、集英社文庫—コバルトシリーズ、1983. 02

マ行

34. 宮田和一郎『物語文学攷』、文進堂、1943. 03
35. 森本葉子「『とりかへばや物語』父左大臣の期待—失望と慰め—」『愛知淑徳大学国語国文』(23)、2000. 03、愛知淑徳大学国文学会

ヤ行

36. 安田真一「女」の世界あるいは〈女〉の不幸—『とりかへばや』四の君をめぐって— 古代文学研究会編『古代文学第二次』(4)、1995. 10、古代文学研究会
37. 安田真一「〈女〉と〈男〉の世界—『とりかへばや』四の君をめぐって—」物語研究会編『物語〈女と男〉新物語研究3』、有精堂、1995. 11
38. 安田真一「『とりかへばや』の交換可能の論理—ジェンダー論の視座から—」日本文学協会『日本文学』(46-2)、1997. 02、日本文学協会
39. 安田真一「〈主体性〉を捏造する〈ことば〉と〈身体〉—『とりかへばや』の女君と宰相中将をめぐって—」河添房江ほか編『叢書想像する平安文学第3巻 言説の制度』、勉誠社、2001. 05

40. 山内直実『ざ・ちぇんじ!』、白泉社、1988. 12
41. 山口佳紀・神野志隆光校注、訳『新編古典文学全集 1 古事記』、小学館、1997. 06
42. 山下昌弘 編『家族本 40—歴史をたどることで危機の本質が見えてくる』
東京印書館、2001. 04

